

東京工業大学保健管理センター紀要

Journal of Tokyo Tech Health Support Center – Volume 9

第 9 号

(令和 3(2021)年度)

目 次

I. 相談・教育活動

* 令和3年度・メンタルヘルス・カウンセリング活動報告……………	2
* 令和3年度・グループ活動・コミュニティ活動……………	8

II. 論考

コロナ禍初期・蔓延期における授業実践と研修実践 ー学生相談・保健管理から発信するオンラインメッセージー 齋藤憲司, 高田 純, 道又紀子, 安宅勝弘, 丸谷俊之, 福岡俊彦, 桶谷雅人, 三平満司……………	17
---	----

本学大学院における休学, 退学および留年の状況について (第19報) ー「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査 (令和2年度)」との比較よりー 安宅勝弘, 丸谷俊之……………	40
--	----

感染症の時代に生きること ～正確な情報を常に把握・理解し、自己管理が重要な時代に～ 福岡俊彦……………	51
---	----

コロナ禍と英会話 丸谷俊之……………	54
-----------------------	----

ピアサポート活動における研修の実際と展開 ー持続可能で効果的な活動のためにー 高田 純, 山田恵美子, 齋藤憲司……………	56
---	----

学生の支援におけるSNS相談の可能性 桶谷雅人……………	63
---------------------------------	----

III. 業績

2021年1月～12月 業績一覧……………	69
-----------------------	----

I. 相談・教育活動

* 令和3年度 メンタルヘルス・カウンセリング活動報告

1. はじめに —コロナ禍の中で、新たな相談体制へ—

本稿では、保健管理センターの活動の柱の1つである相談活動（メンタルヘルス相談及び心理カウンセリング）について、令和3年度（2021年度）の概要をまとめ、その特徴について報告する。

相談体制としては、精神科医・専任教員2名（安宅・丸谷）が精神医学に基づいた「メンタルヘルス相談」にあたり、心理カウンセラーとして専任・特任教員3名（齋藤・高田・桶谷）が臨床心理学をベースにした「カウンセリング」に従事している。また、専任・特任のみでは対応しきれないため、週1～3日の非常勤カウンセラー（特任専門員）をお迎えして相談体制を補強している（下表：Drは医師、Coはカウンセラーの略）。なお、カウンセリング体制においては、長年に渡ってすずかけ台の相談体制を支えてきた道又特任教授が令和2年度末をもって退任され、令和3年4月より学生支援センター学生相談部門の専任教授として新たな職責を担っている。後任として、同年10月より桶谷特任助教が着任しており、すずかけ台の新たな相談体制の構築を模索している。いよいよ過渡期を迎えた本学の相談・支援体制が、持続的に発展・充実していくための礎石づくりに着手している状況と言える。

また、世界的にもパンデミック状況となった新型コロナウイルス感染症の猛威は令和3年度も続いており、感染症対策に留意しながらの、学生・教職員へのハイブリッドでの相談活動が継続されている。

<表1. メンタルヘルスとカウンセリングの機能分担(令和3年度)>

	メンタルヘルス	カウンセリング	相談件数
	(精神医学に基づいた診察・治療)	(臨床心理学に基づく相談・適応援助)	
大岡山	安宅Dr(教授) (丸谷)	齋藤Co(教授)・高田Co(講師) (桶谷/宣・片岡・河西)	5,152件
すずかけ台	丸谷Dr(准教授) (安宅)	桶谷Co(特任助教) (齋藤・高田/岡安)	1,330件
相談件数	2,411件	4,071件	6,482件

相談件数は過去最大規模の減少となった令和2年度から一転、コロナ前と同水準まで回復している。学生生活の段階的な再開に伴い、顕在化してきた相談ニーズに対応してきたからこそであると考えられる。(なお、感染拡大防止のため最小限に控えられていた医師及びカウンセラーの両キャンパスの往復は部分的に再開されている。)

2. 本学における相談活動の特徴 —相談件数のV字回復—

令和3年度の相談活動における特徴について、図表を参照しつつ順次まとめて概観していこ

う。集計にあたっては、「図1（相談件数の推移）」では、保健管理センターとしての相談活動の全体像を示すべく医師担当分とカウンセラー担当分を一括集計し、他の図表については、専門性の異なる精神科医とカウンセラーの機能分化を考慮して、別個に集計・表示を行っている。

なお、集計に際しては、直接対面しての面接（感染防止のため原則30分+15分換気）のみならず、コロナ禍ゆえ重要性を増したメディア（電話・オンラインでは疲労を考慮してやはり原則30分）を通じての相談も（単なる連絡ではなく）面接に相応する内容が含まれると判断される場合には相談件数として算入している。

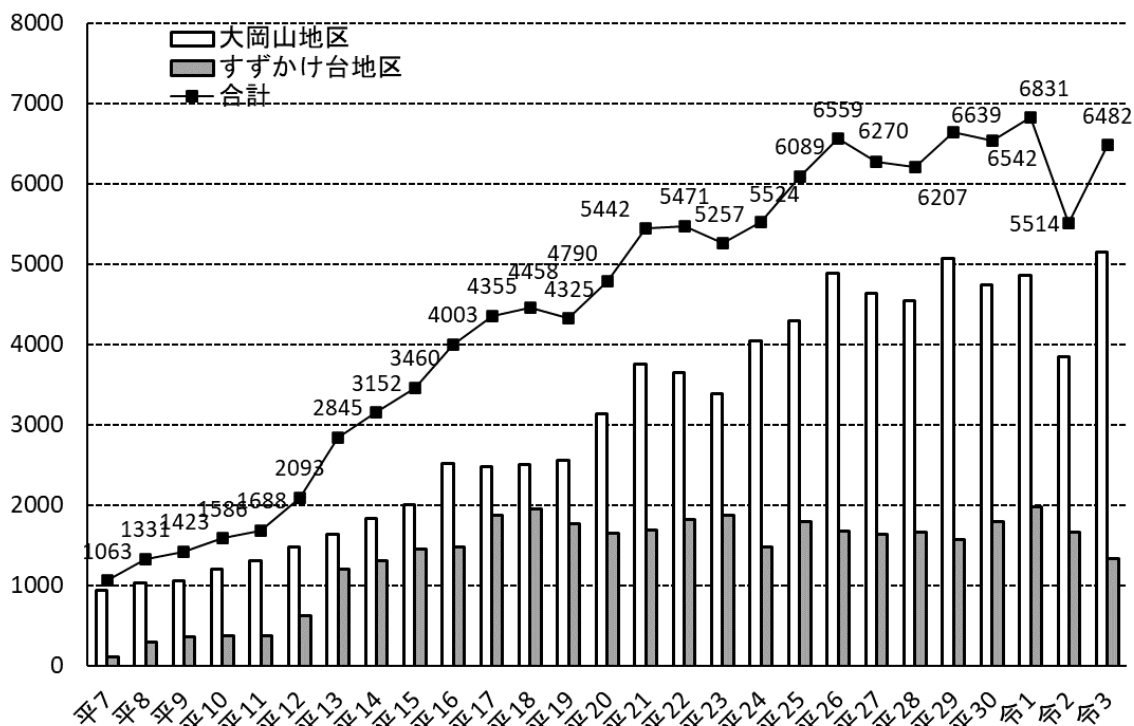


図1 相談件数の推移（延べ件数）

<図1：相談件数の推移（のべ件数）より>

「相談件数（のべ件数）」は図1から窺えるように、令和3年度は令和2年度の落ち込みから急上昇していることが分かる。先述の通り、道又特任教授が退任され、桶谷特任助教着任までの4月～9月不在の時期があったにも関わらずの増加である。これは、学生生活の段階的な再開に加え、キャンパスを越えて学内ニーズに最大限応えるべく支援活動を展開してきたからこそであろう。令和2年度においては感染症が拡大し始め、蔓延状況へと移行する中で、改めて構成員の置かれた生活状況や心理状態を見渡し、センターとして提供可能な相談方法・ツール積極的活用に関する検討と試行を繰り返してきた。これまでの実績をもとに本年度も、相談方法・ツールの持続的な活用が展開されており、安定的に支援を提供するためのハイブリッド相談体制が確立されたといつてよい。

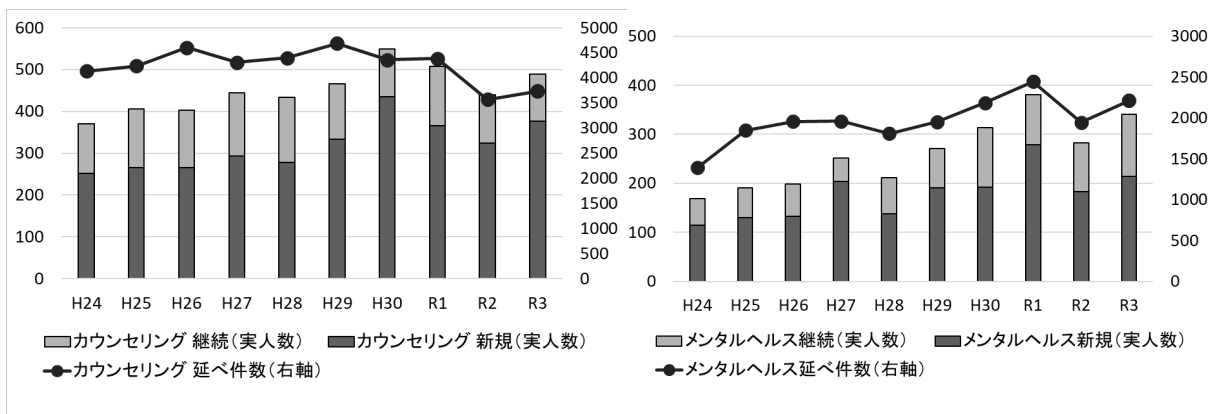
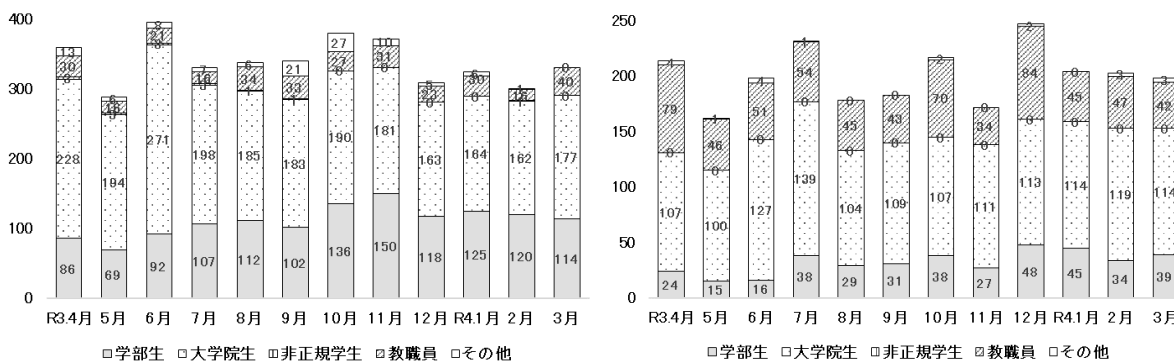


図2 相談事例数の推移（実人数（左縦軸）・のべ件数（右縦軸））

<図2：相談事例数の推移（実人数）より>

今回は「相談事例数（実人数）」（図2）の推移を見てみよう。実人数もまた（カウンセリング・メンタルヘルス相談ともに）大幅な減少から一転、令和3年度は大きく増加していることが分かる。中でも、新規来談事例はカウンセリング・メンタルヘルス相談ともに歴代で2番目に多く、コロナ禍による出校制限等が緩和されたことが大きく作用している。一方、継続相談に目を転じると、メンタルヘルス相談では過去最多となっており、コロナ禍で心身への医療的配慮を持続的に提供することに気を配ってきた状況が窺える。カウンセリングでは令和2年度と同程度の継続相談があり、長期的な支援を要する学生が一定数存在することを示している。



<カウンセリング>

<メンタルヘルス相談>

図3 月別相談件数：対象者別・専門性別（のべ件数）

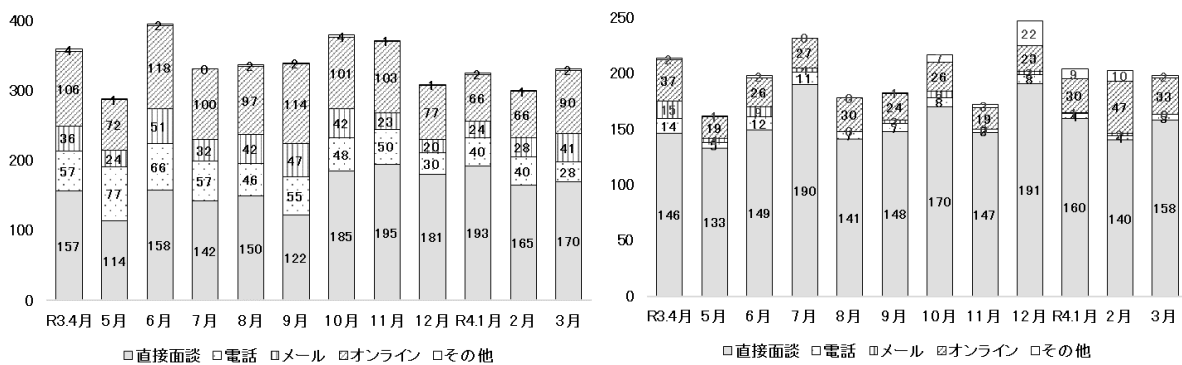
<図3：月別相談件数・対象者別・専門性別より>

今回は、月別の相談件数について、すなわち令和3年度の1年間の動向を心理カウンセリング・メンタルヘルス相談別に見渡してみよう。

まず心理カウンセリングにおいては、出校制限の影響を受け右肩上がりとなった令和2年度とは異なり、常に高い水準のグラフとなっている。特徴的なことは前期に比して後期に学部生の相談件数が大幅に増えている点であろう。オンライン授業から出校しての対面授業の比率が

増えていく中で、生活環境の変化についていけず要支援の学生の問題が顕在化してきた。

一方、メンタルヘルス相談では、月を追うごとに緩やかに徐々に増加傾向を示しているが、毎月ごとの変動は小さく、精神医学的な専門性に基づいて安定的にサポートを提供している様子を読み取れる。対象者は、大学院生が大半を占めており、学部生は少ない一方で、教職員への本人相談がかなり多くなっている。産業医としての信頼感が背景にあると考えて良いが、長期化するコロナ禍状況が教職員の心身の健康に影響を及ぼしている側面も否定できないだろう。(なお、学生をめぐるの関係者(教職員や親・家族、学外機関等とのコンサルテーションは、当該学生への相談のべ件数としてカウントしている。)



<カウンセリング>

<メンタルヘルス相談>

図4 月別相談件数：方法別・専門性別 (のべ件数)

<図4：月別相談件数・方法別・専門性別より>

月別相談件数を、今度は方法別に概観してみよう。前回(令和2年度)より初めて掲載しているグラフであり、コロナ禍ゆえにこれまでの基本形態であった対面での相談が難しくなった状況に応じたものである。

カウンセリングでは、4月～9月では直接面談が最多ではあったものの、令和2年度から開始したオンラインや電話、メールなど遠隔相談の合計を見ると直接面談よりも多かった。しかし、出校時間の増えてきた10月以降、直接面談の比率が増えて過半を占めるようになっており、主方法としての直接面談、遠隔相談は補助的なツールという形でのハイブリッド相談体制が安定に至ったとあってよいだろう。

メンタルヘルス相談では、直接面談が一貫して7割以上を占めており、感染防止に最大限留意しながら対応を継続してきた日々となっていた。その上で、電話・メール・オンラインといった情報ツールを随時・臨機に併用している。(なおメール相談は基本的に教職員に対してのみとしており、本人相談と学生をめぐるコンサルテーションとして用いられている。)

3. パンデミック状況と相談活動のこれから ～将来構想とも関連しつつ～

1) コロナ禍における相談システムの定着

昨年度(令和2年度)は新型コロナウイルス感染症の蔓延によって、戦後史の数十年を振り

返っても例を見ない社会状況となり、大学教育のあり方が大きく揺さぶられ、相談活動もまた新たな課題に正面から対峙していく1年であった。そして、今年度（令和3年度）も続くパンデミック状況ではあるが、多くの人が慣れて「日常化」していると言っても良い状況において、日々集積しているであろう見えない疲労にどのように対応していくかが大きな課題となっている。

学生たちと、あるいは教職員や親・家族等の関係者と、直接にお目にかかって丁寧なコミュニケーションを積み重ねていくことから、学生の成長・回復・適応をじっくりと支援するとともに、関係者を結び付ける支援ネットワークを形成するという保健管理センターの相談活動もまた、感染症対策に留意しながらの例年とは異なる様相が続いている。

カウンセリング並びにメンタルヘルス相談は、同じ支援機関に在籍する専門スタッフとして最適なあり方を模索していき、共通して留意すべきこととそれぞれの専門性に応じた独自の方略の双方を勘案しつつ相談活動を行っている。例えば、本稿の図4に示されているように、カウンセリングにおいては各種ツールを活用するハイブリッド相談体制を確立しつつも、状況に応じてその使用比率の変動が大きいのに対し、メンタルヘルス相談では（各種ツールを併用しつつも）直接面談を揺るぎなく堅持している。また、カウンセリングでは感染状況と大学の方針に連動して保健管理センターにおける相談活動の「基本方針と対応フロー」の修正・変更を重ねてきたが、令和3年度は大きな変更点はなく、コロナ禍における対応システムが定着しつつあるといえる。

コロナ禍における相談方略の定着に向けて持続的に検討を続ける姿勢と連働して、可能な限り関連学会や研究集会において研究発表や話題提供を行なっている。次節「グループ・コミュニティ活動」や巻末の「業績一覧」に示されているように、むしろ従前よりも活発に研究活動を展開してきたと言っても良い状況であり、さらにはコロナ禍での相談活動が長期化し、苦労を重ねている各大学の関係者とも多岐に渡る交流を進めることとなった。

2) 相談体制の充実に向けた組織的課題 —with コロナ/after コロナを意識しながら—

前号では、昨今の大学および高等教育をめぐる政策に連動して、下記の3つの大きな課題が明確になってきていることについて触れた。

- a) 留学生相談・英語対応カウンセリングの充実に向けて
- b) 障がい学生支援：バリアフリー支援部門との役割分担・機能分化に向けて
- c) 多様性（ダイバーシティ）を包含するキャンパスに向けて

これらはコロナ禍の渦中にあっても、変わらず重要なテーマとして考慮されてきたが、まず a) については、令和2年度と比べて来日することのできた留学生が増加し、対応件数も増えている状況にある。相談の現場では、感染症対策（隔離）による疎外感、学内/研究室での交流が激減することによる深刻な孤独感が訴えられ続けている。人との繋がりを求めての来談が増えており、心身両面のケアが急務となっている。一方、留学生支援にかかる組織的・人間的な課題は大きな進展は見られないままであり、改めて重要な課題として提起しておきたい。

b) については学生支援センターバリアフリー支援部門に配置されたコーディネーター等の

ご尽力で急速に充実しつつあるが、連携事例に加えて保健管理センターのみで支援を続けている（発達障害を主とする）障がい学生の事例数もまた増加傾向にある。日々の相談では、オンライン講義の受講のしやすさやオンライン相談でのサポートによって単位取得や生活状況の改善が進んでいた学生が、対面授業が再開されることにより、生活リズムが維持できなくなり不調をきたすなどの問題が顕在化している。

c)においては、各C o等の個別対応とその時々での関係者ネットワークでの支援が中心であったが、令和2年度に設置された「ダイバーシティ推進室」やリベラルアーツ教育研究員の有志で構成された「ジェンダー・多様性WG」など、大学全体としての取組みを創出していくアクションがみられた1年であった。今後ますますの進展が期待されるとともに、カウンセリングやメンタルヘルス相談の立場からは“不適應に陥っている学生は（一時的に）マイノリティの状況にある”という認識のもと、孤独や孤立から歩み出していけるよう丁寧な個別支援を続けていきたいと考えている。

本学全体としての学生支援体制はこの間も着実な歩みを続けている。近年、大幅に改組された学生支援センターにおいては、保健管理センターからも三平センター長と齋藤教員を中心に全面的に関与して、学生相談部門と未来人材育成部門の2部門体制の確立と発展に貢献している。特に前者においては、本年度から道又カウンセラーが専任教授として着任し、学生相談室・電話相談デスク・バリアフリー支援室を統括する役割を担っている。大きな変化の時期にあって、学生支援の大きな柱としての存在を確かなものとしつつある。今後とも、保健管理センターと学生支援センターは本学の学生・教職員の適応支援と交流促進に資するべく、そして本学の教育目標と将来構想の具現化を支えるために、“同じ志を持って、異なるアプローチで臨む”連携・協働のパートナーとして活動を展開していくことになるだろう。

さて、保健管理センターはコロナ禍対応の最前線として今年度も引き続き貢献を続けてきた。スタッフ自身の健康と安全を守りつつ、いかに状況を正確に捉え、より適切な対応を行なっていけるかという粘り強さが求められた1年でもあった。対面での人的かつ専門的な交流を通じて構成員の成長・回復と適応を支援してきた心理カウンセリングやメンタルヘルス相談にとっても試行錯誤の連続であったが、安定的に支援を提供するための相談体制はほぼ確立したと言ってよいだろう。一方、コロナ禍が長期化することで深刻化しかねない課題や、after コロナに向けて制限が緩和されるがゆえに生じるであろう課題にどのように対応していくか、今後とも望ましい相談体制の設定・調整について検討を続けていく必要があると認識している。

(グラフ：桶谷)

(集計：安宅・丸谷／桶谷・高田・齋藤)

(文責：高田・齋藤)

* 令和3年度 グループ活動・コミュニティ活動

保健管理センターにおける「相談・教育活動」は、学生への丁寧な個別相談を中心に据えて展開されており、その概要は前節「メンタルヘルス・カウンセリング活動報告」にてまとめている。新型コロナウイルス感染症の感染拡大・蔓延は2年間の間に何度かの波を繰り返しながらも完全な収束は見通せず、対面面談に加えてオンライン相談等のメディアを組み合わせたハイブリッド体制で相談活動を展開するとともに、教員スタッフが中心となって展開するグループ活動・コミュニティ活動もオンラインを組み込みながら臨機かつ柔軟に様々な検討と工夫を加えた上で実施している。

本稿では、コロナ禍2年目の日々を集積された臨床的な知見や体験を活用した種々の活動について、令和3年度の実践を整理して提示する。我々の基本姿勢は揺るがず、まず知見や体験を学生へフィードバックすることを心がけているが、同時にコロナ禍での教育・研究・運営に苦労を重ねている教職員への話題提供や大学全体に対する提言等も行い、さらには学会や各種研究会等を通じて全国の関係者・関係機関との意見交換・情報共有も心がけている。以下、記述の枠組みとしては例年にならって「学生対象の活動」「教職員対象の活動」「組織的動向」「全国的な企画・行事への貢献」という4つの側面から、令和3年度の活動を順次ふりかえってみることにしよう。

1. 学生対象の活動

①講義の担当（正課での成長支援と交流促進/工夫を凝らしたオンライン授業）

1) 「教養特論：人間関係論」（齋藤・安宅・高田）

～リベラルアーツ研究教育院のもとで展開されている講義であり、令和3年度も大学の方針に合わせてオンライン開講となっている（第3Q）。受講生は30名弱と少なめではあったが、臨床心理学並びに精神医学の専門性に基づいて、オンラインでも共有しやすい話題を精選し、画面提示にいつそう工夫を凝らすとともに、適宜のグループワーク（Zoom/ブレイクアウトセッション機能）や各回の小レポートへのコメント等で可能なかぎり双方向の講義となるよう心がけた。受講生との交流は学生の現状を知る上で貴重な機会となっており、また学生たちからもコロナ禍での学生生活やストレス対処に際して非常に有意義であった旨の感想が聴かれた。

2) 教職科目への参画（齋藤）

～「教育相談論」（第2Q）はオンラインにて思春期の心理的特徴と援助的関わり、特別支援教育や発達障害等について概説（学部1年生中心だが大学院生まで計数十名受講）、侵襲的にならないよう工夫したグループワークも設けている。「教育実践演習」（第3Q）は感染防止に配慮しつつ対面でロールプレイを指導（すでに教育実習を終えた4年生～大学院生10数名）、12月週末の集中講義であったが、学生たちの参加意欲が非常に高く中身の濃い実習となった。

3) 健康・ウェルネス科目への参画（福岡）

例年内科医の立場から福岡教員が「身体教養科学」「健康科学概論」を分担担当（学士2～4年生を中心に前者は約90名、後者は約200名規模）してきた。ところが新型コロナウイルス

感染症の深刻な蔓延に伴い、呼吸器内科医でもある福岡教員は、学内の感染症対策やこれに伴う労務管理・出校登校管理等についての助言・立案に専従することになった。このため令和2年度は「身体教養科学」のみで担当も1回となっていた。令和3年度は「身体教養科学」「健康科学概論」両方の講義を各1回ずつ担当することになり、学士2～4年生を中心に前者は約90名、後者は約200名程度を対象に最新の内容（当時）を盛り込んだ「新型コロナウイルス感染症について」と題した内容でオンライン講義を60分間行ったところ、講義時間終了まで質問が絶えず、教科担当教員からは好評であった旨連絡があった。

②グループ活動（学生支援センター自律支援との連働 / やむなく休止企画も）

近年、独立した企画としてグループ活動を主催することが難しい状況が続いており、担当講義や研修にグループワークや心理教育的プログラムを組み込むとともに、学生支援センター未来人材育成部門自律支援実施委員会の諸活動（ピアサポート、学勢調査、ボランティア・グループ等）に関与して、自己理解と相互交流を促してきた（学生支援GPより継続して齋藤教員が参画し、高田教員も関与を深めている）。しかるにこれらの活動も、コロナ禍のために課外活動に制限が加わったため、昨年度よりオンラインでの活動を工夫する等での新たな展開を続けている。

一昨年度より開始した発達障害のある学生たちを対象としたショートケア・プログラム（AMED：国立研究開発法人日本医療研究開発機構の分担研究開発課題「大学において実施可能な発達障害を有する学生への支援プログラムの検討・開発と試行」の一環として）は、昨年度に続き本年度も新型コロナウイルス感染症拡大のため休止状態にあるが、再開に向けた検討を他共同研究機関と行っている。

感染防止に配慮した対面企画の再開のタイミングを見計らいつつ、当面はオンラインでも可能な企画を考慮して、困難を抱えた学生たちが学生生活上のスキルを学ぶとともに、仲間づくりや相互支援の機会にもなる企画を提供していくべく検討を続けていきたいと考えている。

2. 教職員対象の活動

③「カウンセリング懇談会」（オンラインでの活性化/拡大会合では学生たちとともに）

学生対応や教育指導に関する諸課題について教職員が自由に意見交換する「カウンセリング懇談会」については、長引くコロナ禍を考慮して例年とは大きく異なる開催形態を試行することとなった。すなわち夏季（7～8月）開催分を秋季（10月）にずらせて学生・教職員が一堂に会する拡大カウンセリング懇談会（オンライン）としたのである。一方、春季（3月）については教職員のみ参加として、日頃の経験や所感を提示し合うオンライン開催としている。

***第78回（拡大）カウンセリング懇談会**＝オンライン開催/健康衛生週間・特別講演会＝

日時：令和3年10月20日（水）17時～18時30分

*テーマ：『コロナ禍におけるストレスマネジメント

～学生と教職員を結ぶ拡大カウンセリング懇談会～』

【第1部：保健管理センターの相談活動とメッセージ】

1. 相談活動から見た学生のみなさんの心理状況
2. 感染症に負けないリフレッシュの工夫

3. パンデミックとメンタルヘルスの留意点

【第2部】学生・教職員の相談経験とメッセージ

4. 教員OBとして電話相談デスクを体験して思うこと
5. ピアサポーターとしてみなさんに伝えたいこと

*第79回カウンセリング懇談会＝オンライン開催＝

日時：令和4年3月17日（木）15時～17時

*[テーマ：学生の個性・多様性に応じた相談・支援]

【第1部：カウンセリング活動状況から～コロナ禍における/ニューノーマル状況での～】

- ・保健管理センター
- ・学生支援センター学生相談部門

【第2部：多様性あるキャンパスを目指して～マイノリティ学生への支援～】

- ・ジェンダー・多様性WGの発足と活動状況
- ・保健管理センターから見たマイノリティ支援
- ・学生支援センター学生相談部門におけるマイノリティ支援

【第3部：個別性の尊重と学生交流の促進のために】

- ・国立・公私立大学死亡学生実態調査・自殺対策状況調査について
- ・不登校・ひきこもり学生へのアプローチ/ハラスメント防止
- ・学生の自主的活動の実際と交流促進：学生応援フォーラムから

第78回は初めて学生たちにも参加を呼びかけてのオンライン開催であり、学生・教職員それぞれ参加者がどのくらい集まるか、意見交換がうまく噛み合うのかを思案しつつの呼びかけであったが、参加申込みは約160名、当日の参加は103名とたいへん盛況であった。保健管理センタースタッフ及び学生支援センターで相談活動に従事するスタッフからの現況説明に加えて、退職教員の立場からお話くださった電話相談デスクでの所感、ならびに学生の立場から仲間の力になりたいと願うピアサポーターたちの活動紹介は、参加者に大きな感銘を提供している。開催後の感想アンケートからは、学生からも参加者からも高い評価を頂いていることが確認され、思い切って拡大会合を開催して良かったという思いをスタッフ一同で共有している。

第79回については、教職員のみでの参集に戻して、ざっくばらんに参加者が語り合えるよう配慮している。年度末の慌ただしい時期にもかかわらず、80名ほどの教職員が参集され、コロナ禍2年めとなった令和3年度の教育と学生支援を振り返るとともに、来たる令和4年度の本学と学生たちの状況を見渡しての意見交換が活発に展開されている。特に今回は、学内で苦労を抱えることの多い学生層に焦点を当て、新たに発足したジェンダー・多様性WGの先生がたの全面的な協力を得て、基本的な視点や姿勢を共有するとともに、相談・支援の現場からの話題提供と合わせて、より実質的なマイノリティ支援のあり方について意見交換することができ、貴重なひとときとなった。

④全学・各部局の研修会講師（オンラインによる各種研修の隆盛へ）

昨年度は本学各部局からの依頼がかなり減少していた各種研修であるが、今年度はオンライン開催での講師依頼がかなり増え、各教員が多様なレクチャーを担当することとなっている。また安全管理上必須のものについてはwebによるオンデマンド視聴やHP上での資料掲示が可能な形態をとった研修も提供されている。表1に本センタースタッフが令和3年度に講師・企

画・運営等を担った研修会を一覧にまとめてあるのでぜひ参照されたい。オンライン研修が参加しやすい安定的な実施形態として定着し、多様なニーズが保健管理センターに寄せられていることが見てとれよう。

コロナ状況の中で、学生たちに、あるいは教職員や関係者に、相談・支援の現場から知見やスキル、メッセージを発信する機会は必須と思いつつも、直接には出会えないというもどかしい状況が続いていたが、オンラインを含むハイブリッド相談体制の進展とともに、多様な形態で多くの学生・教職員の対応にあたってきたからこそそのテーマや研修内容が整い、提示する仕組みやスタイルも徐々に確立しつつあると言って良いだろう。特に、執行部と協力しての全学的な発信（理事・副学長（教育担当）：水本哲弥先生と齋藤カウンセラー）では「学生たちとの日常的な連絡・交流」を促し、一方で「ハラスメント防止」を訴える貴重な機会となっている。また、各部局からの具体的な研修依頼も種々寄せられるようになってきていることもありがたいことであった。

3. 学内の組織的動向

⑤学生支援センター改組と積極的な関与（両センターの深い連携・協働で全学へ貢献）

本学における学生支援関連の諸機関を有機的に再編し、活動・業務の充実をはかるため、第1期中期目標・中期計画に沿って「学生支援センター」が平成18年度に発足し、第2期、第3期にて適宜改組され、平成29年度には6部門にまで拡大・多様化した後に、学生支援のさらなる展開を期して今年度より6部門を集約して「学生相談部門」と「未来人材育成部門」の2部門からなる新体制が発足している。両部門に専任教授を配置するという画期的な改組案であり、立ち上げや初期の運営には三平センター長並びに齋藤教員が集中的に参画している。また学生相談室・電話相談デスク・バリアフリー支援室を統括する「学生相談部門」には、すずかけ台キャンパスの相談体制構築に貢献してこられた道又教員が専任教授として着任し、保健管理センターとの連携・協働がいっそう進むこととなった。今後とも、両センターが「同じ志を持って異なる専門性で対応する」姿勢を共有して、本学構成員にさらに貢献していくべく工夫と発信を進めていく所存である。またこれまで深く関与してきた自律支援については、「未来人材育成部門」のもとで継続され、齋藤教員に加えて高田教員もピアサポートの支援等を通じて本格的な関与を行っている。

⑥コロナ禍での大学全体への貢献（感染状況に応じた安全管理への強い関与）

新型コロナウイルス感染症の国内外の深刻な蔓延が継続する状況に鑑みて、令和3年度も引き続き本学の対応方針の策定ならびに構成員の安全・安心に貢献すべく、保健管理センター教職員は国内外・学内外の動向を注視しながら、大学への助言や各種協議、啓発活動を進めている。特に内科医で呼吸器内科を専門とする福岡教員は、国内外・学内外の情報を収集し、学内の感染症対策に対する助言・立案や感染症対策に伴う労務管理・出校登校管理等についての助言・立案を行っている。また、看護保健スタッフは感染状況や検査に関する情報の集約と発信に常に気を配り、感染症の学内対応等の実務を関連部署と連携して行っている。大学執行部との協議や意見調整には三平センター長が頻回かつこまめに対応している。このようにまさにス

タフ一丸となって昼夜を問わない体制にあったと言っても過言ではない。

また、労働安全衛生法にもとづく大学全体の環境・安全に貢献すべく、三平センター長、安宅・福岡・丸谷の各医療系教員がキャンパスマネジメント本部総合安全管理部門に関与しており、さらに上記4名と齋藤教員が健康衛生部会に参画している。以上に加えて、安宅・福岡・丸谷の各教員は、学生を対象とした学校医としての役務に加えて、産業医として各キャンパス（事業所）の地区安全衛生委員会委員を務め、分担して職場巡視を行っている。令和3年度の職場巡視は新型コロナウイルス感染症の影響で、大岡山地区は蔓延が落ち着いた時期に1回（2か所）のみであったが実施できた。すずかけ台地区では、感染状況をみながら計5回実施した。田町地区では附属高校の職場巡視を、通常通り毎月実施した。

また、昨年度に組織された全学横断的な「新入生特別チーム」が効果的な活動を展開できたことから、令和3年度の新入生に対しても同様に活動を行い、スムーズな学業開始と適応支援を図っており、齋藤教員が引き続き参画している。センター全体としても「新入生 welcome 窓口」の一翼を担って、新入生健康診断の実施はじめ広く心身の健康支援に対応している。

4. 全国的な企画・行事等への参画・貢献

⑦「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査」の実施・活用 （全国的貢献と本学の特徴把握）

休学・退学等について、大学院生の動向を全国の国立大学に依頼して調査するもので（国立大学保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会「大学院学生休退学調査」研究班、班長：安宅教員、丸谷・齋藤の両教員が班員に）、令和3年度内には第18回調査（令和元年度分）の集計と結果報告を行った。なお、今回は新型コロナウイルス感染症の影響を調べるため、死亡実態調査については、文部科学省の後押しのもと、4月に迅速調査を行い、結果を公表した。学生数統計調査および休退学実態調査については、例年どおりに実施し、公表した。また、並行して第19回調査（令和2年度分）の配布・回収作業を、丸谷・安宅両教員を中心に行なった。コロナ禍にあっても、これまでの実績と経験を活かして比較的スムーズに進められているが、全国の国立大学大学院と連絡を取り合って資料を整理していくプロセスは1年がかりの作業となっている。

これらの成果は、やはり丸谷・安宅教員が中心となって「全国大学保健管理研究集会」および「全国大学メンタルヘルス学会」にて概要を発表するとともに、本学の特徴を明らかにすべく詳細に検討した結果を「カウンセリング懇談会」等において話題提供して参加教職員との意見交換のきっかけとしている（また、本紀要の「論考編」にも安宅・丸谷によるまとめと考察が連続的に掲載されているのでぜひ参照されたい）。

⑧全国会合・研修での講師／他大学研修会の講師等（オンラインでの貢献と外部評価）

各教員は、実践をもとにした知見を共有すべく、本務に差し障りない範囲で種々の全国的行事に講師として協力してきたが、やはりコロナ禍によって中止もしくはオンライン開催への変更がなされる事態となっていた。（独）日本学生支援機構の行事としては「心の問題と成長支援ワークショップ」もオンライン開催に変更となり10月末に2日間開催、安宅教員が講師とし

てレクチャー及び実習指導を行った。また日本学生相談学会による「全国学生相談研修会」には齋藤教員が2日間の実習を含む研修を、安宅教員が1セッションの小講義を担当している。

また各教員は、関連学会や各大学からの依頼・招待に応じる形で「学生支援」や「ハラスメント」「メンタルヘルス」等に関する講演会や研修会の講師を務め、また外部評価委員等の役務を担い、オンラインに移行されてもなお積極的に交流を図っている。各大学ともコロナ状況におけるオンライン研修を活性化させ始めたこともあって、かなりの数の依頼が寄せられており、すべての要望に対応することは困難な状況であったが、全国的な会合や他大学との交流を通じて学べることは多く、これらを再構成して本学に還元していくべく努力を続けている。昨今強調してきたように、各教員は「学内サイクル」と「学外サイクル」を結ぶ一種のハブの役割を果たしており、ひいては本学の評価・評判の向上にも寄与しているという自負を持って活動を展開している。また業務監査・監事監査においては、執行部（理事・副学長（企画担当）：佐藤 勲先生）より「各種研修や講演、学会発表における参加者からの評価は、センターの外部評価に準じるものとして考えて良い」との助言をいただき、できるだけ数値や自由記述を保存しておくよう心掛けている（別表はその一端であり、いずれも高評価を得ていることを参照されたい）。

<実践に基づく発信（外部評価/R2-3で事後アンケートありの企画：5段階）>

企画名	タイトル	企画	担当	参加者数	評価
第78回カウンセリング懇談会（拡大）	「相談活動から見た学生の皆さんの心理状態」他	保健管理セ	Co / Dr	103名	4.57
第79回カウンセリング懇談会	「多様性あるキャンパスを目指して—マイノリティ学生への支援—」他	保健管理セ	Co / Dr	80名	4.79
第14回リプロ特別講義	「コロナ禍でこころが縮こまっていますか」	学生支援セ	Co	80名	4.82
第59回全国学生相談研修会	「学生相談と連携・協働」	日本学生相談学会	Co	40名	4.71
第59回全国学生相談研修会	「学生相談と精神医学」	日本学生相談学会	Dr	104名	4.36
令和3年度心の問題と成長支援ワークショップ	「メンタルヘルスの基礎知識」	日本学生支援機構	Dr	60名	4.60
令和3年度学生生活にかかる喫緊の課題セミナー	「コロナ禍における学生のメンタルヘルス」	日本学生支援機構	Dr	995名	4.33
第197回招聘セミナー（学生支援担当者セミナー）	「学生とともにつくる”新しい日常”—学生相談・学生支援のこれから—」	名古屋大学高等教育センター	Co	83名	4.63

⑨国際的な交流・研究調査（休止状況が続く）

本年度も、新型コロナウイルス・パンデミックの影響により、あらゆる国際的な交流・研究調査が中断している。次年度以降の再開可能性について、形態や方法論の工夫とともに検討を続けている。

⑩非常時対応と継続的な支援体制（パンデミックにおける防災と地域貢献の検討）

東日本大震災以降も種々の災害が発生している我が国の状況に鑑みて、首都圏で生じうる種々の非常事態に備えた防災訓練への協力・参加に加え、地域の拠点病院との連携や各専門スタッフの果たす役割等、保健管理センターが貢献しうる機能について継続的に検討を行っている。今年度は、昨年度に引き続いてパンデミック下での防災体制を検討しており、感染防止に

十分に留意した実施・対応方略について意見交換を繰り返している。

また学生支援GPを核として創始された震災・復興ボランティアについては、被災地の方々のためにちからになりたいと願う学生・教職員のために側面からフォローを続けてきたが、参集しての活動が困難となって久しく、学内での防災訓練では活躍の機会があるものの、現地訪問や子ども食堂等の地域貢献が中止となったままであり、この状況でも可能な活動・貢献について模索を続けている。

保健管理センターは「学生支援」の拠点の1つとして、学生の個別事情に応じたサポートを丁寧に行うことで、大学の果たすべき「教育」「研究」を支えていくという使命を有しており、相談面接の1セッションごとが学生の人間的成長を促す“大学教育の一環”として機能してきたとも位置づけられる。もう一方では、保健管理センターは「安全管理」の拠点となって、教職員の働く環境の向上に貢献することで、やはり大学の果たす「教育」「研究」機能を促進する使命を帯びている。これらの使命や機能は、2年間を越えてもなお続く新型コロナウイルス感染症の感染拡大・蔓延状況に対して、センタースタッフがそれぞれの専門性を活かして全力で取り組む中で、すなわち本節で示した実績と貢献によって、改めてその意義と重みを増していると言って良いだろう。

本学の教育改革や社会状況の変化に伴って、業務や役割が拡大・増加しつつある現状と言わざるを得ないが、私たちに寄せられる期待の大きさと切実さを感じてもいる。相談と支援と安全に関して、担うべき責務を常に噛み締めながら、各教員・各専門スタッフとして自己点検を進め、さらに保健管理センターの望ましいあり方を「将来構想」として提示していければと念じている。今後とも関係教職員のみなさまのご理解・ご支援をお願いする次第である。

(文責：齋藤 / 各教員からの報告をもとに)

学生支援に係る研修の実施状況(令和3年度)～保健管理センターが関与したものを中心に～

タイトル	主催	開催日	時間	講師	参加人数	内容(備考)		
* 第78回カウンセリング懇談会(オンライン)	* コロナ禍におけるストレスマネジメント-学生と教職員を結ぶ拡大カウンセリング懇談会-	10月5日	2時間+α	カウンセラー/医師	120名(学生45名・教職員75名)	保健管理センターの相談活動とメッセージ/学生・教職員の相談経験とメッセージ(動画視聴者数86名)		
* 第79回カウンセリング懇談会(オンライン)	* カウンセリング活動状況からコロナ禍におけるニューノーマル状況での-	3月17日	2時間+α	カウンセラー/医師	66名	カウンセリング活動状況から/多様なキャンパスを目指して/個別性の尊重と学生交流の促進のために		
<全学FDもしくは全学規模で実施されたもの>								
* 令和3年度 東京工業大学 全学FD(オンライン)	* 研究室内教育と適応・成長支援	12月6日	30分	カウンセラー	49名	コロナ禍での心理的問題/ストレス反応/研究室機能と教育の特徴/コロナ禍での学生への個別支援と関わり方		
* 全学ハラスメント研修(オンライン)	* ハラスメント相談の現状と対策-コロナ禍を越えて-	11月11日	40分	理事・副学長/カウンセラー	百数十名	コロナ禍での相談活動と学生のこころ/ハラスメント事例の実際/ミスマッチを最少に/連絡の取れない学生への対応		
<人事的な側面からの研修>								
* 令和3年度新採用教員セミナー(ハイブリッド開催)	* メンタルヘルスについて-東工大の教員になるということ-	4月15日	30分	医師	110名	心身のセルフチェック/東工大生の特徴と教員としての関わり方など		
* 令和3年度新採用教員セミナー(ハイブリッド開催)	* メンタルヘルスについて-東工大の教員になるということ-	10月18日	30分	医師	40名	心身のセルフチェック/東工大生の特徴と教員としての関わり方など		
* 令和3年度新採用職員研修(オンライン)	* 健康管理・メンタルヘルス-東工大の職員として活躍いただくために-	4月22日	60分	カウンセラー	23名	コロナ禍での心身の健康/健康診断のすすめ/ストレス反応/ハラスメント問題/アクティブ・ヒーリング等		
* 令和3年度グループ長研修(オンライン)	* 職場のメンタルヘルス-グループ長として活躍いただくために-	3月4日	60分	カウンセラー	13名	コロナ禍の大学業務とメンタルヘルス/グループ長が要!働き盛りの心理的課題/職場の人間関係・職場関係への関与等		
* 令和3年度主任研修(オンライン)	* 健康管理・ハラスメントについて	2月15日	30分	カウンセラー	33名	事務職員のストレス状況/職員気質/コロナ禍でのストレス反応/ハラスメントへの理解/リモート・ワークの工夫等		
<各部署のFD等として実施されたもの>								
* 情報理工学院教授会FD研修(オンライン)	* パンデミック下での学生・教職員のメンタルヘルス	9月8日	30分	カウンセラー	数十名	コロナ禍での心理的問題/ストレス反応の仕組み/キャンパス不応の初期症状/学生生活サイクル/個別ケア等		
* 材料系ハラスメント研修(オンライン)	* コロナ禍におけるハラスメント防止と学生対応	9月22日	30分	カウンセラー	20-30名	コロナ禍での心理的問題/学生生活サイクル・論文作成サイクルの変質/ハラスメント事例の実際等		
* 工学系3学院合同研修会(オンライン)	* コロナ禍での研究室の学生との関わり	12月15日	30分	カウンセラー	数十名	コロナ禍での相談活動・心理的問題/学生生活サイクル・論文作成サイクル/教職員の関わり方/対話・雑談のコツ等		
<相談員役割を担う教職員に対する研修>								
* 令和3年度学生相談室相談員向け研修会(オンライン)	* コロナ禍での学生相談	6月16日	約40分	カウンセラー	20名強	コロナ禍での学生の相談の傾向/相談の受け方の基本/オンライン相談の留意点		
<安全管理的な側面から実施された啓発企画(全学)>								
* 放射線業務従事者(継続者)全学講習会(Web講習)	* 特殊健康診断 とくに電離放射線作業従事者健康診断について	放射線総合センター	WEB講習 7/1~9/30配信	15分	医師	500名強	放射線使用による健康障害の可能性とその予防・健診について	
* 環境安全衛生講習会(Web講習)	* 本学における健康管理	総合安全管理部門	WEB講習 6/23~8/31配信	40分	医師	860名	健康管理・作業管理・作業環境管理の解説及び健診の意義、感染症対策、ストレス対応について	
<安全管理的な側面から実施された啓発企画(各研究室等)>								
* 4月新入生安全衛生講習会(HPリンク)	* 健康管理	学院等安全管理室		4月	20分	医師	工学系安全管理室 HPリンク掲載	健康・安全管理全般の講習において、健康管理、応急処置、感染症対策について説明(音声付きパワーポイント教材)
* 10月新入生安全衛生講習会(英語版)(HPリンク)	* Health Management	学院等安全管理室		10月	20分	医師	工学系安全管理室 HPリンク掲載	健康・安全管理全般の講習において、健康管理、応急処置、感染症対策について英語で説明(音声付きパワーポイント教材)
* 学生対象 海外安全オリエンテーション	* 渡航中の健康管理について	留学生交流課		7月28日	30分	医師	92名	海外渡航の健康管理に関して、渡航前、滞在中、帰国後の留意点について
<全国的な研修会への関わり>								
* 令和3年度心の問題と成長支援ワークショップ(オンライン)	(*メンタルヘルスの基礎知識/学生対応の基本、ハラスメント、危機対応、等)	日本学生支援機構		11月1~2日	2日間	医師/カウンセラー	約100名	全国の学生支援に係る教職員対象(医師がカウンセラーが講師)
* 第59回全国学生相談研修会(オンライン)	* 学生相談における連携・協働/ * 学生相談と精神医学	日本学生相談学会		11月21~22日	2日間	カウンセラー/医師	約360名	全国の学生支援に係る教職員対象(カウンセラーが分科会講師/医師が小講義講師)
* 全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会研究集会(オンライン)	* 相談対応の際の話し方・聴き方の基本	全国大学保健管理研究会/群馬大学		9月17日	30分	カウンセラー	約300名	保健看護スタッフの貢献と役割/対話の枠組/応答の練習/模擬事例をもとに
* 全国大学生サミット(オンライン)	* 大学生の大学生による大学生のためのwith/afterコロナ	全国大学生協議		10月31日	1日間	カウンセラー	約1,000名	こころの持ち方のアドバイス/コロナ禍の向こうに生きてきた新たな希望/心理カウンセラーと話してみよう、等
<学生対象の啓発的プログラム>								
* 学部新入生総合オリエンテーション(オンライン)	* キャンパスライフ入門-東工大生になるために-	学務部		4月1日	20分	カウンセラー	約1,100名	学生生活の過ごし方(新しい環境への適応、特にカカト注意、イッキ飲み注意、等)
* 大学院新入生オリエンテーション(中止/資料配布)	* キャンパスライフについて-研究センターの学生生活/その過ごし方-	学務部		4月5日	-	カウンセラー	約1,100名	大学院生活の過ごし方(研究への構え、特にミスマッチ・ハラスメント防止、等)
* ピアサポーター研修(対面)	* 相談業務グループワーク	学生支援センター-未来人材育成部門		7月12日、21日	120分	カウンセラー	11名	基本的関わり技法/傾聴姿勢
* ピアサポーター研修(ハイブリッド)	* 相談業務グループワーク	学生支援センター-未来人材育成部門		10月25日	120分	カウンセラー	11名	投書型相談への対応について
* ピアサポーター研修(対面)	* 相談業務グループワーク	学生支援センター-未来人材育成部門		12月13日	120分	カウンセラー	7名	相談場面における伝え方/アサーション
* ピアサポーター研修(対面)	* 相談業務グループワーク	学生支援センター-未来人材育成部門		2月21日、24日	120分	カウンセラー	10名	基本的な構え/相談内容/必要な知識とスキル/援助的な関わり

II. 論考

コロナ禍初期・蔓延期における授業実践と研修実践 —学生相談・保健管理から発信するオンラインメッセージ—

齋藤憲司¹⁾, 高田 純¹⁾, 道又紀子²⁾, 安宅勝弘¹⁾, 丸谷俊之¹⁾,
福岡俊彦¹⁾, 桶谷雅人¹⁾, 三平満司^{1,3)}

I. 問題と目的

世界規模で蔓延するに至った新型コロナウイルス感染症 (Covid-19) は我が国の社会全般に大きな影響を及ぼし、大学教育もまたこれまで経験したことのない対応と変革が求められることになった。キャンパスに参集して展開してきた対面授業と学生生活はしばし遮断され、出校制限の状況下で急速にオンライン授業が普及することになる。同様に、対面での面接や直接の働きかけによって成立していた学生相談・保健管理も前提が変容したために新たな対応方策や介入手法を検討する必要性に迫られた。コロナ禍のもと学生たちの心理状態や適応状況が強く心配されたため、カウンセリングやメンタルヘルスの個別相談では各種のメディアを用いたハイブリッド相談体制を速やかに構築するとともに、学生・教職員に向けていかに心理的安定や適切な対処様式を発信していくかが重要なテーマとなった。また現存する誰もが体験したことのない状況であるため、参照すべき先行研究や論考が見出しにくく、自分たちの実践と考察を並行展開してこれらを文章化していくことを責務と受けとめ、可能な限りの研究発表と論文化を進めている (齋藤, 2020, 高田他, 2021 など)。個別相談については一連の研究発表の基礎となったカウンセリングチームの実践的論考を昨年度の本紀要にまとめており (齋藤他, 2021a)、今回は学生相談・保健管理の専門スタッフによる学生対象の授業並びに教職員対象の研修を整理・検討して、今後のさらなる実践に資する勘所と留意点を提示することを目指す。コロナ禍は何度かの流行の波を経て徐々に学生も教職員もいわゆる「新しい日常」に適応しつつあるように見え、全面的な対面授業への移行に向かうとともにキャンパスにも学生・教職員の姿が戻ってきている。しかしながら、コロナ禍を経験した後の学生相談・保健管理はそれ以前とは質的に異なった対応と発信を求められることになるだろう。本稿は、言わば本紀要における「メンタルヘルス・カウンセリング活動報告」と「グループ・コミュニティ活動報告」を補完しつつ、さらなる向上を志向するための基礎資料とも位置付けられる。

II. 方法

コロナ禍初期にあたる令和2(2020)年度において、カウンセラー並びに医師が担当した授業実践 (研究1) 及び研修実践 (研究2) について時系列的に検討していく。具体的には、以下の3つの観点から事例的に取り上げる。

* 概略 (目的や対象者の特性等)

* ねらいと工夫 (内容や教示法等)

¹⁾東京工業大学保健管理センター、²⁾東京工業大学学生支援センター、³⁾東京工業大学工学院

*対象者の反応（当日の様子や感想等）

また研究1・研究2の結果と考察を比較して、学生対象及び教職員対象の啓発・発信活動の特徴と相違、そして留意点について総合的に考察する。その際の視点は、保健管理センターの専任教授として機関内あるいは学内外の関連機関と多様なネットワークを有する主任カウンセラーの立場から議論を進めることになる。

Ⅲ. [研究1]：コロナ禍初期における授業実践・各種発信と学生相談活動

[研究1-1] . 問題と目的

カウンセラー等の学生相談担当者が担う授業・研修の意義については、一定の評価・認識が共有され、各大学においても工夫を凝らした実践が繰り広げられている。これらの実践は学生相談モデルの重要な要素（大学教育モデル）にも組み入れられ（齋藤, 1999）、筆者らも適宜、実践を論文文化してきた（齋藤, 2001, 内野・高田他, 2014, 道又, 2021 等）。

しかるに 2020 年以降、コロナ禍でオンライン開講が中心となったことから、内容・進め方を急速かつ探索的に検討する必要性が生じている。これらの授業実践は、相談体制の変容とも相まって展開してきたのだが、まさに学生相談全体が大きな転機を迎え、オンライン相談（高田他, 2020）を含み込んだ全体的な対応が求められたと言って良い（高田他, 2021a）。同時に、カウンセラー（以下 Co.）と医師（以下 Dr.）は新たな機関内連働を模索することにもなっている（齋藤他, 2020b）。筆者らは教員 Co.・教員 Dr.として授業・研修に対して積極的に参画してきた経緯があるが、本研究はとりわけ主任 Co. が学内で展開した学生向けの発信に焦点化を当てて、オンライン授業・発信をめぐる工夫と意義を検討し、学生相談・保健管理のあり方を再考することを目的とする。

[研究1-2] . 方法

本研究の対象として、コロナ禍拡大以降に主任 Co. が中心となって実施・関与した学生向けの授業・発信等について時系列的に焦点をあてる（計5実践）。

*学生向けのオンライン発信（授業2/講演1）

*対面授業（1）

*Web 発信（1）

具体的な方法としては、以下の3つの観点から事例的に検討していく。

*概略（目的や対象者の特性等）

*ねらいと工夫（内容や教示法等）

*学生の反応（当日の様子や感想等）

なお、実践ごとに授業等で実際に使用したスライドを参考資料として適宜掲載している。

[研究1-3] . 結果

(1) 教職に関する講義科目（前期：オンライン開講）

*（概略）相談の基礎を扱う内容で、オンライン習熟のためにTA学生と模擬授業を行ったうえで3回担当。受講生は数十名で学部1年が最多だが大学院生も。（補足）模擬授業の前に教職担当教員よりオンライン操作の個別指導を受け、さらに大学院生をTAとして紹介くださる。

事前にオンライン上でざっくばらんに交流する中で、気取っても仕方がないと Co. は覚悟することができた。また同僚 Co. 及び Dr. の（主に機器設定・操作に関する）サポートも大きな礎であった。

*** (ねらいと工夫)** 講師である Co. からは援助的な関係性の要点を教示し、オンライン上でのグループ・ワーク (Zoom:ブレイクアウトセッション) を取り入れるとともに、TA と講師の対話 (開始前 30 分/授業中も適宜) を対人モデルの参考例としてありのまま受講生たちに提示した。講義後半には小レポートを課し、Co. の個人アドレスとは別個に設けたアドレスに送信・提出してもらって回収。次回には了解の得られた記述を匿名で紹介して Co. 兼教員としてのコメントをフィードバックしている。なお、1 年生が多いことから導入教育・適応支援教育 (齋藤, 2007b) としての意識を加味しての授業展開と交流促進を心がけた。

*** (学生の反応)** キャンパス封鎖の状況下で孤立傾向にあった学生たちは対話の機会を喜び、「今までの授業で一番」「人生の指針が得られた」等の感想とともに感謝の表明が多数寄せられた。Co. としても大きな手応えを得たことで、オンラインでも十分に“伝わるんだなあ…”と驚く。準備にたいへんな時間を要したが、これに見合う成果が得られたことへの喜びも大きかった。

<参考資料>

< * グループ・ワークの例:コロナ禍に合わせて >

○ミニ実習課題 (その①)

* あなたが中学もしくは高校の教員であるとして、「自粛、自粛でやってらんないよ！ストレス溜まるし、将来に希望を持ってないし、もう勉強なんかする気になれないよ…」と言ってきた生徒に対して、教員としてどのように応えてあげたいと思いますか。

～手近な紙などに、下記の順にメモしてください。

- i) この生徒の感情状態
- ii) (教員としての) 自分の感情状態
- iii) おおよその方針・方向性
- iv) 具体的な言葉 (実際にかけてあげたい台詞)

< * 初回・導入の例:授業の特徴・進め方 >

* [プロローグ] 教育と相談の現場で ～よもやこんな時代/状況が来ようとは…～

【教育と相談の本質】

- ・知性と感性を総動員して行なう営み
- ・「こころ」⇔「あたま」⇔「からだ」
～日々その連働の中で (自分を媒介・問い直し)
- ・力点と方向性・ベクトル ～質的・量的な相違～
教員⇔生徒 / カウンセラー⇔クライアント

【場とメディア】

- ・同じ時間と空気を共有・共鳴しながらという前提
⇔ オンライン授業の急速な普及
さて、これからの展開は… (相談も?)

(2) 教養教育内の特論科目 (後期: オンライン開講)

*** (概略)** 人間関係を多面的に見つめる内容で講義を行い、Co. は 7 回担当 (精神科 Dr. も 7 回)。2～3 年生中心に 30 名弱の受講生を迎え、適宜グループ・ワークを実施している。また毎回小レポート提出も求めた。例年よりも受講生が減少した理由として、シラバスにグループ実施を明示したことで参加をためらった学生たちがある程度存在する可能性が推測された。Co. としては、グループワークが実施されても (あるいはそれだからこそ) 参加しようとする学生の期待に応えたいという構えで授業を組み立てた。

*** (ねらいと工夫)** 講義部分の説明とスライド作成においては要点をいかに凝集して伝えるかを吟味するとともに、オンライン実習も無理なく交流できるよう手順を工夫した。また準テキ

スト的な書籍として紹介されていた『大学生のストレスマネジメント』（齋藤・石垣・高野, 2020）の内容を活用している。

＊（学生の反応）受講生たちは非常に熱心に参加かつ取り組み、グループ・ワークも概ね好評であり、提出される小レポートは回を追うごとに質・量ともに豊かな内容になっていった。また前年度に比べ授業評価も上昇している。なお、授業の前半で心身の状態が気になった学生の小レポートには十分に配慮した上でフィードバックを行っており、適切なペースで内省・洞察を進めていった印象を抱くことができた。

<参考資料>

<初回・導入の例:表紙(課題・キーワード)>

「人間関係論」第1回（齋藤）
((テーマ))

【青年期の課題と
学生生活サイクル】

【課題】

＊現在の立ち位置をライフサイクル心理学の観点から再確認する。

【キーワード】

＊青年期、発達課題～自立・性役割・価値観・職業選択～、自我同一性（アイデンティティ）、モラトリアム、学生生活サイクル～入学期・模索期・卒業期・院生期～、自己実現・社会貢献・

<(第1回)青年期の発達課題:オンライン実習の例>

○ミニ実習課題（その①-1）

＊このあたりで、ちょっとひと息、簡単なワークで気分を切り替えてみましょう。

（下記の設問に対するご自身の思いを余白や手近なノートにメモしてみてください。）

1) このコロナ状況の中で、「自立」もしくは「自律」に関連して、ご自身の生活などにどのような変化や影響があったでしょうか。（ex.睡眠のリズムが、3食食べる！、意外と掃除、バイト休みで収入が…,etc）

2) 個人も社会も世界もまだ根本的な解決を見出していない中でご自身の「価値観」にかかる部分で、なにか考えたことや変わったことがあるでしょうか。（ex.みんな偉いな、ある種の連帯感、未来って不確定、今を大事に…,etc）

<(第1回)青年期の発達課題:グループワークの例>

○ミニ実習課題（その①-2）

～各自のメモをもとに、意見交流してみましょう。
＊少人数（4～5名）のグループに分かれます。
＊一緒にグループになったメンバーで下記手順に沿って。

【1巡目】（どなたか率先して）

まず、「自立」もしくは「自律」に関連した生活の変化や影響について、メモした内容をぐるっと紹介しましょう。

【2巡目】（同順でも逆順でも）

次いで、「価値観」にかかる部分で考えたことや変わったことについて、同じようにぐるっと紹介しましょう。

【3巡目】（同順でも逆順でも）

今度は、【1巡目】&【2巡目】の各メンバーの紹介を聞いて、印象的だった内容や自他の相違について思ったことを、順に伝え合しましょう。

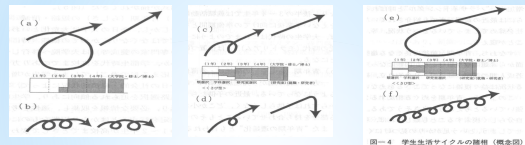
【まだ時間があるようでしたら】（順番気にせず・同じくらい発言）

自由に語り合ったり、質問してみたり、で交流を続けてみましょう。時間が来たら、お互いに「ありがとうございました」とお礼・挨拶をして終了。

<(第4回)学生生活サイクル:フィードバックの例>

＊前回の小レポートから（1）

1) 「学生生活サイクル」=当てはまるもの&自由記述を。



（選択肢）

- | | | |
|-------|-------|---------|
| a). 名 | c). 名 | e). 名 |
| b). 名 | d). 名 | f). 名 |
| | | (その他) 名 |

（自由記述）

～授業の中で（もちろんお名前は出さずに）紹介・コメントさせていただければと思います。～

（3）学生対象の講演企画（秋季単発：オンライン）

＊（概略）学生の自主企画として開催され、約70名が参加。学生支援センター自律支援部門でサポートする活動体であり、初めてのオンライン開催ゆえ準備段階から試行錯誤の連続であったが、多くの参加者が得られたことに学生ともども安堵した。但し、申込みは約120名を数えていたことから、当日に大きく減少することの意味を吟味する必要性も感じる事となった。

* (ねらいと工夫) 企画学生と密な打ち合わせ (オンライン) を重ねたが、学生たちがピアサポート的に後輩・仲間を思う気持ちが嬉しかった。作成されたポスターや企画意図も綿密であり、「対話に近い Q&A の時間」(講演と半々で) を設けてほしいとの依頼もうまく組み込むことができた。広報段階で模擬 Q&A を 3 ケース (各 2 パターンの回答) 用意して、学生たちの関心を引きやすいよう工夫がなされた。

* (学生の反応) 司会進行は学生が担い、開催中から chat での質問が多数寄せられ、Co. は口頭で即時かつ臨機の対応を試みた。終了後には「優しい言葉に涙が出た」「自分を受け入れられた」等の感想が寄せられた。講演にも Q&A に対しても Co. はまさに“渾身・渾心”の思いで臨むこととなり、司会学生の質問読み上げを耳にしつつ、同時に次々に届く chat にも留意して対応している。参加学生の内面や実存に関わる質問も含まれ、Co. 自身がある意味“ゾーンに入っている”ことを自覚しつつ臨機に応答の言葉を紡ぎ、質問学生に届けようと試みた。
<参考資料>

* 現状認識

～心理カウンセラーの立場から～

* “ゆるやかに・長期間・世界規模で 進展する「災害」”

東京工業大学保健管理センターカウンセリングチーム(2020)

* 「新しい生活様式」を形成、大学生の皆さんは・・・ ・「科学的態度の堅持」+「青年としての成長・成熟」

* 臨床心理学の方法論に触れて頂きながら・・・ ・個別性・事例性・一回性 ⇔ 共通性・普遍性・再現性 ・心理学の各領域および隣接する専門分野との交流

<リプロQ.1>なぜコロナ禍でストレス がたまりやすくなっているの？

→【カウンセラー回答:Aバージョン】

未知の状況に接したとき、生体としての人間はそれまでの平衡状態(ホメオスタシス)が揺さぶられます。一種の災害ともいべき状況が突然襲来して、しかもいつ収束するか見通しが見つからない中で、「自粛」という名の「避難生活」を送りながら「学習・研究」はきちんとこなそうという「新たな日常」を求められている。

さらには想定されていた「学生生活」が送れないという一種の「喪失」も考慮すると、ストレスの素(ストレッサー)が束になって押しつけてきたような状況ですので、こころもカラダも参ってしまうのはムリもないと考えてよいでしょう。

(4) 教職に関する演習 (冬季集中：対面実習)

* (概略) 教職科目の最終段階にあたる講義で、ロールプレイを本格的に実施。受講生は 10 数名で 4 年生と大学院生が中心。土曜の午後いっぱい使った演習であり、オンラインでは体験が深まらなないと考えた講師 (Co.) 側から対面実施を希望して許可された経緯がある。当時はオンライン授業中心の状況ゆえ遠方の郷里に戻っていた学生も駆けつけてくれた。

* (ねらいと工夫) 感染防止に最大限留意しつつ、DVD 教材『学生相談の基本』(齋藤, 2012) も活用しながら 2～4 名での実習を展開。既に教職科目を学び合うグループとして凝集性が高まっていた学生たちだが、対面でロールプレイを行いうる (物理的な・心理的な) 距離感と感染防止とのバランスに苦心しつつ進めていくことになった。

* (学生の反応) ようやくの再会に喜び合い、対人関係の実際を体感的に学べたことへの感謝が表明されている。講師を努めた Co. も“学生たちはかつてと変わらず主体的に学び、相互に交流しようとしてくれているのだな”と実感できたことで深く安堵した。DVD 操作に右往左往する Co. の姿はいつものことだが、学生たちが適宜操作法を教えてくれた。

< 参考資料 >

—令和2(2020)年12月5日(土)—
「教職実践演習～生徒指導・教育相談上の現代的課題に関するロールプレイングによる検討①②」
保健管理センター（カウンセラー）：齋藤憲司

今年コロナ禍の影響で、思わぬ1年になりましたね。そんな中でもこの演習にご参加くださり、ありがとうございました。まずは、理工系の専門性を活かして、学校教育の現場にトライしてみたいと考えておられることに敬意を表したいと思います。近い将来に、教室で、校内で、行事で、様々な舞台で、どんな生徒さんたちと出会い、交流していくことになるでしょうか。

今日は、お伝えしたい要点をまとめたレクチャーとともに、ロールプレイ等の援助的コミュニケーションの実習も織り交ぜて、できるだけリラックスして交流できるひとときになればと思っています。では、どうぞよろしくお願いたします。

<セッション①(ひとコマめ前半)：導入編>

1. [レク] 教員として生徒に出会うということ（教職員の関わりの特徴）
2. [実習] 自己理解と相互理解のために（こころからだ・あたま）

<セッション②(ひとコマめ後半)：個別対応の基礎>

3. [レク] 相談対応における3条件（カウンセリングとの相違）
4. [実習] ある生徒と教員の交流経路から（ことばとおもい）

<セッション③(ふたコマめ前半)：相談実習前編>

1. [レク] 相談面接の手順と留意点/対応における3つのモード
2. [実習] ロールプレイ(i) *相談モードで[和らげる]

<セッション④(ふたコマめ後半)：相談実習後編>

3. [レク] コミュニケーションスキル（聴くスキル/伝えるスキル）
4. [実習] ロールプレイ(ii) *教示モードで[前進させる]

*まとめ/ふりかえり

<当日のレジメ表紙>

- ・中身は研修・授業用に作成した各種シート
- +
- ・DVD教材(齋藤,2012)の写真・シナリオ等(上映)
- ↓
- ・実習の手順を段階的に提示(助走～ロールプレイへ離陸)
- ↓
- ・可能なかぎり、小グループで交流全体へ概略発信講師からフィードバック

(5) 相談機関としての Web による発信・広報

＊（概略）コロナ禍に応じた相談形態の変更（電話・オンラインも可・対面も徐々に等）を臨機に HP に掲載。「学生へのメッセージ」も 2 回 Co. チームとして作成・発信している。相談活動の実施に際しては Co. チームに各種のワークシートを提示・協議の上（齋藤他, 2020a）、「基本方針と対応フロー」を作成し、さらにセンター教職員とも共有している（感染状況に応じて改訂）。メッセージは内容と発出時期を慎重に検討の上で提示している（5 月「こころの免疫力」・7 月「こころの適応力」）。

＊（ねらいと工夫）保健管理機関に所属ゆえ、Co. チームと医療スタッフの方針が符合すべく教員 Co. 中心に内容を協議している。センタースタッフ間の連携推進も考慮して丁寧な意見交換に留意するとともに、学生に伝わる内容・言葉の選択と吟味に相応の時間を要した。

＊（学生の反応）継続来談学生は概ねセンター及び Co. チームの方針を受け入れたが、新規申込はしばらく減少することとなった。一方、メッセージは学生・教職員双方に好評であり、さらに「留学生のために英語版も出してほしい」との依頼を受け、翻訳担当部署の協力を得て英語版が作成された。メッセージを元に来談する場合もあり、Co. チーム及びセンターの存在感を示しえたと言って良い。しかし感染状況が刻々と変わるため（出校は welcome なのかについて判断が困難・学院や専門分野によって状況や意識に相違が生じている・他大学の状況や体制との比較・学生の現状に対する Co. やスタッフ間の見立ての相違も時に生じる等）、第 3 報「こころの回復力」の発行時機（当初は 10 月：後期開始を想定した）を見出すことが困難となり、初校を作成したものの結局公開は見送られることとなった。（第 1 報、第 2 報は保健管理センター HP に掲載。）

<https://www.titech.ac.jp/enrolled/health/counseling.html>

〔研究 1-4〕 . 考察

(1) Co. にとってのオンライン授業

i) 学生の現状や生活状況を受感する貴重な機会

出校制限が続く中では、オンラインを通じて学生たちの声や心情などを直接に感じ取れる機会は、個別面接が十分に展開し得ず来談学生が限定的な状況ゆえ非常に大きな「窓」となっていた。また授業等における学生たちの感想やコメントは、Co. チームやセンターからの発信・広報に活用しうる意義ある素材・基礎資料となった。

ii) 画面構成や語りの工夫、グループ・ワークの手順熟考

1つ1つの授業実践において取り上げるテーマのエッセンスを考慮するとともに、受講する対象者の希望や特性に応じて、Co. 教員として“最も伝えたいこと”と“最適な手法”を可能な限り精選する営みを続けてきたという自負がある。現場性・一回性を生きる Co. として、元来は口頭でのアドリブ伝授に自信があったのだが、コロナ禍におけるオンライン授業では事前準備が格段に増加して、言うなれば“革命的”変化を強要されたという感触である。

iii) 教員 Co. の相互教示が貴重な資源であり安心感にも

授業内容や進め方の工夫、機器・システムの使用や活用など、ちょっとしたことが惑いの種になる状況であったが、同僚教員の細やかな助言と実際的な助力は大きな安心感の源にもなった。また教員 Co. によっては他大学での授業実践を担当しており、各大学における学生の状態像や授業の実施形態を比較・参照することで、目前の指針を見出だす参考にできたことも有り難いことであった。

iv) 「自分を晒す」ことへの留意と覚悟 (“どう見られるか” への想像力)

オンライン授業においては、Co. の一挙手一投足が画面を通じて学生たちの視野に入り、さらには学生たちの復習に資するために録画視聴も可能な形態となっている。対面面接の中で一回性を生きる流儀になじんだ Co. にとっては、まさに“自分を晒す/曝される”ことへの最大限の留意と覚悟が求められる状況でもあった。古典的な転移・逆転移と結びつけるかどうかは議論のあるところだが、画面上での Co. 像が学生たちに“どう見られているのか”についての想像力を十二分に保持しておくことが必要と考えられた。

v) 一方で実施に要した労力は業務バランスを揺さぶる

Co. あるいは Dr. が担当するオンライン講義は(次項で詳述するように)コロナ禍において重要な意義を有したと言って良いが、“1コマ準備に1週間かかりきり”に近い状況に陥り、当時は労力と時間が(通常の授業に比して準備に5倍・当日に5倍・事後対応に5倍と)“15倍かかる”という感触を抱いていた。センタースタッフからは授業担当日の Co. は“オレに話しかけるな!” 的オーラを朝から発していたという苦笑いのエピソードも語られている。

(2) 学生にとってのオンライン授業

i) Co. の姿と語り、心理教育的な内容は安心材料となる。

コロナ禍において不安や孤独に苛まれる学生たちにとって、この状況ゆえに生じうる心理的な反応や適応・不適応の機序について丁寧かつ共感的に説明する Co. の姿と言葉は、大きな安心感となっていたことが小レポート等から伺えた。また心身の健康保持のために役立つ知識や

手軽に実践できるスキルは、心理教育プログラムのミニチュア版が散りばめられているかの如くに感じられている。一方で、あまりに影響力の大きな存在として Co. が画面に登場すると、対面面接で時に生じる「転移」が（画面上でスター化するかの如く）新たな様態で出現しないかという点に留意していた。また、学生は事前に資料のダウンロードができるのみならず、録画視聴も可能なこともあって、授業担当者はひたすら教材を作り込む姿勢が強まり、授業における一期一会的なライブ感が減少しないかという危惧も抱いていた。

ii) グループ・ワークの緊張感と同世代の交流体験

人間関係の専門家である Co. が担当する授業では、講義形式であっても可能な限りグループ・ワークを組み込んでいる。特にコロナ禍で自室にこもりがちな状況にあった学生たちにとっては貴重な対人交流の機会となるとともに、お互いの気遣いやコメント内容がピア・サポート的に機能する場合がしばしば見受けられた。

学生たちにとって、グループ・ワークは開始前も実施中もある種の緊張とためらいを抱かせるものであり、交流が穏やかかつ適切に進むという成功体験を味わえるように、Co. 兼教員としてどこまで / どのように介入するかは常に課題であった。教室での開講であれば、さりげなく机間巡視を行いつつ脅かさないう十分に距離をとったところから見渡して、学生たちによる各グループの雰囲気や交流具合を感受し、停滞しているグループやテーマと関連しないおしゃべりに流れているグループには適宜介入することもある。しかしオンラインでのセッションでは突然講師が画面に登場して聞き耳を立てるのは侵襲的に感じられる可能性があるため、控えることがほとんどであった。また、相互の顔出しをどこまで求めるか、どの程度の自己表明・自己開示を求めるかも、毎回の学生たちの希望や状態を見て判断することになるが、そのための材料を画面や音声から感受することは容易ではなく、ひとまず学生たちに任せることがほとんどであった。

iii) 小レポートによる Co. との意見交換

双方向的な講義となるよう、基本的にどの授業でも小レポートを課している。冒頭にその日のテーマにかかる素朴な思いを導入として記してもらうこともあれば、授業の後半または終盤に当日扱った授業内容に関連した体験や感想をまとめてもらうこともある。特にグループ・ワークでは、交流の様子に加えて、メンバーと共有・共感した話題や自他の相違を感じた点について書いてもらうことは、Co. と学生たちとを結ぶ重要な接点となる。設定した選択肢や記述内容の分類によって集計を行なってその結果を示したり、匿名を条件に記述された文章をそのまま紹介して Co. の立場からコメントを返していくことで、教室での一体化と近似した共通の感情的基盤が形成されていくよう心がけている。このようなやりとりが毎回成立すると、授業内容と絡めつつ自己の内面的な課題や心理的なテーマが表出するようになっていき、これらに対する Co. の受けとめ方やフィードバックされる言葉が、言うなれば回数限定の擬似カウンセリング的な作用をもたらせているように感じられることもしばしばであった。なお小レポートの欄外に「◎発表是非!・○発表可・×発表不可」という選択肢を載せているが、常に「◎」を付けるものの記述にさほどの深みを感じられない場合や、「×」を付けつつサポートの必要性を匂わせる場合に、当該学生への対応をいかに調整していくかも重要な留意点となっていた。

iv) 対面相談における応答とは質的に異なるフィードバック

前項で擬似カウンセリングと称したものの、対面での個別相談では面接室内の空間やお互いの間に漂う空気感を《柔らかい情感で満たす》よう表情やまなざし、身ぶりやしぐさ、そしてある種のオーラのようなものを総動員することになるが、このような対人関係の重要な側面を発揮し得ないオンライン状況では、言葉の発声される分量を増やし気味にした上で・どのような言葉をセレクトするか・どのような声と音量や抑揚で伝えるか・対話の間をどのくらい挟み込むか等の調整で勝負することになる。Co. から発声されるフィードバックが、学生個人あるいは集団にどのように伝わっているかを体感的に確認することが困難なため、「こういうことを感じたのかな」「聞いていて（読ませてもらって）こんな印象を抱いたのだけれど」「同世代の記述内容に比して独自の見解を記してくれていると感じた…」等々の言葉を紡いでいく。すなわち、学生の思いや状態像に完全にフィットした内容ではなくとも、そこに近い言葉や内容を次々に送り出して周辺に連なるように言葉を置いていくことで、結果的に中核的な部分を含み込むフィードバックとなることを目指すような趣である。《柔らかい情感で満たす》あるいは《情緒的な共有ですぐ側にたたずむ》ということが困難な分、《認知的に近似値を”連置”》するような意識で対面での面接や授業よりもかなり多めに一連の言葉を発して、ジグソーパズルを埋めるべく言の葉の数々を置いていくイメージである。

(3) 学生相談の果たす役割と今後の課題

i) コロナ禍収束が見通せない状況下での学生相談

感染の波が押し返す状況が続き、対面授業や学生生活に絶えず何らかの制限が加わる状況ゆえ、学生相談もまた制約を受け続ける中で活動を展開せざるを得ないことは明らかである。このような状況下で、Co. が授業実践という学生像を感受できる場を確保していることには大きな意義があると感じられた。短い期間の中で、オンライン相談を含むハイブリッド体制に急速に移行した訳だが、この変化は一時的な緊急避難なのだとばかりも言っていられないだろう。振り返って考えてみれば、歴史的にも学生相談の様態は臨機に調整を繰り返す中で、独自の「学生相談モデル」を形成してきたのだと言って良い（齋藤, 1999）。その上で、学生たちに向けては相談体制の現在地を、教職員に向けてはこの状況下での学生像の現在地を、学会や専門家集団あるいは行政に向けては学生相談の現在について、細やかな発信を心がけていく必要があるだろう（齋藤他, 2020b）。

ii) 制限緩和（出校本格化）と新たな不適応状況の現出

しばしば指摘されるように、感染症蔓延に伴うこもりがちな日常がかえって過ごしやすく、適応的に生活を送っている一群の学生たちが存在する。また、早くかつての日常が戻ってきてほしいと願う学生たちであっても、改めての出校や教室での受講、身体的・心理的距離の再調整は決してたやすい作業ではない。コロナ禍によって大きな欠損や変質が生じた学生生活を着実に取り戻していく営みを支援するとともに、新たな不適応状態が生じてくることへの構えも備えておく必要があるだろう。近い将来に短期的に急激な変化が生じる場合もあれば、数年後あるいはライフサイクル全般に何らかの影響が浮かび上がってくる場合もあり得るため、中長期的な構えも考慮していくことが求められる。それゆえ、いっそう Co. や Dr. が担う適応支援

教育が重要になってくるであろうし、折を見ての種々の「メッセージ」の発信も検討していきたいものである。

iii) オンライン空間を含むコミュニティ連働と新たな学生相談像の構築

ここまでの論で明らかになったように、コロナ禍によって対人関係の様相は《対面：情緒的・体感的交流》中心から《オンライン：認知面・言葉が前面》という側面を本格的に含み込んだものに大きく変容し、大学教育そして学生相談も新たな局面に移行している。大学コミュニティがオンライン空間を包含したものになったとすれば、コミュニティ内外で学生生活を送る学生たちの発達・成長・適応のプロセスはこれまでとは大きく異なっている可能性がある。様々な構成員の活躍する舞台である大学コミュニティの変質とともに、構成員の織り成す様々な「連働」(齋藤, 2015)によって成り立つ相互支援のあり様、さらには学生相談像もまた繰り返し再検討を、あるいは新たな構築を求められることになるだろう。

iv) 変容するカウンセラー像

かつて、学生相談に従事する Co. は“面接室に居を構えて定点観測的にキャンパスの様相を(学生たちへの相談から)感受する”という印象が強かった。一方で「連働」を主唱する主任 Co. は個別面接を中核に据えつつも各方面との連携・協働を密度濃く進めるがゆえに“いつもキャンパスを駆け回っていた”と感じられていた(連名発表者の所感)。大学キャンパスの様相が変容して、学生相談モデルもまた再検討が求められるのであれば、相談活動に従事する Co. のあり方もまた大きく変わっていくことになるだろうか。例えるならば“オンライン空間を交えて縦横無尽に飛び回る”ことになっていく可能性もないとは言えない。ただその場合でも、個別の対面相談が対人関係の原点であり、面接室という実地の空間を本拠地とすることで、我々はコミュニティに飛び立っていけるのだと感じている。このあたりは、後天的にオンライン空間を認識した年長世代ならではの論の組み立てになっている可能性があり、今を生きる学生たちに授業や各種発信で何をどうやって伝えていくのかは持続的な検討課題となっていくだろう。

IV. [研究2] コロナ禍初期における教職員研修と学生支援をめぐるコミュニティ連働

[研究2-1] . 問題と目的

カウンセラー(以下 Co.)及び医師(以下 Dr.)が担う教職員研修の意義やその有用性は広く共有され、各大学での工夫もしばしば紹介されている(大島, 2020)。しかしながら、学術的な検討にまで深めた論考は少ないと言わざるを得ないのが現状である(齋藤, 2007a 等に限られる)。しかるに2020年度以降は、コロナ禍のために学生向けの授業と同様に、急速に教職員研修もオンラインでの開催が中心となっており、この状況と掲載形態における研修の内容・進め方を再検討する必要性が急激に高まっている。オンライン相談を含んだハイブリッド相談体制への変容とも相まって、主任 Co. はじめ各 Co.・各 Dr. スタッフは保健管理センター教員として迅速かつ手探りで全学もしくは各部署からの要望に応じて各種研修に参画してきた経緯がある。そこで本研究では、

1) 教育・学生支援に大きな制約が生じた2020年度に担当した教職員研修並びに教職員への

発信を時系列的に整理するとともに、

2) 特にコロナ禍におけるオンライン研修の工夫と意義を事例的・実践的に検討することで、これからの学生相談・メンタルヘルス支援のあり方及びコミュニティ連働について再考することを目的とする。

〔研究2-2〕. 方法

本研究の対象として、コロナ禍拡大以降の2020年度に保健管理センター教員が実施・関与した教職員研修・発信等について、時系列的に焦点をあてることとする。すなわち、

- * 教職員向けの連続的発信（オンライン・メール）
- * 教員向けオンライン研修（対象者を絞って）
- * 事務職員向けオンライン研修（対象者を絞って）
- * 全教職員向けのオンライン研修

の4種である。

また、方法・手続きとしては、以下の3つの観点から事例的・実践的に検討していく。

- * 概略（目的や対象者の特性等）
- * ねらいと工夫（内容や教示法等）
- * 対象者の反応（当日の様子や感想等）

なお、各研修等で実際に使用したスライド画面の一部を参考資料として提示して、より具体的にイメージを共有できるように工夫している。

〔研究2-3〕. 結果

（1）新入生特別チーム（春季：オンライン+メール）

* **（概略）** 来学できない新入生のために相互に声をかけあって部局横断的な組織を編成することとなった。すなわち、教務・修学・学生関連の事務窓口やオンライン講義に備えた科目領域ごとの窓口等の実働部隊等から成る。保健管理センターとしても心身両面のサポートのために全面的に協力するとともに、主任 Co. が代表して適応支援のための企画と個別対応の助言をオンラインやメールで適宜展開した。

* **（ねらいと工夫）** 新入生に想定される心理的な不安や動揺の様相を提示しつつ、各教職員が援助的な働きかけに踏み出す際の留意点を適宜かつ臨機に教示できるよう、常にメールやオンライン等による情報の往来に耳目を傾けるよう配慮した。もし新入生の状態に気になる点が見出された場合には、速やかに協議もしくは個別相談に対応する構えを保持している。

* **（教職員の反応）** 教務関係や IT 関連窓口が最も多忙な状況となり、個別案件に関する Co. への助言依頼は数件に留まったが、活動全体の土台を支え、安心感を醸成する役割を果たしていた。

（2）カウンセリング懇談会（夏季：オンライン開催）

* **（概略）** これまで会議室等に参集して、保健管理センターはじめ協力関係にある各部署で展開している相談・支援活動の実際を紹介することから学生の現状を共有して今後の学生対応に

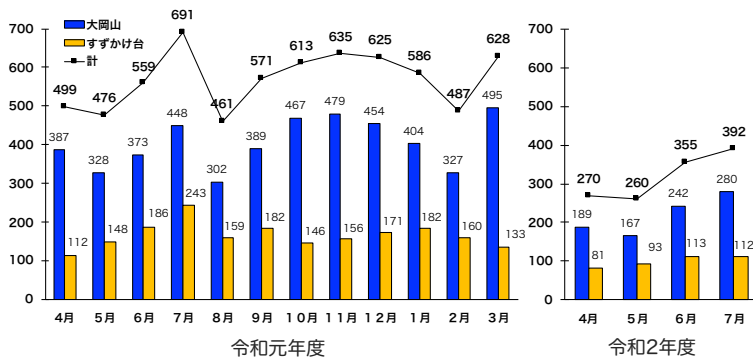
活かして頂く旨で年に2回開催してきた恒例行事を、今回初めてオンラインで主催することとなった。大学執行部の先生がたや支援役割を担う教職員等、計100名以上の参加を得て大いに盛況となり、意見交換も活発になされた。(通常開催では最大でも60名ほどである)。

*** (ねらいと工夫)** 出校制限下で新たに構築したハイブリッド相談体制(直接面談・電話・オンライン・メール等)での来談状況を具体的に紹介している。また学生支援の各窓口の活動状況と支援スタッフのコロナ禍における思いを吐露してもらい、学生たちの現状とともに学生を支える教職員ゆえの苦労を共有する機会とした。

*** (教職員の反応)** 各発表者の思いが溢れ、話題提供もコメントもシナリオで想定した時間を超えて長くなりがちであり、終了も予定時間(2時間)を大幅に超える事態となった。教職員もまたやるせない思いを個別に抱えており、共有できる機会を求めておられた様子が伺えた(下記は当日スライドから抜粋)。

<参考資料>

相談件数—地区別(保健管理センター)



7月と秋頃、年度末に多めになるが、全体として各月とも一定以上の件数(本学の特徴)。今年度の減少幅はすずかけ台に比して大岡山でより顕著(学部生により影響)。

***コロナ禍の中での学生像とキャンパス状況**

* <基本認識> 誰もが疲れている、閉塞感・切替の機会が少ない

* 学年ごとのテーマ・課題 (教育の一環としての学生相談)

[学士課程]

- ① 学部新入生(1年生) ~ 件数わずかでこれから心配?
 - ・まだ学生生活が始まっていない⇨「新入生特別チーム」の貢献大
- ② 学部2~3年生 ~ 継続相談中心、実態が最も見えてこない層
 - ・問題の潜伏化・オンラインに適應? 親・保護者の相談(BF支援)
- ③ 学部4年 ~ 研究室になじめない・入り込めない(オンラインゼミ)
 - ・大学院入試への戸惑い・卒業課題研究への取り組み方

[大学院課程]

- ④ 修士1年 ~ 研究室とのマッチングという基礎課題
 - ・目的・目標・やりがいを見出せない・特に他大学からの入学者
- ⑤ 修士2年 ~ かなり件数多し(例年最多層)
 - ・将来や不規則な就活への不安・自己不確定感が強まる
- ⑥ 博士院生 ~ 一定数の来談、根深い葛藤・学位取得の不安
 - ・思う存分研究できない戸惑い・資質・構え・覚悟を問う以前

⇒ [基本姿勢] 社会・大学の特殊事情と学生の個別事情に応じた適応支援 8

(3) 全学FD研修(秋季: オンライン)

*** (概略)** 例年は宿泊形式(1泊)で開催される教育方法に関する講演とグループワークが中心の全学研修であり、今回初めてオンライン開催となった。各部局から教員が数名ずつ参加(計: 数十名)する形態で、プログラムは午後半日にしぼられた。

*** (ねらいと工夫)** プログラムの最終セッションを主任 Co. が担当して、コロナ禍での学生像と対応の工夫をオンラインにて講演した。日頃の、あるいは研修全体の疲れを癒して頂けるよう、リラクゼーションを加味して心身をほぐす時間になるよう構成している。

*** (教職員の反応)** 講演後の質疑応答では、“学生の現状は、特に本学の学生はオンライン状況にも馴染んでいるので意外と大丈夫では…”という声と、“孤独や不安に苛まれているのではと深く憂慮している”という声とが交錯するひと時となった。主任 Co. の講演は全学FDにおける毎回の定番になっていることもあって、参加者の安堵感に繋がっている様子が画面越しに

伝わってきていた。(下記は当日資料スライドから抜粋)

<参考資料>

<学生の現状について提示>

* この間に生じている心理的問題 ～相談の現場から (齋藤,2020a)

- 1) 思い描いた学生生活との相違から来る課題
ex. ”せっかく大学に入ったのに…学生生活って?”
”もう自粛も限界、どうして大学生だけが…”
”研究・実験させて!このままじゃ成果が出せない“
- 2) 環境の変化や新たな課題への対応に関する
漠然とした疲れ
ex. ”リモート授業で課題増大!結局(土)(日)も…”
”ネット不具合にイラッ!もう嫌になっちゃう“
”毎日がなんか気怠い…。やる気が出ない“

<学生の現状について提示(続き)>

* この間に生じている心理的問題 ～相談の現場から(続) (齋藤,2020a)

- 3) こもりがちの生活が心理面に及ぼしている影響
ex. ”落ち込んで気分が晴れない“
”現実感が感じられない“ ”取り残されている…“
- 4) 対人関係の限定・濃密さから生じる問題
ex. ”友だちができない…“ ”何日も誰とも話していない“
⇔ ”家族と言い争う“ ”SNSで揉めてしまった…“
- 5) 事態の收拾が見えにくいことから生じる問題
ex. ”就職状況が悪くなるばかり、将来が不安“
”この先いいことなんて何もない気がする…“

* オンライン授業の体験から思うこと (齋藤,2020a)

- ① 毎回の授業で最も大事なこと・伝えたいことは何かを徹底的に吟味すること
ex. シラバスとの対比、(教員間の) 目標・基準の共有、教科書の使い方
段階的な学び、教育観・教育スタイルの投影、意義とやりがい発信
- ② どのような言葉・表現・表情・身振り・図表を用いると、
学生たちに最も伝わりやすいのかを工夫すること
ex. 平らな画面での表情・身振り(我が身を画像で振り返る)、
場の雰囲気共有の可能性、対話の全体性⇔本質の洗練、白板、DVD、
* パワポのレイアウト・フォント・デザイン(個性⇔ユニバーサル)
- ③ (Zoom等の)このツール・手法を用いると何をどこまで
伝えうるのか・相互交流が可能になるのかを感受して
ex. 理解とスキル習得の度合い(小テストや諸機能)、授業プロセスの
解析、率直さ・明瞭さ、交流促進(グループの効用⇔一部の抵抗感)

11

(4) 各部局 FD 研修

* (概略) 短時間で特定テーマについて要点を提供するミニ・レクチャーシリーズ(齋藤他, 2019)を各部局教授会に提示・好評を得ていたが、その依頼が2020年度はコロナ禍の影響もあって途絶えることとなった。一方で、ある部局では Dr. がコロナ禍のメンタルヘルスを講演して94名の参加者を得ている(オンライン)。

* (ねらいと工夫) 各部局に対して、常に研修を提供する構えを保持すると同時に、オンライン状況に即した形態・内容の研修を再検討することとなった。

* (教職員の反応) 各部局ともコロナ禍における教育・研究体制の構築に追われており、学生支援領域を気にしつつも研修機会の設定に手が回らない現状があった。一方で、コロナ禍への理解と対処に直結する研修へのニーズは十分に高いことも示された。

(5) 人事的な研修(夏季以降)・安全管理の研修(通年)

* (概略) 人事・労務に関する研修(新採用教職員向けや役職別・対象者別に設定された各種研修)は2020年度前半においては停止やむなしに至り、夏季以降に徐々にオンラインで再開され、Co.やDr.が心身健康や職場環境に関する留意事項を教示している。また、理工系大学における研究遂行のために必須となる安全管理に係る研修では、Dr.の講演をeラーニング教材として活用する態勢を早期に整えた。

* (ねらいと工夫) 人事・労務関係ではリモートワークを含む新たな就業形態に応じた配慮を伝達することとした。安全管理においても出校制限や研究環境の変化に応じた留意点を提示している。併せて感染対策についても保健管理センターの立場から注意喚起を行った。

* (教職員の反応) 例年とは異なる時期・形態ではあったが、(特に新採用職員向けでは)イニシエーション的な意味を持つとともに、この状況ならではの大学業務への取り組み方を促すことになった。(下記は当日スライドから抜粋)。

<5月病って何?>

現代の学歴社会の中で、過酷な受験競争を通り抜けて入学してきた大学生が、試験の緊張感から開放され、あるいは大学の講義内容に失望し、入学後しばらくたった時期に虚脱感、無気力感を生じてスランプに陥り、無為怠惰な状態になることをいう。

～(カウンセリング辞典に寄せた原稿より)～

(参考) スチューデント・アパシー(無気力)

/サラリーマン・アパシー、さらには…

⇨「入学」「就職」などのポジティブな体験もストレスになりうる(環境変化への適応に要するエネルギー)

* コロナ禍におけるストレス状況

* 多様な刺激の束! (ストレスの素)

～あらゆる種類の刺激・(マスコミ報道:情報過多/偏り?)
⇨一方で、日々のある種の静けさ(平穏な不気味さ?)

* 実際の反応はかなり多彩(個人差)

～”とってもしんどい””もうやりきれない!”と訴える人々
⇨”意外と平気””かえって過ごしやすい”という人も…

* 対処様式を持ち合わせていない事態

～”誰にとっても未知との遭遇”
⇨ひとまず”曖昧さへの耐性”の有無

* これまでの/これからのプロセスもまた…

⇨次ページは先行研究をもとに再構成して作図したもの
(斎藤他,2020『大学生のストレスマネジメント』(有斐閣))

(6) カウンセリング懇談会(年度末)

* (概略) 夏季に引き続いてオンライン開催となり、新年度の支援体制を共有すべく、各Co.・Dr.より学年別・キャンパス別の学生像と関与の留意点を提示しており、約70名の参加を得ている。

* (ねらいと工夫) 前回(夏季)は全学的な支援体制を確認していく意味合いがあったが、今回は保健管理センターにおける相談現場からの話題提供を中心に据えて、学士課程でも大学院でも、いずれの学年・学生層に対しても適応支援の工夫が必要になっていることを提示している。また授業や研修等の多彩な発信によって、コロナ禍にあった1年間を通して多角的に大学に貢献しようとしてきた様子を提示している。

* (教職員の反応) Co.及びDr.の提示した内容・留意点に対して、全体として理解・賛同しつつ受けとめてくださっていると感じられた。また感想アンケートの結果も引き続き、好評であった。(下図は当日資料より抜粋)

5. コロナ禍における相談活動と啓発活動（2）

<啓発活動>

i. [授業]

- ・「身体教養科学特別講義」<福岡 第2Q>・「教養特論：人間関係論」<齋藤・安宅 第3Q>
- ・「教育相談論」<齋藤 第2Q> 等でコロナ状況における心身のケア・サポートについて講義

ii. [学生向け講演]

- ・「コロナ禍でこころが縮こまっていますか～臨床心理学でひも解いてみよう～」
 <リプロ特別講義（学生支援センター自律支援部門）10月 齋藤>

iii. [教職員・学生向け学内研修]

- ・「新型コロナウイルス感染症」 <全学安全衛生講習会、図書館職員向け研修会 5月 福岡>
- ・「オンライン空間の学生～これからのキャンパスライフ～」 <全学FD研修 11月 齋藤>
- ・「Covid-19パンデミック下のメンタルヘルス」 <化生研安全衛生講演会 12月 丸谷>

iv. [広報・発行物]

- ・「この時期の過ごし方：こころの免疫力を付けよう！」 <本学HP5月 カウンセリングチーム>
- ・「夏に向けての過ごし方：こころの適応力を高めよう！」 <本学HP7月 カウンセリングチーム>
- ・「「空」と「声」と「夢」と～こころを縮こまらせないために～」
 <大学生協連新型コロナウイルス対策特設サイト 5月 齋藤>
- ・「大学生の学びと学生生活を保証するために～リモート授業の不安に寄り添う～」
 <「英語教育」誌. 11月 齋藤>
- ・「学生のこころを支える：座談会」
 <「Campus Life」誌 1月(予) 齋藤ほか>

v. [学会発表・全国的組織による講演]

- ・全国大学保健管理研究集会 <3演題（うち1題コロナ禍関連）10月 高田ほか・丸谷ほか・齋藤ほか>
- ・全国大学メンタルヘルス学会 <3演題（うち2題コロナ禍関連）12月 高田ほか・丸谷ほか・齋藤ほか>
- ・全国大学生協連・大学生協共済連「学生の生活リスク講座」 <2月 齋藤・安宅・高田>
- ・(独)日本学生支援機構「心の問題と成長支援ワークショップ」 <10月 道又・安宅>

（7）全教職員対象の企画（年度末）

＊（概略）改組された学生支援センター主催で、学生相談部門長に着任することになった Co. が臨床体験をもとに新年度の教育・支援についてオンラインで教示した。同内容で2日開催され、全教職員の視聴を求めるという学生支援では画期的な企画となっている。（1日目：539名/2日目：257名＝計：796名の参加を得ており、さらに録画配信も行っている。）

＊（ねらいと工夫）次年度（2021年度）4月以降の、すなわちコロナ禍2年目の学生への接し方を示すとともに、相談窓口における改組の実際（学生相談室・電話相談デスク・バリアフリー支援室を総合・移転）について明示し、組織的に対となる未来人材育成部門（キャリア支援・修学支援・自律支援・国際交流支援）との連携も理解されるよう工夫している。

＊（教職員の反応）本学における学生支援体制の新たな展開・充実に対する理解がすみやかに進み、学生対応に困った際の相談・紹介先として認知されるための貴重な企画であり、録画視聴や資料提供の要望が開催中にも示されていた。

[研究2-4] . 考察

（1）コロナ禍におけるオンライン研修の意義

1) 学生対応にかかる安心感の礎

コロナ禍における教育・研究体制を再構築することがまず優先されるためになかなか研修機会を設けることができない事態が続く中で、学生対応に苦慮する教職員にとっては相談現場からの発信は貴重な指針となり、一人で抱え込まなくとも良いのだという安心感に繋がっている。また実際に、研修をきっかけに教職員が来談する場合もしばしば見られ、その際には電話

相談・オンライン相談を積極的に活用する傾向がうかがえた。

2) 参加しやすさ・交流しやすさ・活用の便宜

オンライン開催が主となったことから、自発参加を促す研修では以前よりも多数の参加者が得られており、研修内容に応じて積極的な質疑応答がなされ、交流面でも活性化を促進することが可能になっている。内容的には、オンライン開催の特性とも相まって、情緒的な交流よりも認知的な情報共有と具体的な対応策の検討が展開しており、教職員に馴染みやすい形式となっていたとも言えよう。さらにオンデマンド配信が好評な研修もあり、新たな日常における教職員研修のあり方への示唆が得られた。

(2) 教職員研修の今後の課題と展望

1) コロナ禍収束が見通せない状況が続く中で

対面での研修会開催が困難な状況が今しばらく続くことは確実であり、それだけにオンライン研修という形態で教職員と相談・支援機関スタッフとの交流の場が確保されることには大きな意義がある。“学生たちの今・教職員の現在”を共有し、教職員が各自の立場と状況ゆえに抱えている不安や戸惑いを発露し、受けとめられ、相互にコメントし合える風土をオンライン上でも一定程度まで形成できたことは貴重なステップとなった。

また、カウンセリング・メンタルヘルス相談における活動の様態は臨機に調整している状況ゆえ、保健管理センターや学生支援センターから支援機関における現在地の細やかな発信が求められている。

2) 制限緩和（出校本格化）で予想される新たな不適応状況

《研究1》でも示されたように、ひとまずは在宅勤務にもオンライン授業にも馴染んだ教職員が、制限の緩和とともに出校が本格化する状況となった際に感じる大きな環境変化をどう受けとめていけるかは大きな留意事項となる。実際に、教職員間においても段階的出校をどのように進めるかは、コロナ禍に対する不安感・危機感の相違が大きいため各所で齟齬が生じて、トラブルになりかける事態も起きている。ある意味ではリモート・在宅による勤務も含み込んだ“多様で柔軟な働き方”が可能になったとも言える状況下で、どの程度・どのようなペースで出校するのが適切なのか、あるいは体調がすぐれない場合に在宅勤務を認める基準はどのようなものか、等について部局ごとに相違が生じないような全学的な指針が求められている。

同時に、学生たちに対しても“どの程度・どのようなペースで出校するのが適切なのか”について、指導教員と所属学生たちの間で意見や感覚の食い違いから不満や鬱憤が集積して、“教育を受ける権利が損なわれている”“安全管理の責任を果たしていない”等の批判の応酬に至る場合が散見される。全学的な方針と部局ごと・専門領域ごとの風土のはざま、各教職員が孤立しないように、さらには学生たちが“コロナ禍でも本学に入って良かった”と思ってもらえるように、いっそう各種研修や適応支援教育が重要になっており、また適宜の協議・意見交換ができる体制を整えていく必要があるだろう。

3) オンライン空間を含むコミュニティ連働と新たな学生支援ネットワークの構築

コロナ禍においては、対面での情緒的・体感的交流が限定されることで生じる諸課題をいかに克服していくかが、相談場面のみならず、授業や研究あるいは教職員研修の展開において大

きなテーマとなっていた。それゆえ、まず授業において急速に発展することになるオンラインでの展開状況が、幾分かの間を置いてオンライン形態での研修開催にも結びついている。そこでは認知面での理解と言語的交流が前面に出ることを意識して研修内容やプログラムを考慮していくことになるが、日頃の業務に追われる教職員においては、移動を伴わない・予定を組みやすい・内容的に知的に理解しやすい・資料や録画の閲覧が容易、等の理由でますます歓迎される風潮となっている。このこと自体は、学生相談や保健管理に関する理解を深めて頂く機会が増えていくという意味で、発信者である Co. や Dr. にとっても極めて有用なツールを手にしたと言える部分もある。しかし一方で、オンラインにて生身の学生たちへの対処方法を語ったり、情緒的な交流が進みにくいオンライン実習で学生対応の実際について体験して頂く等の状況には、ある種のもどかしさを感じざるを得ない。今後、with/after コロナの状況が進展するに連れて、学生どうし、学生と教職員、教職員間における関係性の変質を見定め、実地研修とオンライン研修を適宜使い分けての研修プログラムの検討・構築が必要になってくると考えている。

4. 総合的考察

1) 学生にとってのオンライン授業 / 教職員にとってのオンライン研修

(1) 学習スタイル・生活スタイル・対人スタイルの変換

コロナ禍によりキャンパスに参集できなくなるという非常事態に直面して、各大学はオンラインでの授業を開講する設備とシステム、カリキュラムを短期間に作り上げ、学生たちはおおよそ全ての授業を在宅で受講する日々が続くことになった。かつては何がしかの特性や障害ゆえに（例えば教室に入れない、板書に付いていけず内容が理解できない等）通常の授業形態ではカリキュラムをこなすことが困難な学生に対する合理的配慮の一環として、オンライン受講が認められないかという意見交換を熱く行ったことが思い出される。「出校して他の学生たちと交流しながら学んでこそ意味がある」「教員の言葉や板書をリアルに受けとめることで、本質的な学習が成立する」「そもそも1名の学生のために、そこまでの設備や労力を割くことはできない」さらには法令的にも「通信教育課程ではないのだから、出校しなければ単位を賦与できないのではないか」といった意見も出されたことを思い出す。これらのコメントは当時おそらく大勢を占める世論であり、学生たちは既製の大学教育システムに乗れるように自分の学習スタイルや生活様式を修正することで初めて、教員や大学が蓄え供与する「知」の体系に触れることが可能になっていた。しかるにこのコロナ禍の襲来である。これまでの価値観や優先順位を決める基準が一気にひっくり返ったかの如くであるのだが、この「ゆるやかに・長期間・世界規模で進展する災害」の渦中で学生たちも教職員も表面的には「新しい日常」に意外なほどスムーズに適応したように見える。しかしながら、内面的には極めて大きなダメージを溜め込んでいる可能性は否定できず、長期的にその影響が思わぬ形で噴出する事態も生じないとは言えないだろう。

そして何回かの感染状況の波を経験しつつ、やがて全面出校へと再び舵を切ることになって、学生も教職員も徐々に「かつての日常」もしくは「新・新たな日常」に入っていくことになる。

そうであれば、誰もがみな、再度の学習スタイル・生活スタイル・対人スタイルの変換を求められることになるだろう。このような急激な変化に対応するとき、各構成員はどのような適応状況を示すことになるだろうか。「オンライン授業」について言えば、ほとんどの講義やゼミは出校・参集しての開講に戻り、遠方の講師に依頼する等のスポット的な開講時や合理的配慮が必要な学生にのみ特例的に許可するといった位置づけになる可能性が高そうである。これに比して「オンライン研修」では、多忙な教職員の実情に合わせて大規模会議から小規模のミーティングまでオンラインで開催されている状況に鑑みれば、参集して開催される研修は当面ごく少数に留まる見込みである。その意味では、よりドラスティックなスタイルの変更を求められているのは学生である、ということが出来るだろうか。(下図は「全国大学生サミット」(2021年10月)に合わせて作成したスライドである。コロナ禍において不適応になりやすい学生の心理(左図)と同様の状況でも意外と適応的な学生の心理(右図)を対比している。)



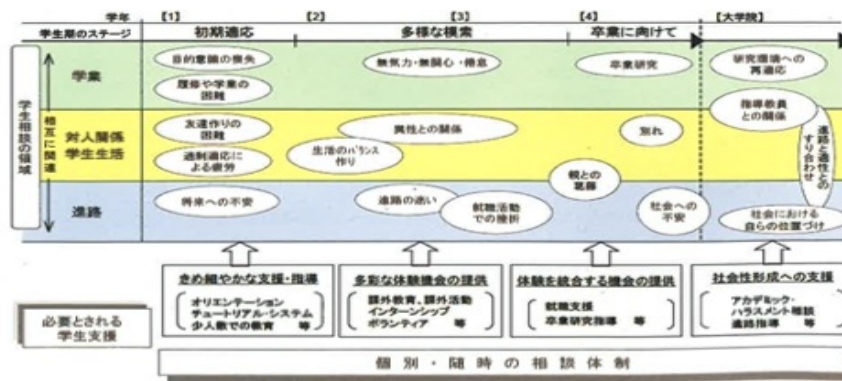
(2) カウンセラー及び医師が行う「授業」と「研修」

実際にクライアント学生もしくは教職員と対面で面接を行うことで、すなわち五感をフルに活用することでアセスメントや心理療法的な関わりを提供する Co. や Dr. にとって「オンライン相談」を組み込んでいくことはこれまでの自身の専門性を作り直していく試みでもあったと言って良い。その葛藤の大きさと模索の困難さが「オンライン授業」や「オンライン研修」の意味を深く問いかける姿勢につながっているとも言えよう。それゆえに多大な時間とエネルギーを注いで中身の吟味や進め方の工夫を凝らし、幸いにも学生たちにも教職員にも好評を持って受けとめられることになっている。また「オンライン授業」で得られた学生たちの感想が「オンライン研修」のタネとなり、「オンライン研修」のために作成したスライドが「オンライン授業」にも微修正の上で活用される、といった相互作用がしばしば生じている。我々は双方を同時に両輪のように回すことで、双方をより良いものにしようとする努力を重ねてきたと言っても

良いだろう。また、他大学からの講演依頼や全国的な研修会における講師担当等、学外サイクルと学内サイクルを連働させて（齋藤他, 2020b）、全国の教職員や Co. /Dr. との相互交流によって得られた知見と体験が両輪をさらに勢いよく回していくための駆動力にもなっていた。

その後、コロナ禍の変遷に伴って、学生たちは「参集しての対面授業」が大部分となる一方で、教職員では「オンライン会議」がほとんどという状況がしばらく続くことが予想されるのが「新・新しい日常」である。ここでは、Co. /Dr. が行う「(対面の) 授業」と「(オンライン) 研修」の相互作用は、幾分かの変質を余儀無くされるだろう。この事態は新たな葛藤を生むことになるのか、あるいは手持ちのネタや教授方法のレパートリーが輻輳的に集約されて臨床力量の一環を成す「伝えるチカラ」の向上に結びつくのかを注視していくことになる。「オンライン面接」を含む「ハイブリッド相談体勢」を構築した後は、そして学生の出校が増加して「対面面接」の割合が増していく中で、「(対面の) 授業」と「(オンライン) 研修」それぞれに向かい合う姿勢とその際の所感がどのように推移していくかを適宜点検していくことになる。（下図は「学生生活サイクル」（鶴田, 2001 等）をもとに(独)日本学生支援機構にて作成した図に、コロナ禍における学生たちの学年別の状況を研修・授業で示すためにアレンジした図の 2021 年度版である。）

*** 【図A】 コロナ禍での「学生生活サイクル」変質**
 『大学における学生相談体制の充実方策について』(独)日本学生支援機構, 2007) を基に
 =図は鶴田(2001)より作成=



- (図 1-1) 学生生活サイクルの概要:
- <1年生>
 - ・「新しい日常」支援
 - ・高校時代の変質
 - ・～便宜的な適応
 - ⇨ 持続的導入教育
 - <2年生>
 - ・失われた学生生活
 - ・儀式なく始まらない
 - ・～最大の要支援層
 - ⇨ 多彩な交流支援
 - <3年生>
 - ・ひとまずの拠点
 - ・実態が見えにくい
 - ・～問題の潜伏化
 - ⇨ 実態把握・接触
 - <4年生>
 - ・研究室に馴染めず
 - ・オンライン就活不安
 - ・～将来展望描けず
 - ⇨ 見取り図の提示
 - <大学院生>
 - ・研究/教員との相性
 - ・実験制限, 成果焦り
 - ・～資質以前の葛藤
 - ⇨ 丁寧・明瞭な導き

2. オンライン空間を含むコミュニティ連働と新たな学生相談像の構築

(1) 学生相談・保健管理の近未来

本紀要前号の論考でも考察したように、“非常時に改めて突きつけられたこと”は“臨床活動の本質と全体像の吟味”であった。面接室を拠点として、5感をフルに用いることから見立てと援助の方略を築いてきた Co. /Dr. にとって、オンラインを含み込んだハイブリッド体制の中で日々の相談活動を展開していくことには大きな戸惑いが付随する。

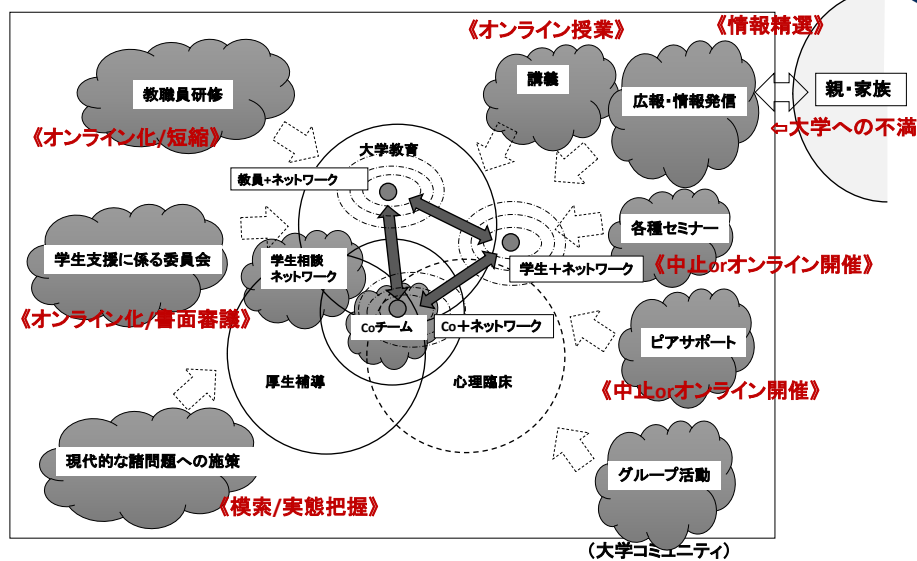
[研究1][研究2]それぞれで論じてきたように、コロナ禍によって対人関係の様相は《対面：情緒的・体感的交流》中心から《オンライン：認知面・言葉が前面》という側面を本格的に含み込んだものに大きく変容しており、大学教育のみならず学生相談・保健管理もまた新たな局面に移行している。旧来の方法論に固執していると、今を生きる学生・教職員に対して適切なサポートを提供し得なくなる恐れがあるだろう。しかし一方で、戦後数十年にわたって積み上げてきた我が国の学生相談・保健管理の歴史と成果を思えば（齋藤, 2021）、臨床活動の最も大切な本質はやはり“面接室を拠点として、5感をフルに用いること”に基盤があることは薄れることのない真実でもあろう。そのような歴史的変動の最中にある Co./Dr. が発信する「授業」や「研修」にどのような要素・内実が込められ、いかなる方法論やツール、そして言葉や表現で伝えていこうとすることになるか、Co./Dr. という臨床家が担う「授業」及び「研修」を学術的に検討することの意義もここに見出せるといって良い。（なお、当センターの Co./Dr. が担当した「研修」については、本紀要に毎号掲載している当該年度『グループ活動・コミュニティ活動』における「教職員対象の活動」の記載事項及び付表『学生支援に係る研修の実施状況～保健管理センターが関与したものを中心に～』を参照されたい。）

（2）連働する教育コミュニティで描く学生相談・保健管理

大学コミュニティそのものがオンライン空間を包含した、極めて容量が大きくその全体像を把握することが容易ではないものに移行したとすれば、このコミュニティ内外で学生生活を送る学生たちの発達・成長・適応のプロセスはこれまでとは大きく異なっているかもしれない。様々な構成員の活躍する舞台である大学コミュニティが変容したとすれば、学生・教職員との出会いが様々な様態で繰り広げられていくことになるならば、その構成員の織り成す様々な「連働」（齋藤, 2015）によって成り立つ相互支援、そして学生相談像は繰り返し再検討を、あるいは新たな構築を求められることになる。[研究2]で示したように、コロナ禍に応じて関係教職員が声を掛け合って、部局横断的な「新生サポートチーム」が結成されて、入学に伴う諸行事や新学期開始が大幅に遅れた学生たちへの多面的な支援と情報提供が文字どおり安全・安心を提供するセーフティ・ネットとして機能している。このような好ましい「連働」の実際が今後どのように広がっていくか、そして学生相談や保健管理がどのようにその一翼を担えるかを注視していきたいものである。

我々、学生相談や保健管理の専門家は、教育コミュニティに所属・内包される存在であると同時に、構成員個人や各種集団さらにはコミュニティ全体に関与しながら対象化する、すなわち常に影響し合いながら歩みを進めていく存在でもある。そこで展開する協働作業は「学生相談モデル」を構成する3要素（厚生補導・大学教育・心理臨床）に照らして考えれば、大学教育のありようと強く連関する「教育的連働」とも称することが出来るように感じている。そこに厚生補導との連関から「助育的連働」、心理臨床との連関から「治療的連働」という2つの側面を加えつつ、自らの立ち位置を調整していくことになる。コロナ禍において Co./Dr. が担う「授業」「研修」の意義を検討する本研究は、このように「学生相談モデル」の再検討にも繋がっていくことになるだろう。（下図は2021年度の「全学FD研修」等のために作成したスライド）

*** 学生相談モデルとコロナ禍状況** (齋藤,2015.から)



⇒ネットワークの一時的な希薄化(変質)⇒再構築の途上にある
 (教職員の新たな「連働」を再始動させていく)

14

付 記

本研究は科学研究費助成事業（課題番号 17K04407：研究課題名「学生相談における連携・協働の比較研究と研修プログラム作成」代表者：齋藤憲司）の一環として展開している。

また〔研究1〕は日本学生相談学会第39回大会（大阪大学）において、〔研究2〕は第59回全国大学保健管理研究集会（広島大学）において研究発表を行った内容をもとに、本紀要の趣旨に沿うよう大幅に加筆修正したものである。

引用・参考文献

(独) 日本学生支援機構 2007 大学における学生相談体制の充実方策について―「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」―。

早坂浩志 2020 学生に向けた活動. 日本学生相談学会(編) 2020 学生相談ハンドブック：新訂版. 学苑社. p.162-170.

道又紀子 2021 教育相談の授業におけるスクイグルの実践―遊びから学ぶもの―. 東京工業大学保健管理センター紀要, 7, 41-46.

大島啓利・内野悌司 2020 教職員に向けた活動. 日本学生相談学会(編) 2020 学生相談ハンドブック：新訂版. 学苑社. p.179-192.

齋藤憲司 1999 学生相談の専門性を定置する視点―理念研究の概観と4つの大学における経験から. 学生相談研究, 20(1), 1-22.

齋藤憲司 2001 大教室講義の実践を通じて振り返る学生の今日的状況―「からだ」が語る言葉・「私語」が語る現実―. 東京工業大学保健管理センター年報, 28, 72-76.

齋藤憲司 2002 学生相談の柔構造を規定するシステムとスタイル―日々の相談活動への事例

- 的考察から一. 学生相談研究, 23(1), 1-9.
- 齋藤憲司 2007a 学生相談に関する教職員研修の課題と留意点—1年間(2006年)の研修活動の分類・点検から一. 東京工業大学保健管理センター年報, 34, 53-60.
- 齋藤憲司 2007b 新生への適応支援教育/導入教育について—学生相談の立場からの展望—. 東京工業大学保健管理センター年報, 34, 61-65.
- 齋藤憲司(監修) 2012 学生相談の基本(DVD). 日本経済新聞出版社
- 齋藤憲司 2015 学生相談と連携・協働—教育コミュニティにおける「連働」—. 学苑社.
- 齋藤憲司 2020 大学生の学びと学生生活を保証するために—リモート授業の不安に寄り添う—. 英語教育, 69(9), 42-44.
- 齋藤憲司 2021 学生相談・学生支援の20年—実戦と組織化を支える理念—. 大学教育学会誌, 43(1), 2-5.
- 齋藤憲司・石垣琢磨・高野 明 2020 大学生のストレスマネジメント—自助の力と援助の力—. 有斐閣.
- 齋藤憲司・毛利眞紀・安宅勝弘・丸谷俊之・道又紀子・福岡俊彦・三平満司 2019 学内状況と連働した教職員研修の新たな展開と留意点. CAMPUS HEALTH, 56(1): 310-312.
- 齋藤憲司・安宅勝弘・丸谷俊之・高田純・道又紀子・片岡彩・宣聖美・岡安朋子・河西正枝 2020a コロナ禍における個別相談の対応方針と機関内連働(2) —. 第42回全国大学メンタルヘルス学会総会プログラム・抄録集, 23.
- 齋藤憲司・安宅勝弘・三平満司・福岡俊彦・丸谷俊之・道又紀子・高田 純 2020b 学内サイクルと学外サイクルが連働する新たな学生支援モデルの構築—学生相談・保健管理の評価軸をめぐって—. 東京工業大学保健管理センター紀要, 7, 18-30.
- 齋藤憲司・高田 純・道又紀子・片岡 彩・宣 聖美・岡安朋子・河西正枝 2021a コロナ禍初期における機関内連働と相談体制整備—ワークシートを媒介としたカウンセラーの相互研鑽—. 東京工業大学保健管理センター紀要, 8 ; 16-30.
- 齋藤憲司・高田 純・道又紀子 2021b コロナ禍における授業実践・各種発信と学生相談活動(1) —同一大学におけるコミュニティ連働—. 日本学生相談学会第39回大会発表論文集, 77.
- 齋藤憲司・安宅勝弘・道又紀子・丸谷俊之・高田 純・福岡俊彦・三平満司 2021c 非常時/新たな日常における教職員研修と学生支援をめぐるコミュニティ連働: 第59回全国大学保健管理研究集会抄録集, 64.
- 高田 純・齋藤憲司・道又紀子・片岡 彩・宣 聖美・岡安朋子・河西正枝 2020 学生相談におけるオンラインカウンセリングの対応方針と漸進的活用—コロナ禍におけるカウンセリングチーム, ワークシート記述内容の変遷から—. 第42回全国大学メンタルヘルス学会総会抄録集, 23.
- 高田 純・齋藤憲司・安宅勝弘・丸谷俊之・道又紀子 2021a コロナ禍における学生相談・メンタルヘルス相談, CAMPUS HEALTH, 58(1), 15-19.
- 高田 純・齋藤憲司・道又紀子・片岡彩・宣聖美・岡安朋子・河西正枝 2021b 新型コロナウイルス感染症拡大に伴うカウンセリングの転機と対応の推移. CAMPUS HEALTH, 58(1), 332-334.

高田 純・齋藤憲司・高橋国法・土屋明子 2021c コロナ禍における授業実践・各種発信と学生
相談活動（2）ーオンラインで結ぶ大学間連働ー. 日本学生相談学会第39回大会発表論文集.
78.

鶴田和美(編) 2001 学生のための心理相談ーカウンセラーからのメッセージー. 培風館.

内野悌司・高田純・小島奈々恵・磯部典子・岡本百合・日山亨・松山まり子・石原令子・二本
松美里・吉原正治他 2014 講義『学生生活概論』の教育効果について：開講方式の変更に
ともなう影響に着目して. 総合保健科学, 30, 35-43.

本学大学院における休学、退学および留年の状況について（第19報） 一「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査（令和2年度）」との比較より一

安宅勝弘, 丸谷俊之

はじめに

国立大学保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会では、全国の国立大学大学院における休学、退学（除籍・死亡を含む）、留年学生の実態把握のため「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査」を平成14年度より開始し、本学保健管理センターが調査の実施と集計を行っている。本紀要（平成24年度以前は年報）では第1回の調査以来、全国データの一部を本学の状況と比較しながら紹介している[1]。本稿では第19回調査（調査対象は令和2年度）の結果について報告する。

「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査」について

1) 大学院をめぐる諸状況

平成23年度まで一貫して増加していた日本の大学院学生の総数は平成24年度に初めて減少に転じ、以降4年連続で減少、平成28年度より再び増加に転じ、令和元年度までの4年間は微増傾向が続いた。令和2年度は僅かに前年度より学生数は減少した。令和2年度学生数の大学区分ごとの内訳は国立大学59.7%（学生数前年比0.5%減）、公立大学6.5%（同1.5%増）、私立大学33.7%（同0.5%増）と国立大学で微減、公立大学と私立大学では増加した。また全体に占める女子学生の比率は32.6%と一貫して増加傾向が続いており、過去最も高い数字となった。大学院学生数の年次変化を図1に示す（データは文部科学省による）。

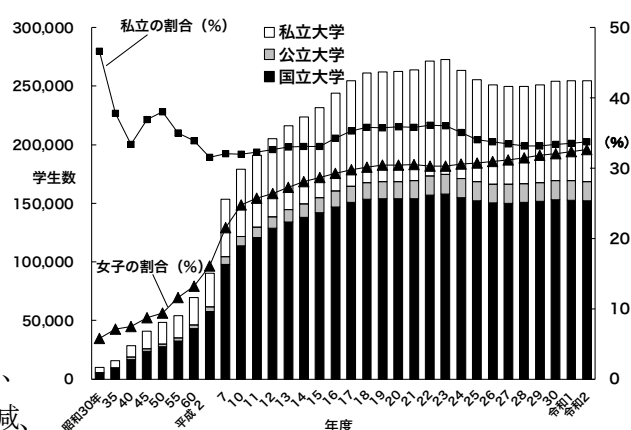


図1 大学院学生数の年次変化

女子学生の比率は32.6%と一貫して増加傾向が続いており、過去最も高い数字となった。大学院学生数の年次変化を図1に示す（データは文部科学省による）。

2) 対象と方法

大学院を置く全国立大学法人86大学に対し、本調査の主旨を説明した調査協力の依頼状を文書にて発送、調査協力の可否についてのアンケートを行った。なお令和2年度は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミックによる教育研究環境や社会経済状況の変化による影響を調べるため、死亡実態調査は迅速調査として令和3年4月に実施し、86大学（回収率100%）より協力が得られた。例年の調査項目に加え、推定される自殺の動機（10項目より選択）、推定されるCOVID-19との関連（直接的、間接的、なし、不明）について回答を求めた。学生数統計調査および休退学実態調査は、例年どおりの方法、調査時期に実施し、それぞれ調査協力が得られた84大学（全国立大学法人の94%）および73大学（同85%）を対象とした。

本調査は次のa)～c)の3つから構成される。

a) 学生数統計調査

課程別（修士・博士・4年生博士・専門職課程（2年制・3年制）・5年一貫制課程）、研究科別（文部科学省学科系統分類による）、学生区分別（日本人学生・外国人留学生・社会人学生・夜間学生）、入学年度別に調査年度在籍学生数、休学者数、退学者数（事由別-除籍、死亡を含む）、海外留学者数を集計し、休学、退学、留年などについての動向を調査した。

b) 休退学実態調査

休退学実態調査では、学生からの書類上の届け出理由とは別に、休学あるいは退学の実際の原因について各事例の実態調査を行い、それに基づき理由を「精神疾患」、「精神的障害の疑い」、「教育路線外の理由」、「教育路線上の理由」、「環境要因」、「身体疾患」、「不明・未調査」の計7つのカテゴリーに分類、さらに7つの各カテゴリーには下位項目として休退学理由の具体的な記述例がコード化されており、これに沿って休退学理由の詳細を分類した。また各事例に対する保健管理センターの医師あるいはカウンセラーの関与の有無も併せて調査され、学生のメンタルヘルスの問題と休退学の実態の関係についても把握することができるようにしている。

c) 死亡実態調査

調査年度内に死亡学生がいた場合、その死因や死亡時の状況を調査、自殺および自殺が疑われる事例については、事前の保健管理センターの関与の有無や精神疾患既往の有無などについても可能な限り調査した。

これら b) c) の実態調査については個々の事例のプライバシーに配慮し、大学・個人が特定されないよう全体集計の中で扱うよう留意している。

本稿では、学生数統計調査と休退学実態調査を中心に全国集計の結果および本学のデータを示す（死亡実態調査の全国集計の詳細については報告書[2]を参照）。

3) 全国集計（学生数統計調査）における休学・退学・留年率

令和2年度学生数統計調査の規模と基本数は表1の通りである。学部学生に対する同様の調査[3]では休学率、退学率、留年率いずれも男子学生が女子を上回ることが指摘されているが、大学院学生全体でみると休学率、留年率では女子学生の方が有意に高く（ χ^2 検定、 $p < 0.05$ 、表6も参照）、退学率では有意差は認められなかった。表2、図2はこれらを課程別にみたものである。

修士課程、専門職課程（2年制）、4年制博士課程、博士課程（後期）では、退学、休学、留年率の順に高くなり、各比率はこの課程の順に高くなる傾向にある。

専門職課程（3年制）では休学率が留年率を上回り、5年一貫制課程では退学率が留年率、休学率よりも高くなっている（図2）。なお短縮修了は集計上、退学としてカウントしているが、一部の専門職課程では既習者の短縮修了の扱いがなくなっている。学生区分別、研究科別に休学・退学・留年率をみたものが図3および図4である。

学生区分別にみた場合、退学率にそれほど違いがないのに対し、休学率、留年率はそれぞれで異

令和2年度学生数統計調査の規模と基本数（全国）

		学生数	比率
在籍数	合計	152,727	
	男子	107,525	
	女子	45,202	
休学	合計	10,812	7.1%
	男子	6,836	6.4%
	女子	3,976	8.8%
退学	合計	6,200	4.1%
	男子	4,313	4.0%
	女子	1,887	4.2%
留年	合計	18,264	12.0%
	男子	11,557	10.7%
	女子	6,707	14.8%
死亡	合計	41	26.8
	男子	38	35.3
	女子	3	6.6

表1 死亡率は学生10万対

なっている（図3）。とくに社会人学生、夜間学生の留年率、休学率の高さが目立つ（ただし夜間の学生数は全体の0.8%とかなり少数である）。また研究科別にみた図4では、グラフ右端の全研究科のデータと比較すると留年率、休学率は研究科によって大きく異なり、総じて文化系で高く、理科系で低くなる傾向を認める。

表2 課程別・男女別にみた留年・休学・退学・死亡率

		修士課程		博士課程		4年制博士課程		専門職2年制		専門職3年制		5年一貫制課程	
		学生数	比率	学生数	比率	学生数	比率	学生数	比率	学生数	比率	学生数	比率
在籍数	合計	93,151		34,228		16,276		6,067		1,479		1,526	
	男子	67,716		23,008		11,230		3,766		917		888	
	女子	25,435		11,220		5,046		2,301		562		638	
休学	合計	3,718	4.0%	4,636	13.5%	1,906	11.7%	278	4.6%	143	9.7%	131	8.6%
	男子	2,528	3.7%	2,751	12.0%	1,209	10.8%	182	4.8%	93	10.1%	73	8.2%
	女子	1,190	4.7%	1,885	16.8%	697	13.8%	96	4.2%	50	8.9%	58	9.1%
退学	合計	2,224	2.4%	2,652	7.7%	882	5.4%	123	2.0%	84	5.7%	235	15.4%
	男子	1,672	2.5%	1,760	7.6%	601	5.4%	84	2.2%	56	6.1%	140	15.8%
	女子	552	2.2%	892	8.0%	281	5.6%	39	1.7%	28	5.0%	95	14.9%
留年	合計	5,939	6.4%	8,673	25.3%	2,904	17.8%	444	7.3%	136	9.2%	168	11.0%
	男子	3,923	5.8%	5,203	22.6%	2,011	17.9%	247	6.6%	80	8.7%	93	10.5%
	女子	2,016	7.9%	3,470	30.9%	893	17.7%	197	8.6%	56	10.0%	75	11.8%
死亡	合計	22	23.6	13	38.0	4	24.6	1	16.5	0	0.0	1	65.5
	男子	21	31.0	11	47.8	4	35.6	1	26.6	0	0.0	1	112.6
	女子	1	3.9	2	17.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0

死亡率は学生10万対

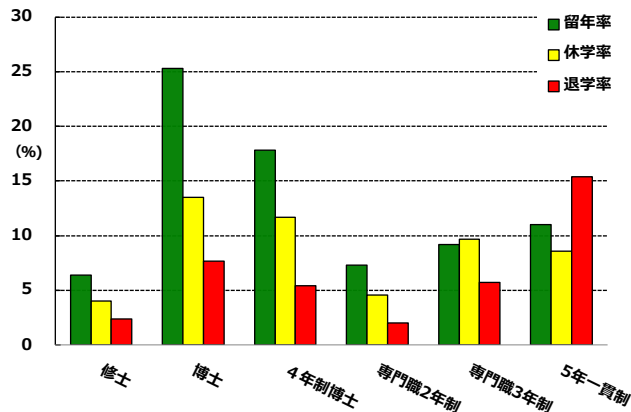


図2 課程別にみた留年・休学・退学率

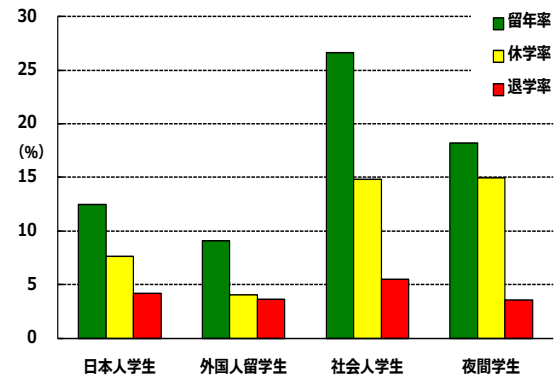


図3 学生区別にみた留年・休学・退学率

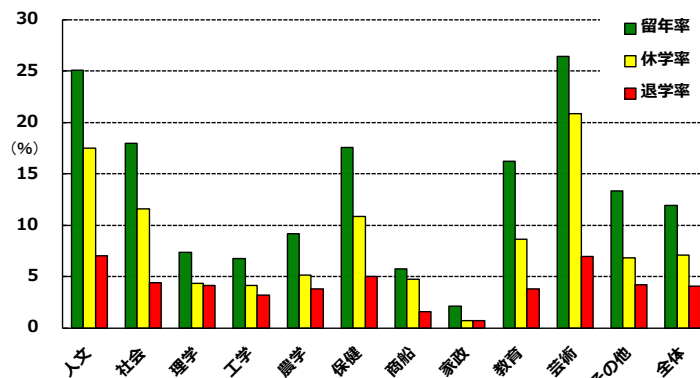


図4 研究科別にみた留年・休学・退学率

本調査では同一年度中に休学から退学へと至った学生数も調べているが、修士課程の休学者(3718名)のうち21.7%、博士課程の休学者(4636名)のうち11.6%、4年制博士課程の休学者(1906名)のうち6.1%、専門職2年制課程の休学者(278名)のうち21.9%、専門職3年制課程の休学者(143名)のうち18.9%、5年一貫制課程の休学者(131名)のうち14.5%が同一年度中に退学しており、修士課程や専門職課程(2年制)では休学からそのまま退学に至る学生の割合が他に比べて高く、4年制博士課程(医歯薬系)では逆に低くなる傾向を認めた。

さらに留年学生の休学率、退学率を見ると、全学生の休学率7.1%(男子6.4%、女子8.8%)に対し、留年学生では休学率34.0%(男子33.4%、女子35.2%)、全学生の退学率4.1%(男子4.0%、女子4.2%)に対し、留年学生では退学率14.1%(男子14.7%、女子12.9%)といずれも高い。

4) 本学大学院と全国集計、理工系大学群データの比較

修士課程、博士課程(後期)について、本学の休学率、退学率、留年率を全国集計、理工系大学群(本学を含む理工系単科大学11大学院)のデータと比較したものを図5に示す。修士課程では、本学の休学率、退学率、留年率はいずれも全国平均より低く、理工系大学群と比べると留年率、休学率がやや高く、退学率は低くなっている。博士課程(後期)において、全国集計では休学率が退学率より高くなるのに対し、理工系大学群ではその差は小さい。女子学生について見ると、本学においては修士課程では休学率が留年率を上回った。過去には理工系大学群では博士課程の退学率が休学率を上回る傾向を認めていたが、今回は男女いずれも休学率の方が高くなっている(図6)。

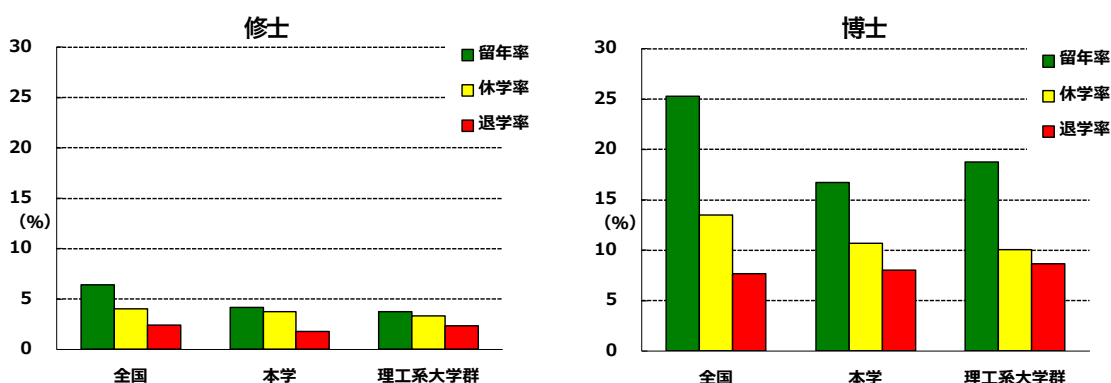


図5 全国一本学一理工系大学群別にみた留年・休学・退学率

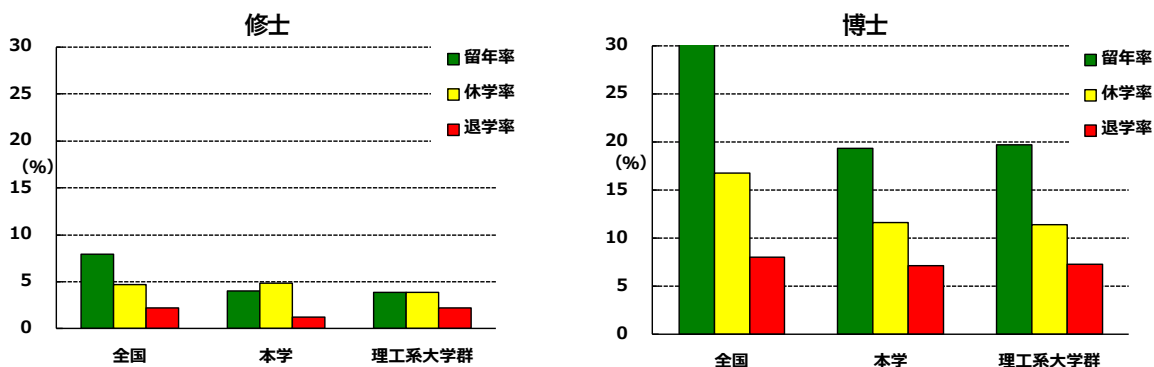


図6 全国一本学一理工系大学群別にみた留年・休学・退学率(女子学生)

次に学生区分別にみた留年・休学・退学率を、本学と理工系大学群とで比較したものを図7、図8に示す。日本人学生では両群の大きな傾向の違いは認めないが、外国人学生についてみると、本学の留年率は修士課程、博士課程いずれにおいても理工系大学群のそれより低くなっており、この傾向は前年と同様であった（本学の社会人学生のデータは博士課程のみで修士課程の集計はなし）。

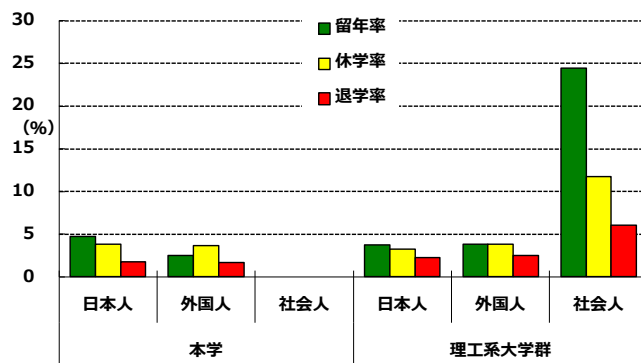


図7 本学—理工系大学群の比較（学生区分別—修士）

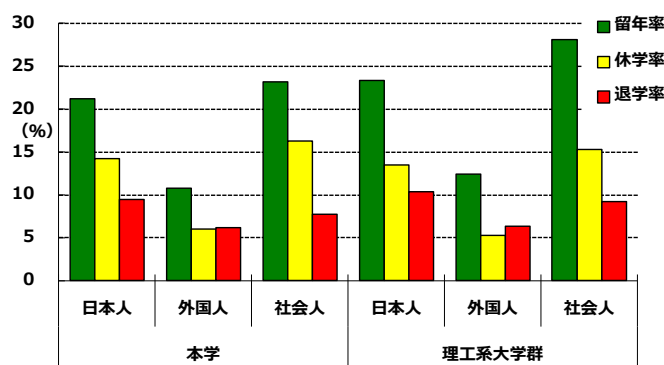


図8 本学—理工系大学群の比較（学生区分別—博士）

退学はその事由別に「短縮修了」「普通退学」「満期退学」「単位未修得」「授業料未納」「強制退学」「死亡」に分類し、集計している。課程別にみた退学者の事由別内訳比率を表3、表4に示す。

表3 退学事由の内訳（全国—課程別）

修士(2224人)		博士(2652人)		4年制博士(882人)	
普通退学	87.0%	満期退学	51.8%	満期退学	57.8%
授業料未納	6.1%	普通退学	38.5%	普通退学	32.8%
短縮修了	3.8%	短縮修了	4.9%	短縮修了	6.2%
死亡	1.0%	単位未修得	2.0%	授業料未納	2.2%
単位未修得	0.9%	授業料未納	2.0%	死亡	0.5%
満期退学	0.8%	死亡	0.5%	単位未修得	0.3%
強制退学	0.6%	強制退学	0.4%	強制退学	0.2%
専門職2年制(123人)		専門職3年制(84人)		5年一貫制(235人)	
普通退学	78.9%	普通退学	85.7%	普通退学	88.9%
授業料未納	13.0%	満期退学	7.1%	満期退学	8.5%
短縮修了	5.7%	単位未修得	4.8%	短縮修了	0.9%
満期退学	0.8%	授業料未納	2.4%	授業料未納	0.9%
単位未修得	0.8%			死亡	0.4%
死亡	0.8%			強制退学	0.4%

カッコ内の数字は退学者数

表4 退学事由の内訳（本学—理工系大学群の比較）

修士				博士	
本学 (77)		理工系大学群 (334)		本学 (133)	理工系大学群 (367)
普通退学	66.2%	普通退学	82.0%	満期退学	58.6%
短縮修了	22.1%	授業料未納	7.2%	普通退学	27.1%
授業料未納	7.8%	短縮修了	6.9%	短縮修了	12.8%
満期退学	2.6%	死亡	1.5%	授業料未納	1.5%
死亡	1.3%	満期退学	1.2%	授業料未納	3.0%
		強制退学	0.6%	死亡	0.3%
		単位未修得	0.6%		

カッコ内の数字は退学者数

本学では修士課程における短縮修了の割合が全国、理工系大学群に比べ高くなっている（前述の通り、本調査において短縮修了は集計上、退学としてカウントしている）。また博士課程においては本学、理工系大学群とも満期退学の割合が普通退学を上回っており、本学ではとくにその差が大きく

なっている。これらの傾向は前年調査の結果と同様であった。

5) 休退学実態調査の結果から

休退学実態調査の規模と基本数は表5の通りである。休退学実態調査では、学生からの書類上の届け出理由とは別に、休学あるいは退学の実際の理由について実態調査を行い、7つのカテゴリーに分類している。これら休学、退学者数をカテゴリー（大分類）ごとに集計、内訳比率を示したものが図9（全国）および図10（本学）である。修士、博士課程いずれも、休学では「環境要因」、退学では「大学教育路線外の理由」によるものもっとも多くなっている。本学学生の休学理由のうち、精神疾患によるものの割合が全国集計のそれに比べやや高く、退学理由では「環境要因」の割合が低い。この傾向は前回までの結果でも同様であった。

令和2年度 休退学実態調査の規模と基本数（全国）

資料提供大学数：73大学

	修士課程	博士課程	計
休学	2964	5389	8353
退学	1845	2916	4761
計	4809	8305	13114

表5

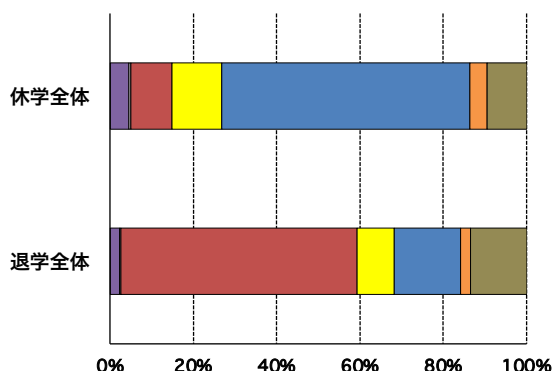


図9 休学・退学理由—大分類の内訳（全国）

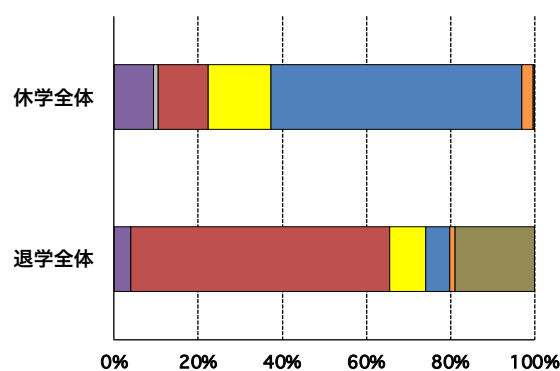


図10 休学・退学理由—大分類の内訳（本学）

調査ではさらに、各カテゴリー（大分類）に下位項目として休退学理由の具体例がコードされており、回答する形式になっている。この具体的な休学・退学理由について、全国集計における理系学生と本学学生の多いものから順に示したのが図11～14である（不明・未調査は除く、グラフの数字は%）。なお、ここでいう理系（全国集計）とは、図4の研究科分類（文科省学科系統分類に基づく）のうち、理学・工学・農学・保健・商船を集計したものである（「その他」は学際的分野が多いためここでは含めていない）。

休学理由で「就労先の仕事の都合（社会人学生）」がもっとも多いのは理系（全国集計）、本学とも前回調査と同様であった。令和2年度の調査では実態調査結果記入欄にCOVID-19パンデミックに伴うものである旨の記載があるものは「災害」としてコード（パンデミックは特殊災害の1つ）しているが、理系（全国集計）ではこれが全体の5位、本学においては「経済的理由」を上回り2番目に多い休学理由となった（図11、図12）。

退学理由は、理系（全国集計）ではその差は僅かであるが「就職」、「単位取得退学・満期退学」

の順に多く、本学では「単位取得退学・満期退学」が「就職」を大きく上回った（図13～14）。なお前述の「災害」は、理系（全国集計）、本学いずれにおいても退学理由としては多くなかった。

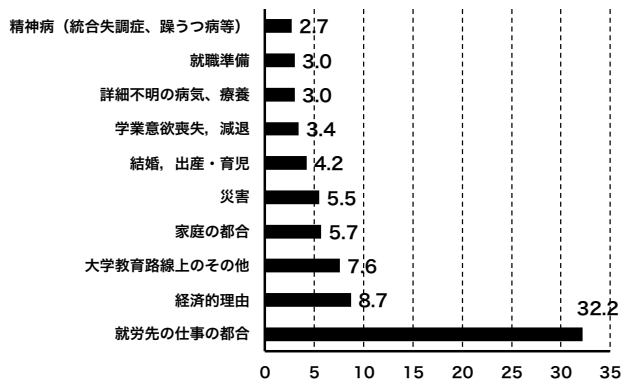


図11 理系（全国集計）—休学理由・具体例

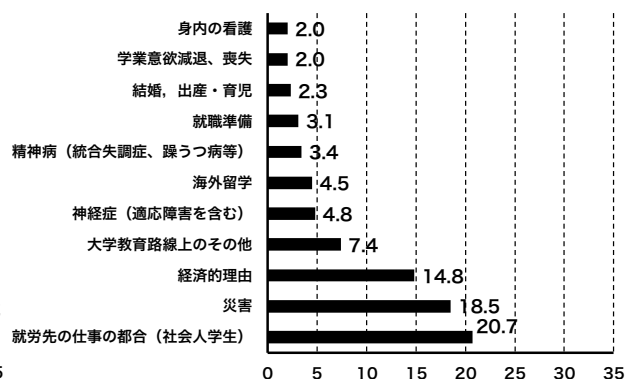


図12 本学—休学理由・具体例

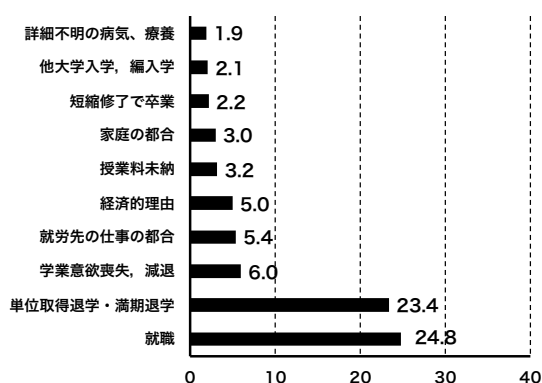


図13 理系（全国集計）—退学理由・具体例

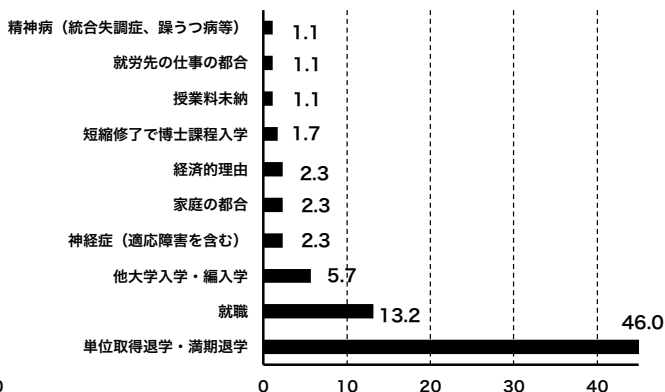


図14 本学—退学理由・具体例

図15～22は休学・退学理由を、男女別に全国集計—本学で比較したものである。休学理由をみると、全国集計（図15、図17）に比べ「災害」（前述のCOVID-19パンデミック関連）によるものが上位に位置し、女子ではもっとも多い理由となっている。また前年度と同様、本学では男子（図16）の「神経症（適応障害を含む）」と精神的不調（「精神病（統合失調症と躁うつ病等）」が全国集計

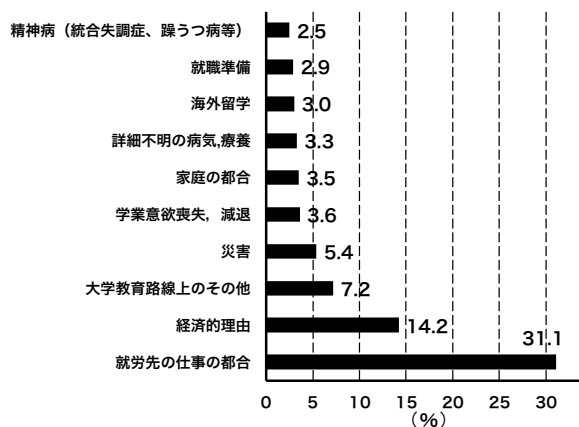


図15 全国集計—男子休学理由・具体例

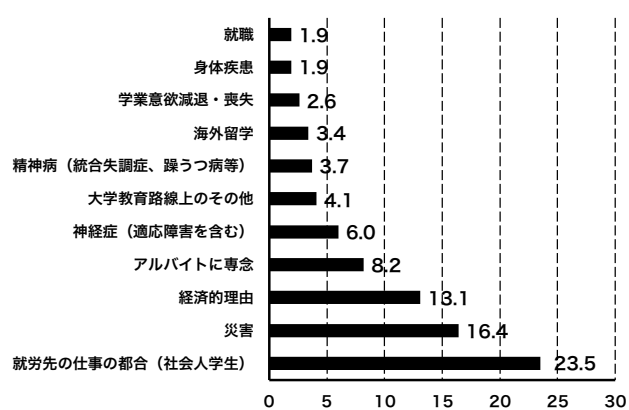


図16 本学—男子休学理由・具体例

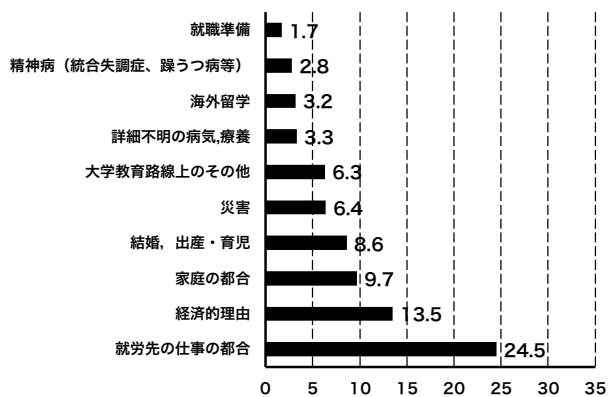


図 17 全国集計—女子休学理由・具体例

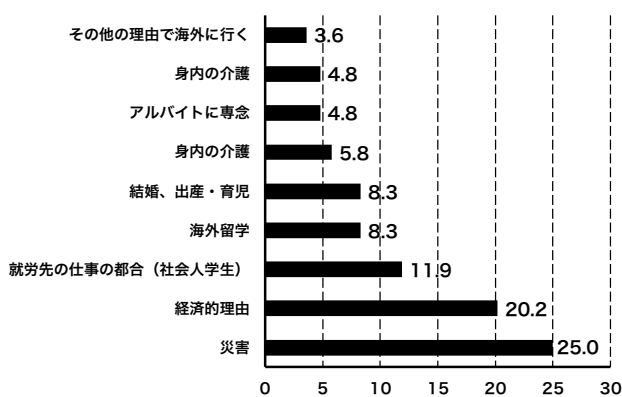


図 18 本学—女子休学理由・具体例

に比べてやや多い。

退学理由は、例年男女とも「単位取得退学・満期退学」と「就職」が1—2位を占め、以下の理由を大きく上回る傾向を認めるが、今回、本学の女子学生では「単位取得退学・満期退学」が6割以上を占め、「就職」による退学は少なかった (図 22)。

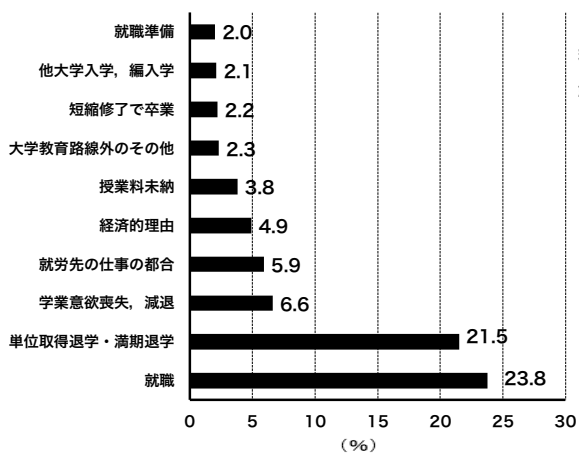


図 19 全国集計—男子退学理由・具体例

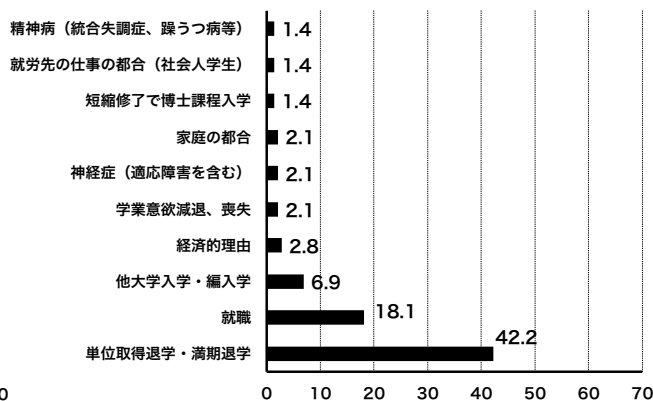


図 20 本学—男子退学理由・具体例

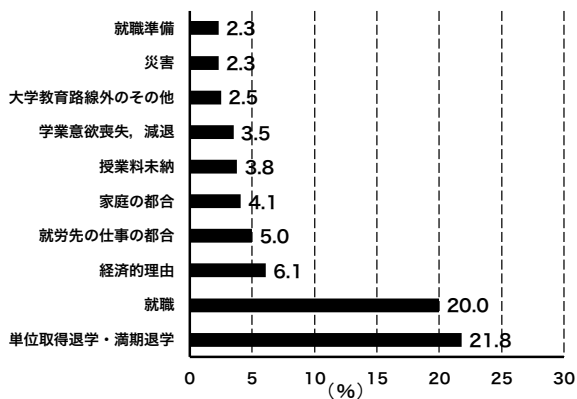


図 21 全国集計—女子退学理由・具体例

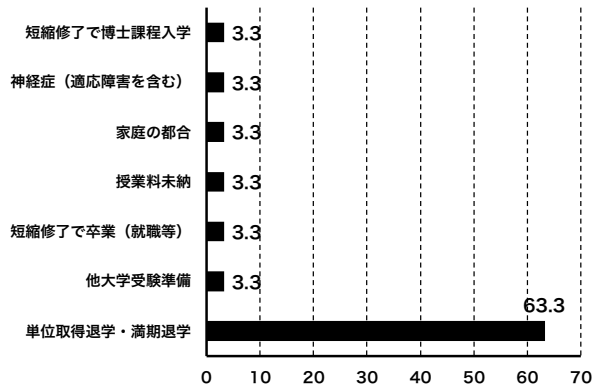


図 22 本学—女子退学理由・具体例

6) 男女別に見た休学・退学・留年率の比較

全国集計における男女別の休学・退学・留年率の傾向は前述（表1・2）の通りであるが、これをさらに研究科別に、女子学生の在籍比率と併せて示したのが表6である。各比率における性差の有無は χ^2 検定により調べた。

本学大学院の研究科、専攻分野は全国集計の学科系統分類では「理学」「工学」「その他」のいずれかに該当する。全国集計では、「理学」の退学率、留年率、「工学」の休学率、留年率、「その他」では休学率、留年率で女子学生の方が有意に高くなっている。本学の場合、大学院全体でみると休学率（男子5.4%、女子6.7%）、退学率（男子3.6%、女子2.9%）、留年率（男子7.5%、女子8.3%）と、休学率、留年率において女子の方が高くなっているが、統計的に有意な差ではなかった（ $p < 0.05$ ）。

先にも述べたように、全国でみると大学院学生では女子学生の休学率、留年率の方が高く（退学率は年度により）、学部学生の場合とは逆の傾向がこれまで一貫して見られてきた。これには両課程の就学年齢の違いや、女子学生を取り巻く環境要因、ライフイベント（結婚・出産・育児など）が関連している可能性が考えられる。さらに今回、本学の女子学生では前年に比べ休学率が高くなり（4.3%→6.7%）、その理由においては「災害」（COVID-19 パンデミックに関連したもの）がもっとも多くなった。休学状況に対するCOVID-19 パンデミックの影響は、渡航制限など外国人留学生において特に大きかったと推測され、今回の結果は、本学大学院における外国人留学生比率、とくに女子留学生の比率が高いことを反映していると考えられる（令和2年度の外国人留学生比率：修士課程24.8%（男子20.0%、女子43.7%）、博士課程43.1%（男子38.5%、女子61.0%）、大学院全体29.8%（男子25.1%、女子48.4%））。

表6 研究科別にみた休学、退学、留年率における性差（全国）

	全体	人文	社会	理学	工学	農学	保健	商船	家政	教育	芸術	その他	
女子在籍比率 %	29.6%	52.9%	39.9%	22.9%	14.8%	39.0%	38.5%	14.2%	100.0%	47.0%	60.6%	33.9%	
休学率	男子	6.4	18.0	13.0	4.2	4.0	5.4	10.0	4.3	—	8.7	20.0	6.0
	女子	8.8	17.1	9.5	4.7	4.9	4.8	12.3	7.4	0.7	8.6	21.4	8.5
退学率	男子	4.0	8.5	4.8	4.0	3.2	4.1	5.2	1.2	—	3.9	5.9	4.1
	女子	4.2	5.7	3.8	4.8	3.1	3.3	4.8	3.7	0.7	3.7	7.6	4.4
留年率	男子	10.8	27.1	18.8	7.1	6.3	9.4	16.8	6.1	—	15.8	25.9	12.3
	女子	14.8	23.3	16.7	8.3	9.0	9.0	18.8	3.7	2.1	16.6	26.7	15.5

*数字はすべて%

*太字・塗りつぶしは χ^2 検定（ $p < 0.05$ ）にて性差が認められた数値（高い方）

7) 死亡実態調査（全国）の結果から

調査開始以来19年間の全国の大学院学生の死因別死亡率（学生10万対）の推移を図23に示す。大学院学生の年代構成で中心となる20代では、同世代一般人口の場合、死亡原因は自殺がもっとも多く、事故死（「不慮の事故」）がこれに続く。本調査の結果と比較すると、大学院学生の場合、一貫して事故による死亡率は同世代の一般人口のそれを大きく下回って推移している。自殺死亡率も同世代一般人口に比べれば低い水準にはとどまっているものの、図24に示すように男子学生の自殺死亡率は、増減を繰り返しながら全体としては平成26年度まで上昇傾向を示していた。その後、

平成 27 年度以降は減少に転じ、男女計および男子学生の自殺死亡率は平成 30 年度に調査開始以来最も低値となったが、残念ながら令和元年度は男女ともに増加、令和 2 年度は男子学生がさらに高くなった。

令和 2 年度の死亡実態調査では、自殺およびその疑いの事例については推定される COVID-19 との関連の有無を調査項目に追加しているが、一部では間接的関連が疑われたものの、多くの事例で関連は不明・不詳であり[4]、令和 2 年度においては COVID-19 パンデミックは大学院生の自殺に一定の影響はあったものの、明確に自殺率を押し上げたとはいえないようである。自殺は複合的な要因で起きると考えられ、パンデミックとの過度な関連付けはすべきではない。しかし COVID-19 それ自体、あるいは感染対策としての行動制限等の生活様式の変化がメンタルヘルスに及ぼす影響について今後も注意深く見る必要があるだろう。

同世代一般人口に比べて大学生の自殺死亡率が低くなることについて、かつて米国では「大学には一定の自殺防止機能が備わっている」と論じられてきたのだが[5]、日本においてはこの差が縮小する傾向を認めている。自殺予防対策は、大学ごとの事情を考慮したうえできめ細かに検討されるべき[6][7]であり、最近ではより積極的な介入として大学生の自殺予防プログラムの開発・検討も進められている[8]。自殺予防対策は大学における危機管理・学生支援の最重要課題の 1 つとして位置づけられるものであり、可能な対策を着実に推し進めることが重要である。

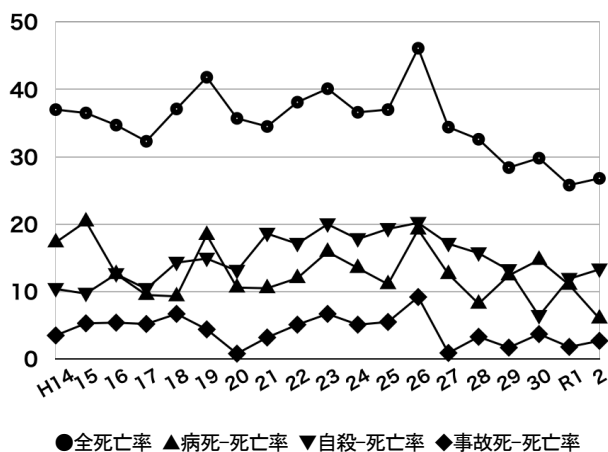


図 23 大学院学生の死因別死亡率 (全国)

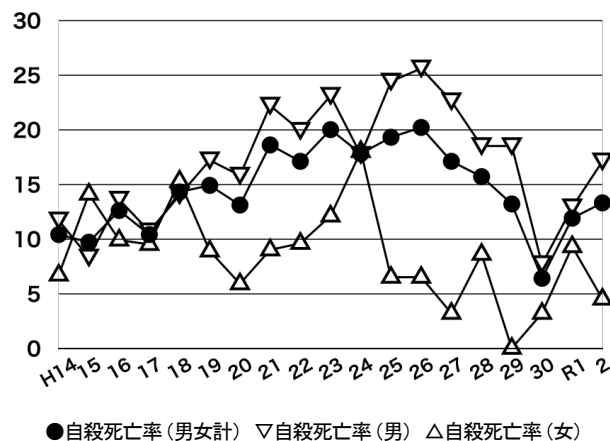


図 24 大学院学生の自殺死亡率 (全国)

さいごに

本稿で取り上げている「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査」は、毎年全国の国立大学の協力のもと成り立っている。調査は継続的に実施されることにより、大学院学生をとりまく状況についての多角的な分析が可能になり、学生支援のあり方を検討する上での参考資料となることが期待される。本学の調査回答にあたっては、教務課をはじめとする事務局に毎回多大なご尽力を頂いており、ここに改めて感謝申し上げます。

■ 参考資料

- [1] 安宅勝弘、丸谷俊之：本学大学院における休学、退学および留年学生の状況について（第18報）－「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査（令和元年度）」との比較より－. 東京工業大学保健管理センター紀要 8：31-40（2021）
- [2] 丸谷俊之、安宅勝弘（班長）、高山潤也、齋藤憲司、佐藤武：大学院における休学・退学留年学生に関する調査-第19報（令和2年度集計結果）-. 国立大学保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会大学院学生休退学調査研究班報告（2022）
- [3] 布施泰子、梶谷康介、平井伸英、苗村育郎、佐藤武：大学における休学・退学・留年学生に関する調査 第43報（2020年度調査結果）. 国立大学保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会学部学生休退学調査研究班報告（2022）
- [4] 全国大学保健管理協会 2020_2021 学生調査実施ワーキンググループ、国立大学保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会学部学生休退学調査研究班・大学院学生休退学調査研究班、全国大学メンタルヘルス学会「大学生の自殺予防プログラム全国開発研究」研究班（安宅勝弘、太刀川弘和、布施泰子、丸谷俊之、高橋あすみ、河西千秋、石井映美、小田原俊成）：令和2年度大学における死亡学生実態調査・自殺対策実施状況調査報告書（2022）
- [5] Schwartz A. J.： Four eras of study of college student suicide in the United States: 1920-2004. *Journal of American College Health* 54 (8): 353-366 (2006)
- [6] 国立大学法人保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会自殺問題検討ワーキンググループ：大学生の自殺対策ガイドライン 2010. (2010)
- [7] 日本学生相談学会：学生の自殺防止のためのガイドライン. (2014)
- [8] 太刀川弘和、安宅勝弘、石井映美、衛藤暢明、岡本百合 ほか：大学生の自殺予防プログラムの開発に関する予備的検討. *大学のメンタルヘルス* 3:95 (2019)
- [9] 丸谷俊之、安宅勝弘、齋藤憲司、高山潤也、佐藤武、杉田義郎、苗村育郎：全国立大学大学院学生の病死、事故死の状況について－13年間の調査より－. *CAMPUS HEALTH* 54 (2): 217-222 (2017)

感染症の時代に生きること ～正確な情報を常に把握・理解し、自己管理が重要な時代に～

福岡 俊彦

2019 年末頃から起こった新型コロナウイルス感染症は世界中に広がり、変異株も出現しその感染力や病原性の高さのため、世界的に社会経済活動の制限が強いられました。一方、ワクチンの効果や感染の影響で免疫を獲得し、死亡率は大きく減少してきました。本原稿執筆時点(2023 年 1 月)では、感染症法における分類を 5 類に変更する検討が始まりました。人々の感染症に対する関心がこれまでになく高まってもおります。この 3 年間の大きな進歩・成果といえるでしょう。感染症について印象に残った点について述べたいと思います。

1. いち早くワクチンが実用化され、疾病対策に多大な貢献をした

新しいメカニズムの mRNA ワクチンがいち早く開発・導入され、副反応がそれほど小さくなくかつ多大な効果が、新型コロナウイルス感染症の疾病対策に大いに役立ったことは各種データからも示されています。例えば入院リスクについて検討されたデータを見ると、ワクチンの効果は明らかです¹。流行当初はウイルス性肺炎の治療に難渋し、死亡率も高かったのですが、今は低下してきております。ワクチンの開発が遅れたり、できなかつたりすると、抗ウイルス薬が開発されたとはいえ、今のような状態に到達するにはまだまだ時間がかかったと思われま

2. 新型コロナウイルス感染症を契機に様々な見解が出され議論された。これにより理解が深まり、一般の方々の感染症に対する関心が高まった。

新型コロナウイルスについては専門家に限らず様々な議論がなされてきました。

例えば無症状の方も含めて感染者を把握し感染対策を講じるために「無症状であってもスクリーニング的に大規模に PCR 検査を実施すべき」「少なくとも症状の有無にかかわらず希望者には全員実施すべき」「場合・状況によっては毎週定期的に検査すべき」という主張が様々な方から良く聞かれました。診断において一番信頼性があるのは PCR 検査なので、その意見は理解できます。しかし PCR 検査の感度は感染していても検査をするタイミングにも左右され、せいぜい高くても 70% 程度で偽陰性を常に考慮しなければならない検査であることや、PCR 検査の感度と特異度、陽性的中率、陰性的中率の関係を理解すると、何でもかんでも検査すればよいものではなく、事前確率の高い場合に検査するほうが精度は高く効率が良いことが示されるということを理解し議論されなければならないのですが、この点があまり注目されなかったのは残念です。

病原性については厚労省の「第 112 回新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリーボード (令和 4 年 12 月 28 日) 新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけに関してアドバイザリーボードにおいて出された意見²」には「今の検査体制では、コロナは軽症者や無症状者も検査に誘導しているため、分母にごく軽症者が乗っているという問題もある。インフルは発熱し、かつ医療機関

にアクセスしてきた患者数が分母となるため、無症状や軽症の人は受診せず、本来はコロナの分母とは乖離するはず。今回数字が寄ったのは偶然だろう。この数字を前提として話すこと自体が問題になるのではないか」という意見が掲載されていました。確かにインフルエンザではこれほどまでに大規模な検査を行っていませんので、なるほどと思います。これを読むとインフルエンザと同等かそれ以下、と考えるのはまだ早いように思います。

また「過去のインフルエンザシーズンで、これほど高齢者施設クラスターが出ていたわけではありません。ワンフロアで何人かインフルエンザにかかったということはよくありましたが、施設全体で壊滅的な状況に陥る高齢者施設を見るのは、それだけ感染性が高いからだと理解しています。」Care Net での近畿中央呼吸器センター呼吸器内科 倉原 優 先生のコメントがありました³。私もそう思います。さらにインフルエンザではほとんど見られない後遺症が、新型コロナウイルス感染症では認められる点も見逃せません。これらのことからやはり新型コロナウイルスが、病原性においてインフルエンザと同等かそれ以下、ととらえるのはよく検討すべきと思います。

以上のほかにも、新型コロナ感染症がきっかけとなって一般の方々も巻き込んで議論がなされ、一般の方々からも「PCR 検査」や「抗原検査」という言葉が出てくる時代となり、「感染対策」ということが常識になってきたことはコロナ前では考えられず大変な驚きです。新型コロナの効果といえるでしょう。

3. 今後は自己管理・自己対策が重要な時代に

新型コロナウイルス感染症の分類が変更されそうな状況となってきました。分類が変更されると、政府や自治体の強制力が弱まることが予想されます。今後ますます自己管理・自己対策が重要な時代となるでしょう。

このような時代では、一人一人が疾病について関心を持ち、疾病を理解し、①体調を整えバランスの良い食事を摂取し、適度な運動と休養をとること ②感染経路を理解したうえで対策を講じること。例えば新型コロナウイルス感染症は飛沫・エアロゾル感染と接触感染なので、その対策としてマスク着用や手洗いをし、3 密回避を行うこと ③ワクチンがある場合は、接種できない状態でなければ可能な限り受けること 等の感染対策の基本を忠実に実行していくことが重要と考えられます。そうしていきながら、①基礎疾患のある方は主治医の指示に従って療養する ②健診・検診受診を忘れずに受けて指摘があれば受診し指示を仰ぐ ③体調が良くないときは休んで受診を検討する、といった基本的なことを各自が実行していくことがさらに重要になってきたと考えます。

4. 結核の低蔓延国入り

大変喜ばしいことに、とうとう 2021 年の日本の結核罹患率が 9.2 と 10 を切り、念願の低蔓延国となりました⁴。2021 年の結核罹患率の減少については、新型コロナウイルス感染症の影響も考えられますが、日本の結核罹患率は、米国等他の先進国の水準に年々近づき、近隣アジア 諸国に比べても低い水準にあります。さらに低下していけばよいと思います。

一方、20~29 歳では外国生まれ新登録結核患者数はやや減少したものの、同年齢階級での新登録

結核患者における外国生まれの者の割合は 72.6%と前年から 1.3 ポイントの増加となっている点も見逃せません。外国人の結核が重要な問題となってきました。本学の留学生の 95%が結核蔓延国出身であることもあり、今後も関心を持っておく必要があります。「結核は過去の病気ではない」ことを肝に銘じて常に念頭に置いておく必要があると思います。

5. 梅毒が激増している

梅毒患者が激増しております⁵。2022 年第 42 週現在ですすでに 1 万人を超え、感染症法が施行された 1999 年以来初めて 1 万例を上回っている状況です。男女ともに異性間性的接触が原因となるものが多く、女性の増加が目立つ傾向です。性風俗やマッチングアプリによる不特定多数の人との性的接触が関係している模様です。不特定多数の人との性的接触が感染リスクを高めること、オーラルセックスやアナルセックスでも感染すること、コンドームを適切に使用することでリスクを下げられること、梅毒が疑われる症状、例えば性器の潰瘍が自然消退したとしても医療機関を受診する必要があること、梅毒が治癒しても新たな梅毒の罹患は予防できないことなどを啓発していくことが重要と考えられます。疾病を理解し、自己管理・自己対策するというのがこの疾病にも必要とされることとなります。

1. 忽那賢志 感染症専門医 オミクロン株対応ワクチンの接種開始から 4 ヶ月 明らかになってきた有効性と安全性 <https://news.yahoo.co.jp/byline/kutsunasatoshi/20230115-00332851> (2023 年 1 月 27 日アクセス)
2. 厚労省 第 112 回新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリーボード (令和 4 年 12 月 28 日) 新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけに関してアドバイザリーボードにおいて出された意見 <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001032304.pdf> (2023 年 1 月 27 日アクセス)
3. 倉原優 現場から木曜日 第 26 回 「5 類」にして本当に皆さん診ますか? <https://www.carenet.com/hihyothu2/026.html> (2023 年 1 月 27 日アクセス)
4. 公益財団法人結核予防会結核研究所疫学情報センター 年報 2021 <https://jata-ekigaku.jp/nenpou/> (2023 年 1 月 27 日アクセス)
5. 国立感染症研究所 IDWR 2022 年第 42 号<注目すべき感染症> 梅毒 <https://www.niid.go.jp/niid/ja/syphilis-m-3/syphilis-idwrc/11612-idwrc-2242.html> (2023 年 1 月 27 日アクセス)

コロナ禍と英会話

丸谷 俊之

1. 国際的な往来の停止

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 対策のため、航空便の大幅減便、停止、航空券の高騰、感染対策のための入国規制、ビザ発給停止による来日延期、母国の出国規制が発生した。そのため、予定された日本への留学が延期されたり、結局留学自体を中止したり、一旦母国に帰省していた学生が日本に再入国できなくなったりする事態が発生した。

2. 留学生の新規相談がなくなる

上記のような状態では、当然ながら、保健管理センターにおける留学生の新規相談はほとんどなくなってしまった。また、予定の診察に来室せず、それきりとなる場合や、しばらくしてやっと日本に戻ってこられた、と久しぶりに予約が入る場合もあった。中には、英語が母語ではないが流暢な学生が母国に戻れず、研究員採用となったケースもあった。学生ではなくなったため、保健管理センターにおける診療継続はできないので、英語対応可能な外部医療機関を紹介した。結果、筆者の英会話負荷が大分下がった。

新規の相談がなく、再来で英語が流暢である学生が何らかの理由で来所しなくなると、基本的な様態はわかっている学生で、お互いあまりうまくない英語で疎通を取り合う人だけが残ってくる。そうすると、一生懸命しゃべろうとしなくても、通じてしまうので、通じていけばよいレベルの英語に収束していく。

そのような中、止事無き理由で帰国の必要が生じ、帰国時の感染対策隔離対応への緩和措置要求のため、診断書を書いてほしい、という新規事例が発生した。機関銃のような英語は、訛りきった英会話筋肉に突如激しい筋トレ指令が下ったようなものである。何とか対応した。以前、ハラスメントを訴える留学生の機関銃のような英語による抗議を聞いたときは、耳鳴が発生して自分でもびっくりしたが、今回は耳鳴には見舞われずに済んだ。

それも、喉元すぎれば何とやら、である。そもそも、外国語をしゃべること自体が特段好きではない者としては、惰性の力は強力である。今後久しぶりに国際学会に行くともなれば、オンライン英会話で慣らさないとまずいだろう、と思う。また、『毎日ちょこっと日米口語』という LINE アカウントを友だち登録し、毎日送信される口語表現とその解説に目を通そうと思ったが、三日坊主に終わる。自分が現にやりとりをしている留学生に、米語の気の利いた表現を喋ってみたところで、おそらく通じない。結局、オーソドックスな表現に言い換えて終わることは目に見えているので、身が入らない。

この自分の墮落性は情けないものだが、その情けないという思いすら等閑視の対象となっていく。でも、この墮落性をそう嘆く必要もなさそうである。谷本真由美の『国連でも通じる世界の非ネイティブ英語術』(KADOKAWA, 東京, 2016)¹⁾を読むと、「特に相手が非ネイティブだと、お互い英語の文法や言い回しはあまり気にしないので、だんだんと、お互いだけの間で通じる『簡素化された英語』に変化していく場合があります」とある。まさにこれである。意図がお互いに通じる

のであれば、だんだん表現がミニマムになっていく。しかし、それで診療そのものがおかしくなることはない。意思疎通の目的は果たしている。

3. 必要性和動機づけ

先に引用した書籍によれば、要するに英語は道具だから通じればよいのであって、それ以上ではないと思っている人が多く、そのような人々と会話するのであれば、文法や表現が英語として正しいかどうかより、素早く意図が通じて仕事が進むかどうかの方が大事、ということになる。

我々でいえば、留学生と疎通がとれて、診療が進み、学生の状態が改善していればよい、ということである。したがって、留学生の新患がない状況では、英語の能力を高めようという動機づけが乏しく、どんどん必要最低限の簡素化された会話になる。

問題は、それに伴って、英語の論文を読む意欲もどんどん下がってしまい、読むのが苦痛で時間がかかるようになったことだ。科研費の研究課題が海外のフィールドでの調査のため、コロナ禍で進まず、さらに共同研究者である岐阜大学の西尾彰泰教授が大学を辞めて世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局へ行ってしまったため、英語に対する意欲低下に拍車がかかる。

ときに、学生が今までと違って深刻な顔つきで来所し、複雑な人間関係について語りだすことがある。その際は、急に対応のギアを上げなければならない。しかし、それも乗り切ってしまうと、学習意欲の向上には結びつかない。

つまるところ、人を突き動かすのは、必要かどうか、ということに尽きる、ということをコロナ禍で再認識させられた。筆者の英会話力がこのままダダ下がりするのかどうかは、今後の状況次第であろう。コロナ禍は永遠に続くわけではないので、いずれは英語の会話表現をもっと学んで覚えようとも思うであろうし、英語論文も楽しく渉猟する日が来るだろう。多分。

今回の経験を逆から見ると、必要がないことは、しなくても大して問題にならない、ということも言えそうだ。急に必要になるという事態はあり得るが、何か新たに必要な情報を短時間で仕入れて対応できるくらいのベースになる知識と経験のストックがあれば、なんとかなるだろう。自分の状況と相手・周囲の事情を勘案して、今それ必要？という基準で行動の取捨選択をすると良さそうである。この文章を書きながら、どこかしら自由な気分になってきた。

でも、現在の必要性より将来の不安に生きる強迫的な人々は、そう簡単に切り替えられないだろう、とも思う。コロナ禍で様々な曲面で意見の分断が起きるのは、結局、どれくらい今に生き、どれくらい将来に生きるか、という各人の塩梅の相違による軋轢と離合集散なのだろう。

註

1) この著者の一連の著作について、エッセイレベルのエビデンスについて、さも普遍的事実のように断定して書くところに批判はある。しかし、海外で生活して働く一日本人の経験事例として読めば、文化的差異について示唆的なところも多い。文体は面白いが、品がないとする向きもある。

ピアサポート活動における研修の実際と展開 —持続可能で効果的な活動のために—

高田 純¹、山田恵美子²、齋藤憲司¹

I. はじめに

大学におけるピアサポート（以下、PS）は「学生生活上で支援を必要としている学生に対し、仲間である学生同士で気軽に相談に応じ、手助けを行う制度」¹⁾と定義される。もともとはカナダや米国など海外より発祥したピアサポートであるが、わが国の高等教育機関における展開は、2000年に文部省（当時）より報告された「大学における学生生活の充実方策について」において、「正課外教育の積極的な捉え直し」や「学生中心の大学への視点の転換」といった提唱²⁾がなされたことが大きい。（独）日本学生支援機構³⁾の調査によれば、わが国の4年生大学全体のうち50.4%がPSを実施しているという。その内容も「授業外での学習サポート」、「修学相談」、「留学生支援」など、多岐にわたるサービスが提供されている。なお、実施していないと回答した大学においても、45.6%が「今後実施したい」と回答しているなど、ピアサポート活動（以下、PSA）はその幅を広げていくものと考えられる。

東京工業大学におけるPSAは、平成17年度よりその活動を始めている。現在では学生支援センター未来人材育成部門のもと、学生中心に意見交換しながら方針を定め、適宜教職員スタッフが助言しながら活動を行っている。主な活動として、相談活動は随時受け付けつつ、3-4月の「新入生相談対応」、8月の「オープンキャンパスでの受験生保護者対象の相談会」、9-10月の「秋の大学生活なんでも相談対応」、12-3月の学士1年生を対象とする専門選択の相談を受け付ける「系所属相談対応」といった時期に応じた相談活動がある。加えて、令和3年度より学生の課外活動と交流を目的として竣工されたHisako & Hisao Taki Plazaがピアサポーターの新たな活動の拠点となり、月例会や研修会の会場を設けることができた。匿名の投書箱を設置し、投函された投書に対して返事を作成し専用掲示板に掲示する「ピアちゃんのリプライ箱」活動などが行われている。新入生への相談対応から、文字による相談対応など幅広い活動を行っており、学内の学生相談・学生支援ネットワークの中で重要な一翼を担っている。

ところで、PSAを展開していくために重要なテーマの1つが、ピアサポーターに対する研修である。ピアサポートが仲間を支援する活動である以上、その支援が適切であるために一定の研修を受けることが求められる。研修は正課講義の一環として行う大学もあれば、2-3日の短期集中の研修で養成する大学もある。多くの大学では、「A.学生の諸問題の理解」「B.ピアサポートの目的の理解」「C.他の学内の相談窓口との連携の理解」「D.傾聴スキルと相談の実際に関する研修」「E.守秘義務と限界設定の重要性の理解」「F.サポーターのグループ作り」といったプログラムが含まれている³⁾。ピアサポーター養成研修については、自尊感情や自己効力感の向上、コミュニケーションスキルの向上、自己理解の深まり、他者に気を配り互いを思いやる

¹ 東京工業大学 保健管理センター

² 東京工業大学 学生支援センター

ことの重要性に気づくといった効果が期待されている⁴⁾。

本学の PS も採用時の養成研修に A～F を含んだ研修を行ってきた。加えて令和 3 年度は、活動内容に沿って、ピアサポーターの要望に応じる形で研修会を年に複数回行った（詳細は本年度紀要の「学生支援に係る研修の実施状況（令和 3 年度）」を参照されたい）。鈴木が「多様な展開を見せているピアサポートにおいては、求められる研修のスタイルや内容についても多様な形がありうるはずである」と指摘しているように⁵⁾、本年度実施した研修会に本学 PSA の独自性が存在するはずである。そこで本稿では、令和 3 年度に行った本学 PSA における研修会について振り返り、意義や独自性、課題について検討することを目的とした。

II. 方 法

令和 3 年度に実施した研修会について、概要と具体的な内容について報告する。実施した研修は、傾聴姿勢について学ぶ「相談対応スキルアップのための研修会」（7 月）、「ピアちゃんのリプライ箱」へのお返事作成のトレーニングである「相談対応スキルアップのための研修会—リプライ箱編—」（10 月）、自己開示やアサーティブな自己表現の方法について学ぶ「相談対応スキルアップのための研修会—伝える編—」（12 月）、ピアサポーター採用時に行う「相談業務の基本と留意点」（2 月）の計 4 回行われている。

なお、研修の順序が理解しやすいよう、採用時研修である「相談業務の基本と留意点」から順に報告する。また、本稿に記す研修内容の構成と当時の実施は高田が中心となってい、PSA 全体を支える日常的支援を山田が取り仕切り、PS 開設当初から関わっている齋藤は助言役とという役割分担がなされている。

III. 結 果

1) 相談業務の基本と留意点（2 月実施）

研修概要：本学ピアサポーターが採用時に受講を義務付けられている研修会であり、教職員スタッフや先輩ピアサポーター、同時期に採用されたサポーターが初めて顔を合わせる場となる。研修目的は、「大学の学生支援・学生相談体制や窓口に関する知識、心のケアに関する基礎知識、相談対応のための基本的な姿勢および倫理について学ぶこと」である。参加者は全員参集し、計 120 分の研修会を行った。「新入生相談対応」の実施時期が近いため、知的な内容だけでなく、可能な限り自身の経験を振り返ってもらったり、相互交流ができるような機会を設けるよう心がけている。

研修内容：先に紹介した研修内容の分類³⁾に沿って紹介する。なお、本研修はスタッフも含め合計 10 人程度と少人数で、アイスブレイクを実施するため、「E.サポーターのグループ作り」は既に行われているものとする。

①「A.学生の諸問題の理解」として、高校と大学の違いや青年期の課題について解説を行っている。大学進学は大きな環境の変化であり、入学期特有の課題があることを理解する。特に、近年は「ピアちゃんのリプライ箱」に大学院生（あるいは研究室所属学生）からのつぶやき（投書）が寄せられている。ピアサポーター応募者の多くは学士課程学生であるため、それらに対

応するための前知識として、大学院生も含めた学生生活サイクルについて説明するようにしている。

- ②「B.ピアサポートの目的の理解」として、新入生が「東工大生になる」ために、「既に東工大生である」という当事者の持ち味を活かして手伝ほしいという期待を伝える。その一方で、ピアサポーターが「新入生の解決をしてあげる」ではなく、「問題に直面している新入生が自分の力を発揮して取り組んでいけるよう『自助の支援（サポート）』を行う」ことを繰り返し伝えるようにしている。PSに応募するモチベーションのひとつは、自身の経験や知識を後輩のために活かしたいという動機がある。もちろん彼らの気持ちを尊重しながらも、（押しつけや上下関係に陥ることを防ぐため）相手の気持ちも尊重しながら、ということが大前提である。
- ③「C.他の学内の相談窓口との連携の理解」では、各相談窓口のホームページを一緒に確認したり、学生による調査である学勢調査の結果⁹⁾を紹介している。ピアサポーターが相談者からの全ての質問にその場で答える必要はなく、分からない場合はどこに相談すればよいか、あるいはインターネットでアクセスすればよいと理解していれば十分であろう。
- ④「D.傾聴スキルと相談の実際に関する研修」では、基本的な相談の受け方と、ソーシャルサポート（道具的サポートと情緒的サポート）について伝えて、新入生からの架空の相談事例について相互にロールプレイを行う。ロールプレイ終了後は必ず時間を設け、ピアサポーター同士で体験を共有したり、質問しあえるようにする。参加者の多くはロールプレイが初経験であるため、「落ち込む必要はなく、これからも皆で練習を重ねて上手くなっていこう」と励ますようにしている。
- ⑤「E.守秘義務と限界設定の重要性の理解」について、相談内容を外で話さないこと、大学で設定された枠の外で対応しないことを中心に伝えている。大学の公的活動としての枠から外れないよう、意識づけることが重要である。

2) 相談対応スキルアップのための研修会—傾聴姿勢編—（7月頃実施）

研修概要：「相談業務の基本と留意点」では扱いきれなかった傾聴姿勢に焦点を当てた研修である。「効果的な相談対応を行うため、その基礎態度である『聴く』について知的・体験的に理解する」ことを目的としている。対面の開催で、計90分で行った。可能であれば、「新入生相談対応」より前に行うことが望ましいが、学生と教職員の多忙により時期を遅らせての実施となった。その一方、遅らせたメリットもあり、多くの新人ピアサポーターが既に相談対応の経験を経ており、スキルアップのためのモチベーションの高い時期の実施であったともいえる。

研修内容：①援助的コミュニケーションについて概説する。コミュニケーションの定義を「相手の思考・感情を理解し、自分の思考・感情など意味あるメッセージを適切な形で伝えあうこと」とすることで、自分の考えを伝えることだけでなく、他者の意見をきくこと（理解すること/尊重すること）の重要性を理解する。②かかわり行動に焦点を当てたロールプレイを行う。その中で、良くない聞き方と、良い聞き方とを演じ分けてもらう仕込みを行う。「何を伝えるか」以前の態度の重要性を認識してもらうことが狙いである。

3) 相談対応スキルアップのための研修会—リプライ箱編— (10月実施)

研修概要: 現在ではピアサポート活動の柱の1つである「ピアちゃんのリプライ箱」の返事作成に特化した研修会である。研修目的は「リプライ箱活動の現状認識・共有、リプライ箱返信スキルの向上」とし、計90分のハイブリッド形式(対面・オンライン併用)で実施した。実施に至った背景として、①(コロナ禍による)出校制限の緩和によって学生の出校頻度が増えたことによって投書が急増(令和2年度は2件→令和3年度は計55件)したこと、②お返事は2~5名程度のピアサポーターが作成し、教職員スタッフによる確認を経たものを掲載しているが、習熟度の差や「正解の無さ」への不安、③自分たちが書いた返事が投書した人にどう受け取られているのかわからない(やりがいが感じられにくい)という特性があった。

研修内容: ①「ピアちゃんのリプライ箱」活動の面白いところと難しいと感じるところについて、意見交換をおこなった。返事作成は少人数での活動であるため、全体で問題を共有することが出発点であった。②「ピアちゃんのリプライ箱」活動の意義や、お返事作成のための基本的な考え方についての解説を行った。「相談対応スキルアップのための研修会—傾聴姿勢編—」で解説したように、「伝え合う」ことはできないが、一往復のコミュニケーションであることを確認した。③「リプライ箱大喜利」としてお返事作成のグループワークを行った。具体的には、教職員(匿名)に架空のつぶやきの作成を依頼し、グループに分かれて返事案を作成、シェアした。同じつぶやきであっても正解があるわけではなく、学生らしく多様な返事があってよいことを全体で共有することが重要であった。④後日架空のつぶやきの作者に各グループからの返事に対するコメント作成を依頼し、研修後に学生にフィードバックを行った。この作業まで行うことで、自分たちが書いた返事が投書した人にどう受け取られたのか、実感を得ることができると考えてのことである。

4) 相談対応スキルアップのための研修会—伝える編— (12月実施)

研修概要: 「相談対応スキルアップのための研修会—傾聴姿勢編—」では「聞く」ことを中心とした内容であったが、「伝える」があってこそそのコミュニケーションである。そこで、これまでの研修で不足していた「伝える」ことに焦点を当てた研修を行った。研修目的は「効果的な相談対応を行うため、『伝える』について知的・体験的に理解する」とした。研修は対面で行い、計90分で実施した。ピアサポーターのニーズは有効なアドバイス法であったかもしれないが、あくまでも自他尊重の中で円滑なコミュニケーションを行うためにという視点で研修を行った。

研修内容: ①「自己開示の返報性」について講義とロールプレイを行った。相談場面において、相談を受ける側が自身の体験を語ることもあるため、その一般法則を理解しておくことが狙いである。②自分のことをまず考えるが、他者をも配慮するやり方法である「アサーション」⁷⁾、意見の相違が起きた時に相手を尊重しつつ自分の考えや気持ちを率直に伝える方法である「アイ・メッセージ、ユー・メッセージ」⁷⁾について解説を行った。どちらも、対面での相談場面に限らず、「ピアちゃんのリプライ箱」お返事作成でも活用できるようことを意識した。

IV. 考察

本稿の目的は、令和3年度に行った本学PSAにおける研修について焦点を当て振り返り、意義や独自性、課題について検討することであった。

1) 活動に応じた研修を行う意義

検討の結果、本学PSAにおける採用時の養成研修が、各々の大学で展開されている研修と同様に「A.学生の諸問題の理解」「B.ピアサポートの目的の理解」「C.他の学内の相談窓口との連携の理解」「D.傾聴スキルと相談の実際に関する研修」「E.守秘義務と限界設定の重要性の理解」「F.サポーターのグループ作り」³⁾といった内容を基礎としていることが確認された。また、令和3年度の新しい試みとして、養成研修だけではなくスキルアップ研修会を複数回行っており、活動内容に応じた独自の研修を行っていることが示された。例えば、本学では「新入生相談対応」「オープンキャンパスでの受験生保護者対象の相談会」「秋の大学生活なんでも相談対応」「系所属相談対応」といった時期に応じた相談会を実施しているが、それに関連する形で「傾聴姿勢編」や「伝える編」といった援助的コミュニケーションに関する研修を行っている。また、「リプライ箱編」についても、本学の特色のある活動であり、学生のニーズや課題意識に応える形で研修内容を組み立てている。ところで、植田らは、大学生ピアサポーターの活動継続に影響を与える要因として、「ピアサポーターとしての成長の実感」と「他者を実際に支援する機会」があることを明らかにしている⁸⁾。藤原らも、「活動を通して人と出会い、学べることへの期待は参加当初も活動継続中も高い」ことを示唆している⁹⁾。これらの知見を踏まえると、実際に相談対応を行うこと、そして課題と感じている内容について研修の機会を設けることで、学びや成長の機会が得られることが、活動継続のモチベーションにもつながるものと考えられる。本学のPSAはこの循環が適切に進展しているものと言って良いだろう。

2) コロナ禍における研修の開催形態

さて、令和3年度はコロナ禍中であり、令和2年度と比べ学生の諸活動も再開されつつはあったものの、一定の制限があった。例えば、研修会で使用する会議室には利用人数に定員が設けられるなど、参加者の人数にも気を配らなければならなかった。コロナ禍以降、本学ピアサポートの月例会などはオンラインで行われていたため、対面での研修会は直接顔を合わせる貴重な機会になっていた。もちろん、感染症予防の観点からオンラインで可能なものはオンラインで対応すべき時期であったが、各時期の相談対応が対面実施で計画されている以上、相手の表情や声のトーンといった態度が重要となる研修は、可能な限り対面で行う必要があった。

「ピアちゃんのリプライ箱」は現在も対面とオンラインのハイブリッドで返事作成が行われており、その点では活動に沿ってハイブリッドでの研修も行いやすかった。今後、対人交流の制限が緩和され、オンラインでの活動のさらなる縮小が予想される中、どの程度オンラインで研修会を行うかについては検討の余地があるだろう。一方、知的な内容については、オンデマンドとして残していくこともひとつの選択肢である。オンデマンドで事前学習をして、演習を現地で体験するということが方法としては考えられる。いずれにしても、その場でのフィードバックや全体でシェア・質疑といった相互交流が必須とされる内容については、今後も対面で行

うことになるだろう。

3) 持続可能な研修のあり方について

次は、研修内容についての課題である。本学 PSA は正課教育と結びついているわけではなく、筆頭著者も PSA の専任ではないため、実施できる回数・内容は限られている。しかし、新人のピアサポーターが毎年採用されてくる以上、相談活動を行ううえで必須となる内容があり、毎回新しい研修内容を取り入れるわけにはいかない。先輩ピアサポーターとなった学生たちの目線でいえば、新しい知識や経験が得られそうであれば成長への期待は高まるが、同じ内容に対しては期待が低くなるのはやむをえないかもしれない。座学で援助スキルが身につくものではないので、繰り返し積み重ね経験し深化させていく必要があるのだが、内容自体が大きく変わるものではないので、モチベーションの維持のためには工夫が必要である。その例として、広島大学 PSA では先輩ピアサポーターが新人への研修を行っている。彼らは PSA の様々な活動の中でも「養成セミナー」を最も重視しており、運営や相談活動と比べて達成度が高いことを示している。その理由として、内野らは「新たにピアサポーターとなって活動をしてくれる学生を養成し、ピアサポートルームの組織と活動を継続するために重要であることや、現役ピアサポーターがトレーナーになって企画・実施したことが受講生およびピアサポーター双方にとって意義があった」と考察している¹⁰⁾。このように、「研修講師(教員)ー参加学生」という構図ではない在り方を模索することも、彼らが新たな視点・経験を得る貴重な機会となるだろう。また、他大学の研修内容を参考にしたり、学内外から講師を招聘することも、活動の良い刺激になるのではないだろうか。いずれにしても、沖が「訓練や研修がおもにピア・サポート・プログラムを提案した一部の教員のみ負担となっている」¹¹⁾と指摘しているように、様々な人を巻き込みながらの活動が、学生ー教職員双方にとって刺激があり持続しやすいのではないだろうか。そのためにも、大学からのバックアップは重要である。

4) 今後の課題

課題として、今回はあくまでも令和3年度に実施した研修内容を中心とした報告であり、効果測定を行ったわけではないことがあげられる。例えば、清水らは、ピアサポートの効果および影響について、①養成研修を通じた効果、②個別の支援活動を通じた効果、③活動全体を通しての効果といった視点から整理をしている⁴⁾。さらには、各研修の効果に限らず、本学 PSA がどのように大学キャンパスにおける支援活動に活かされているか、その波及効果も含め検討する必要がある。

文 献

- 1) (独) 日本学生支援機構 (2020). 大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (令和元年度 (2019 年度)) Retrieved from https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/2019.html (2023 年 1 月 30 日)
- 2) 文部省高等教育局 (2000). 大学における学生生活の充実方策について (報告) ——学生の

立場に立った大学づくりを目指して—— Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm (2023年1月30日)

- 3) 早坂 浩志 (2010). 学生に向けた活動 2——授業以外の取り組み—— 日本学生相談学会 (編) 学生相談ハンドブック (pp.185-201) 学苑社
- 4) 清水 馨・植田 峰悠・河合 輝久・細野 正人・大島 紀人・高野 明 (2017). 大学におけるピアサポート活動がピアサポーターに及ぼす効果 精神科, 31(6), 555-563.
- 5) 鈴木 英一郎 (2020). ピアサポート 日本学生相談学会 (編) 学生相談ハンドブック——新訂版—— (pp.172-176) 学苑社
- 6) 学生支援センター未来人材育成部門 (2021). 学勢調査 2020 提言書 Retrieved from http://www.siengp.titech.ac.jp/gakuseichousa/2020/2020_gakusei_teigensyo.pdf (2023年1月30日)
- 7) 平木 典子 (2007). 自分の気持ちをきちんと伝える技術 PHP 研究所
- 8) 植田 峰悠・清水 馨・河合 輝久・細野 正人・大島 紀人・高野 明 (2018). 大学生ピアサポーターの活動継続促進要因に関する探索的検討 学生相談研究, 39 (2), 130-142.
- 9) 藤原 美聡・石田 弓・兒玉 憲一 (2013). 大学生のピア・サポーターにおける活動動機に関する調査研究 総合保健科学, 29, 25-35.
- 10) 内野 悌司・石田 貴洋・三浦 寿秀・栗田 智未・兒玉 憲一 (2013). 広島大学ピア・サポート・ルームの活動評価についての考察——2011年度活動の Empowerment Evaluation を通して—— 総合保健科学, 29, 13-23.
- 11) 沖 裕貴 (2015). 「学生スタッフ」の育成の課題——新たな学生参画のカテゴリーを目指して—— 名古屋高等教育研究, 15, 5-22.

学生の支援における SNS 相談の可能性

桶谷 雅人

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症が 2019 年の冬から流行し、今なお社会生活や学生生活へ影響を及ぼしている。流行初期の 2020 年度には、多くの大学でロックダウンや対面授業の禁止を余儀なくされ、相談体制も従来の対面相談中心から、電話相談やメール相談、さらには Web ビデオ会議システムを活用した遠隔相談への移行が迫られた。筆者が学生相談の現場で働き始めたのは 2020 年 9 月であり、コロナ禍での学生相談キャリアのスタートとなった。そのため、学生相談はおろか対面相談もわからないまま、Web ビデオ会議システムによる遠隔相談を行い始めた。その同時期に、自治体から委託を受けた企業の相談員として、SNS 相談にも携わっていた。主に虐待防止のための相談と DV 相談を約 2 年間担当し、そこでは LINE のチャットツールを用いた相談対応をしていた。この SNS 相談は、対面相談や Web ビデオ会議システムによる遠隔相談とも様々な点で異なっており、相談のあり方を考える上で貴重な経験であった。このような筆者の相談経験も踏まえ、本稿では「学生」と「SNS 相談」をキーワードに、両者の関連を整理していく。また、学生の支援における SNS 相談の可能性について、筆者なりに検討を試みたい。

II. 学生はどのくらい SNS を利用しているのか

まず始めに、学生や若年層にとって SNS はどのようなツールとして利用されているのだろうか。SNS は Social Networking Service の略称で利用者同士が交流できるツールであり、具体的には LINE, Twitter, Instagram などが挙げられる。総務省が毎年、情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査を実施している。2021 年度における平日の「コミュニケーション系メディアの平均利用時間」について、10 代はソーシャルメディア利用が 64.4 分、メール利用が 19.6 分、ネット通話が 5.3 分、携帯通話が 8.4 分、固定通話が 0 分であり、20 代はソーシャルメディア利用が 84.1 分、メール利用が 20.1 分、ネット通話が 14.0 分、携帯通話が 6.0 分、固定通話が 1.7 分となっている（総務省、2022）。他のツールと比較し、LINE などを含むソーシャルメディアの利用時間は約 3 倍以上であり、学生も含む 10～20 代における主要なコミュニケーションツールであることがわかる。

また、学生を対象とした調査については、東京工科大学が 2014 年から毎年、新入生に対する「コミュニケーションツール」の利用実態調査を実施している。2022 年度の新入生 1,358 名を対象に行われた調査では、「現在利用している SNS」は LINE が 99.5%、Twitter が 84.5%、Instagram が 75.3% であり、「普段、家族や友人との連絡に使っているもの」は LINE メッセージが 99.2%、Instagram のダイレクトメッセージが 46.0% であり、「普段、家族や友人との通話で利用しているもの」は LINE 通話が 94.2%、キャリアの通話機能が 30.9% と報告されている（東京工科大学、2022）。SNS の中でも、圧倒的に LINE の利用率が高く、学生の多く

は SNS のメッセージやダイレクトメッセージ機能を用いて日常的なコミュニケーションを行っていると考えられる。

Ⅲ. 若年層への SNS 相談の広がり

次に、学生を含む 10～20 代などの若年層に注目し、SNS 相談の広がりを述べていく。この項の内容は、杉原・宮田 (2019) の「SNS カウンセリング・ハンドブック」をもとにまとめた。なお、以降の文章では SNS 相談と SNS カウンセリングを同義の言葉として扱っている。

SNS カウンセリングとは、一定の訓練を受けた専門家、ないし準専門家による SNS を用いたカウンセリングであり、これまで対面や電話で行われてきたカウンセリングを、SNS を用いて、できる限り効果的に行おうとするもの、とされる。また、オンライン・カウンセリングや遠隔心理支援の一つである。従来の対面相談や電話相談などをベースにしながらも、それらの相談の枠組みに収まらない、新しい支援の形と言える。

そもそも、どのような経緯で SNS 相談が必要とされ、広がってきたのだろうか。前述のように、10～20 代の SNS 利用率は高く、電話よりも数倍利用時間が長い。若年層においては、非対面のコミュニケーションツールは電話から SNS へシフトしている。そのことも反映して、若年層における電話相談は減少している。例えば、日本いのちの電話の年代別統計を見ると、2004 年には小学生から 20 代までの相談者からの相談件数は全体の 22%であったが、2019 年には 10%に減少している（一般社団法人日本いのちの電話連盟，2005；一般社団法人日本いのちの電話連盟，2020）。

このような現状があるにも関わらず、若年層を含む悩みの相談窓口は対面相談と電話相談である状況が続いていた。しかし、2017 年 9 月の長野県における中高生対象の LINE 相談「ひとりで悩まないで@長野」の試験的な実施、同年 10 月の座間市における SNS を利用した 9 人の殺害事件、などを契機に SNS 相談の必要性が強く認識されるようになった。特に、「死にたい」といった深刻な苦悩を若者が表現する場が SNS であり、若年層を中心に SNS 相談を多くの人が求めていることが、社会問題として認識されるように変化してきた。

このような契機も踏まえ、文部科学省は 2017 年に「SNS 等を活用した相談体制の構築が喫緊の課題」として SNS 相談を整備する経費を予算措置し、2018 年には厚生労働省が自殺予防月間に民間団体への委託の形で SNS 相談を実施した。厚生労働省の委託による SNS 相談の目的は自殺予防対策が中心であり、今年度も事業は継続して実施されている。2019 年度から毎年報告されている実施結果では、相談延べ件数は 2019 年度が 45,106 件、2020 年度が 63,028 件、2021 年度が 259,814 件と年々増加している。また、2019～2021 年度の 3 年間における相談利用者の年齢層は、19 歳以下及び 20 歳代を合わせると全体の 7～8 割を占めている（厚生労働省，2020；厚生労働省，2021；厚生労働省，2022）。2021 年度の相談件数の急増は、コロナ禍による相談機会の減少の反動も考えられるが、大学在学中の学生が理事長を務めている「特定非営利活動法人あなたのいばしょ」が委託事業に加わった影響や社会的インパクトも大きいだろう。

これらをまとめると、SNS 相談は新しい支援の形ではあるが、SNS を日常的に利用する 10

～20代の若年層にとっては、自分の使い慣れたツールで相談可能という利点が大きいと考えられる。また、社会的にも SNS 相談の重要性の認知や実践の広がりを見せており、「死にたい」といった深刻な悩みを抱える人たちへのアプローチとなりうることを示されている。

IV. 学生の支援における SNS 相談の可能性

これまで SNS 相談と学生を含む若年層の関連を見てきたが、ここからは学生の支援における SNS 相談の可能性について検討していきたい。

山口・岸（2022）は大学生の悩みを抱えた際の SNS 相談の利用可能性について、大学生を対象とした質問紙とインタビュー調査に加え、SNS 相談員へのインタビュー調査を実施して検討している。考察では、普段から援助を求めない大学生の存在や SNS 相談の認知度の低さといった課題点が挙げられている。その一方で、SNS 相談が居場所機能を果たすことや、次の相談のきっかけになる可能性があることが報告されている。また、小岩他（2018）はカウンセラーなどの支援者 2 名へのインタビュー調査と 72 名の大学生へのアンケート調査を通じ、SNS を用いた学生相談の可能性を検討している。その結果、アンケート回答学生の半数が『これまでの学生生活において相談したいことが「ある」』と答えている。また、選びたい相談手段では「対面で話す」の 45.1%について、「LINE などのチャットアプリ」が 30.5%と明らかにされている。そして、現状では LINE などによる相談の実施は難しいが、相談窓口へ行きづらい学生をつなぐ手段にもなりうる、と考察はまとめられている。これらの調査研究からは、学生が抱えている SNS 相談への潜在的なニーズの高さが感じられることに加え、相談窓口へつながりづらい学生へのアプローチとなる可能性が示唆されている。

京都大学では外部事業所への委託事業によって、オンラインカウンセリングが本格的に導入されており、中川・杉原（2019）がその成果を報告している。このオンラインカウンセリングは、対面相談の補助という位置づけではなく、オンラインで完結しうるサービスとして導入されている点が特徴である。「ビデオ通話」、「音声通話」、「テキストのやり取り」の 3 つのモードがあり、「テキストでのやり取り」は杉原・宮田（2019）の言う同時双方向的な SNS 相談ではなく、メールに近い形を取っているが、多くの利用者は「テキストによるやり取り」を選んでいる。また、オンラインカウンセリング選択の理由として、「学内の相談機関の開室時間が合わないから」と「人と直接対面して話すのは苦手だから」が上位に挙げられている。加えて、オンラインカウンセリング登録申込者の約半分はカウンセリングルームを利用していない、という結果が報告されており、対面相談には来談しない学生層に利用されている、と考察がまとめられている。

対面相談には来談しない学生層の存在は、メールでの相談サービスの実践報告からも指摘されている。伊東（2022）による立教大学でのメールアドバイスサービスの報告では、18～23 時の夜間帯にも多く利用されていた、学生相談所への来談歴がない学生の利用が 71.7%を占めていた、メールアドバイスサービスのみを利用する学生も多くいたことなどが示されている。

これらのことから、SNS 相談には対面相談を利用しない、あるいは利用できない学生に対して、相談サービスを届けられる可能性があると考えられる。学生の中には、対面相談など相談

利用が可能な人もいれば、相談利用の必要性を感じながらもできない人も一定数いるであろう。もちろん、相談利用は不要な学生もいる。これらの3層に学生を分けると、SNS相談の利用対象者は、相談利用の必要性を感じながらもできない人と相談利用が可能な人の間と考えられる（Figure 1）。山口・岸（2022）や小岩他（2018）、中川・杉原（2019）の考察も踏まえると、SNS相談は学生に「一歩踏み出す勇気を持ってもらうための相談」と呼べるのではないだろうか。

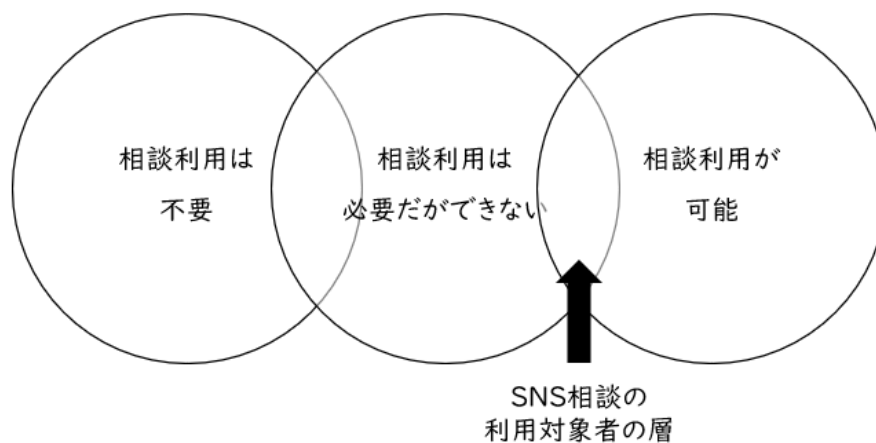


Figure 1. SNS 相談の利用対象者の層
（桶谷，2021 をもとに加筆修正）

V. おわりに

コロナ禍を機に、多様なシステムを活用した遠隔相談が各大学で導入されるようになり、「遠隔相談に関するガイドライン」（日本学生相談学会，2020）などその整備も進んできている。その一方で、遠隔相談では安全性やリスクの問題が常に指摘される。確かに、相談上の通信技術にまつわるリスク懸念は、対面相談以外では大なり小なり生じるため避けられない。しかし、リスクがあるからといって、SNS相談などのオンラインツールでしか相談できない学生の存在を見逃してしまってよいのだろうか。学生にとっては SNS が中心的なコミュニケーションツールとなっており、SNS 相談へのニーズもある。また、支援者には見えていないだけで、深刻な悩みや希死念慮などを SNS 上へ投稿している学生も少なからずいるであろう。

本稿では「学生」と「SNS 相談」をキーワードとし、両者の関連の整理や検討を筆者なりに試みてきた。大学の支援において SNS 相談を導入することは様々な面から困難さが伴うが、SNS というツールを通して見える学生に目を向けることは重要である。また、本稿をまとめる中で、改めて、従来の個別相談や対面相談の土俵に乗ることが困難な学生の存在に気づかされた。そのような学生に向けても、大学は多様な支援を模索し続けていく必要があるのではないかと。そして、その支援の一つとしての可能性が SNS 相談にはあると考えている。

文献

- 一般社団法人日本いのちの電話連盟（2005）. 2004 全国いのちの電話受信状況.
<https://www.inochinodenwa.org/data/2004all.pdf>（2023年1月29日）
- 一般社団法人日本いのちの電話連盟（2020）. いのちの電話統計情報——2019 年代別・内容別
受信状況. https://www.inochinodenwa.org/data/2019_2.pdf（2023年1月29日）
- 伊東沙也加（2022）. メールアドバイスサービスの実施について. 学生相談所報告書（立教大
学学生相談所）, 41, 42-50.
- 小岩文香・菅坂智仁・中嶋茜・野口遙斗・折田明子（2018）. 大学における SNS を用いた学生
相談の可能性. 経営情報学会全国研究発表大会要旨集, 257-260.
- 厚生労働省（2020）. 平成 31 年 4 月～令和 2 年 3 月分 SNS 相談事業の実施結果.
<https://www.mhlw.go.jp/content/000655606.pdf>（2023年1月27日）
- 厚生労働省（2021）. 令和 2 年 4 月～令和 3 年 3 月分 SNS 相談事業の実施結果.
<https://www.mhlw.go.jp/content/000818431.pdf>（2023年1月27日）
- 厚生労働省（2022）. 令和 3 年 4 月～令和 4 年 3 月分 SNS 相談事業の実施結果.
<https://www.mhlw.go.jp/content/000987379.pdf>（2023年1月27日）
- 中川純子・杉原保史（2019）. 学生相談におけるオンラインカウンセリングの可能性——ビデ
オ通話・音声通話・テキストによる心理相談の試験的導入. 京都大学学生総合支援センター
紀要, 48, 19-32.
- 日本学生相談学会（2020）. 遠隔相談に関するガイドライン ver.01 .
https://www.gakuseisodan.com/wp-content/uploads/2020/10/enkaku_soudan_guideline_ver01.pdf
（2023年1月27日）
- 桶谷雅人（2021）. SNS 相談の世界——LINE 相談の実践から. 筑波大学令和 3 年度第 1 回学生
相談室全体ミーティングミニ講演資料.
- 総務省（2022）令和 3 年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書〈概要
〉. https://www.soumu.go.jp/main_content/000831289.pdf（2023年1月27日）
- 杉原保史・宮田智基（2019）. SNS カウンセリング・ハンドブック. 誠信書房.
- 東京工科大学（2022）. 新入生の「コミュニケーションツール」利用実態調査.
<https://www.teu.ac.jp/press/2022.html?id=105>（2023年1月29日）
- 山口綾音・岸竜馬（2022）. 大学生の悩みにおける SNS 相談の利用可能性についての調査研究.
福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要, 6, 33-40.

III. 業績

齋藤憲司 教授（カウンセラー）（2021年1月～12月）業績一覧

<著書・研究論文等>

1. 齋藤憲司：学生相談・学生支援の20年―実戦と組織化を支える理念―. 大学教育学会誌. (ア) 43(1), 2-5.(2021)
2. 齋藤憲司・高田純・道又紀子・片岡彩・宣聖美・岡安朋子・河西正枝：コロナ禍初期における機関内連働と相談体制整備―ワークシートを媒介としたカウンセラーの相互研鑽. 東京工業大学保健管理センター紀要, 8 ; 16-30, (2021)
3. 齋藤憲司・安宅勝弘・三平満司・福岡俊彦・丸谷俊之・道又紀子・高田純：学生支援・保健管理活動の再整理と評価軸の概念化―学内サイクルと学外サイクルの連働―. CAMPUS HEALTH, 58(1), 215-217. (2021)
4. 高田純・齋藤憲司・安宅勝弘・丸谷俊之・道又紀子：コロナ禍における学生相談・メンタルヘルス相談, CAMPUS HEALTH, 58(1), 15-19. (2021)
5. 丸谷俊之・安宅勝弘・高山潤也・齋藤憲司・佐藤武：大学院における休学・退学・留年学生に関する調査―第17報（平成30年度集計結果）―. Campus Health, 58(1): 152-154, (2021).
6. 丸谷俊之・安宅勝弘・高山潤也・齋藤憲司・佐藤武：大学院における休学・退学・留年学生に関する調査―平成29年度調査結果を中心に―. 大学のメンタルヘルス, 4, 66-70. (2021)

<学会発表等>

1. 齋藤憲司：「個」と「組織」が連働する学生相談のシステムとスタイル―「自由」と「規律」の調和を求めて. (招待講演). 日本学生相談学会第39回大会発表論文集, 16. (2021)
2. 齋藤憲司・高田純・道又紀子：コロナ禍における授業実践・各種発信と学生相談活動(1)―同一大学におけるコミュニティ連働―. 日本学生相談学会第39回大会発表論文集, 77. (2021)
3. 高田純・齋藤憲司・高橋国法・土屋明子：コロナ禍における授業実践・各種発信と学生相談活動(2)―オンラインで結ぶ大学間連働―. 日本学生相談学会第39回大会発表論文集, 78. (2021)
4. 齋藤憲司・杉江征・高石恭子・織田万美子・田村友一：学生相談の魅力・学生相談と心理臨床の弁証法的展開（構造化ディスカッショングループ）. 日本心理臨床学会第40回大会発表論文集, (2021)
5. 齋藤憲司・安宅勝弘・道又紀子・丸谷俊之・高田純・福岡俊彦・三平満司：非常時/新たな日常における教職員研修と学生支援をめぐるコミュニティ連働：第59回全国大学保健管理研究集会抄録集, 64. (2021)
6. 齋藤憲司：相談対応の際の話し方・聴き方の基本：全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会研究集会抄録集. (2021)
7. 齋藤憲司・安宅勝弘・高田純・丸谷俊之・片岡彩・宣聖美・岡安朋子・河西正枝・桶谷雅人：学生・教職員を結び付けるキャンパス連働―コロナ禍の相談活動―. 第43回全国大学メンタルヘルス学会抄録集, 33. (2021)
8. 丸谷俊之・安宅勝弘・齋藤憲司・高山潤也・佐藤武. 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査第18報（2019年度集計結果）. 第59回全国大学保健管理研究集会抄録集, 71. (2021)

9. 丸谷俊之・安宅勝弘・齋藤憲司・高山潤也・佐藤武. 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査第 18 報—2019 年度の調査結果より—. 第 43 回全国大学メンタルヘルス学会プログラム・抄録集, 33. (2021)

10. Toshiyuki Marutani, Katsuhiro Yasumi, Kenji Saito, Jun-ya Takayama, Takeshi Sato : Survey on Suicide Among Graduate Students in Japan over 16 Years. 20th WPA(World Psychiatric Association) World Congress of Psychiatry (2021)

<社会貢献等>

1. 齋藤憲司・小林弥生：学生相談における連携・協働—より良い学生支援のために—. 第 59 回全国学生相談研修会プログラム, 12. (2021)
 2. 齋藤憲司：学生とともにつくる“新しい日常”—学生相談・学生支援のこれから—（講演報告）. 名古屋大学高等教育研究センター公式 Web（第 197 回招聘セミナー・学生支援担当者セミナー）. (2021)
 3. 齋藤憲司・杉原保史・高石恭子・内田真紀子（座談会）：コロナ禍の「学生相談」の現場から～オンラインとリアルのはざままで～. CAMPUS Life. 64,10-11. (2021)
 4. 齋藤憲司：こころの持ち方のアドバイス（全国大学生サミット開催報告）. 全国大学生生活協同組合連合会 新型コロナウイルス対策特設サイト.(2021)
 5. 齋藤憲司：あなたと一緒にあなたを探す～心理カウンセラーと話してみよう～（パネリストボイス）. CAMPUS Life. 68, 4. (2021)
 6. 元田謙太郎・増谷文生・齋藤憲司・松井貴哉・白井花音・大前真悠・原いこい・安井大幸・角田咲桜（座談会）：全国大学生サミットを振り返って～コロナ禍の向こうに見えてきた新たな希望～. CAMPUS Life. 68, 5-6. (2021)
 7. 齋藤憲司（研修報告）：キャンパスライフ入門—東工大生になるために—. 2021 年度新入生総合オリエンテーションについて. 東京工業大学公式 web.(2021)
 8. 齋藤憲司（講演報告）：研究室内教育と適応・成長支援. 教育の質向上を目指して「全学 F D 2021」を実施, 東京工業大学教育革新センター公式 web. (2021)
 9. 齋藤憲司（インタビュー）：より良いキャンパスライフを送るために—カウンセラーの紹介—. LANDFALL 編集委員会（編） TOKO WALKER 2021. 36. (2021)
- ～そのほか、学内外の各種研修で講師を務めるとともに、学生相談・学生支援に係る種々の委員に任命されて責務を果たしている。（抄録・報告書等が発刊されているものは上記に記述。）～

安宅勝弘 教授（学医・産業医）（2021 年 1 月～12 月）業績一覧

<論文（査読あり）>

1. Marutani, T., Fuse-Nagase, Y., Tachikawa, H., Iwami, T., Yamamoto, Y., Moriyama, T. & Yasumi, K.: Has COVID-19 affected suicides among graduate students in Japan? Asian Journal of Psychiatry 65: 102803, 2021.

2. Fuse-Nagase, Y., Marutani, T., Tachikawa, H., Iwami, T., Yamamoto, Y., Moriyama, T. & Yasumi, K.: Increase in suicide rates among undergraduate students in Japanese national universities during the COVID-19 pandemic. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 75(11): 351-352, 2021.
3. 野藤夏美, 丸田伯子, 関百合, 安宅勝弘, 相澤直子, 太田晴久: 発達障害を有する大学生へのショートケアプログラムの実施について—大学保健センターでの取り組み事例の臨床的検討—. *大学のメンタルヘルス*, 4; 155-162 (2021)

<論文 (招待あり) >

1. 太刀川弘和, 高橋あすみ, 安宅勝弘, 三井信幸, 布施泰子, 白鳥裕貴, 石井映美, 渡辺慶一郎, 丸谷俊之, 堀正士, 川島義高, 小田原俊成, 岡本百合, 松原敏郎, 梶谷康介: 「大学生の自殺予防プログラム全国開発研究」全国調査の経過報告. *大学のメンタルヘルス* 4: 71-78, 2021.
2. 高田純, 齋藤憲司, 安宅勝弘, 丸谷俊之, 道又紀子: コロナ禍における学生相談・メンタルヘルス相談. *CAMPUS HEALTH*, 58 (2) ; 15-19 (2021)
3. 相澤直子, 安宅勝弘: 大学生の発達障害・ひきこもり—大学における支援—. *Biophilia*, 9 (3) ; 13-19 (2021)

<著書 (分担執筆) >

1. 相澤直子, 安宅勝弘: 大学生の発達障害・ひきこもり—大学における支援—. *発達障害の患者学*; 75-84, アドスリー (2021) (*Biophilia*, 9.の掲載内容に同じ)

<報告 (査読なし) >

1. 国立大学保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会大学院休退学調査研究班 (丸谷俊之, 安宅勝弘 (班長), 高山潤也, 齋藤憲司, 佐藤武, 杉田義郎): 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査—第 18 報 (令和元(2019)年度集計結果)—, 2021.
2. 丸谷俊之, 安宅勝弘, 高山潤也, 齋藤憲司, 佐藤武: 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査—第 17 報 (平成 30 年度集計結果)—. *Campus Health*, 58(1): 152-154, 2021.
3. 丸谷俊之, 安宅勝弘, 高山潤也, 齋藤憲司, 佐藤武, 杉田義郎: 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査—平成 29 年度調査結果を中心に—. *大学のメンタルヘルス* 4: 60-70, 2021 (報告書の再掲) .

<紀要論文・報告書、その他>

1. 安宅勝弘, 丸谷俊之: 本学大学院における休学, 退学および留年の状況について (第 17 報) —「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査 (平成 30 年度)」との比較より—. *東京工業大学保健管理センター紀要*, 7: 31-40, 2021.
2. 安宅勝弘, 丸谷俊之: 本学大学院における休学, 退学および留年の状況について (第 18 報) —「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査 (令和元年度)」との比較より—. *東京工業大学保健管理センター紀要*, 8: 31-40, 2021.

<学会発表・講演・研修会講師・他機関講義など>

1. 安宅勝弘: キャンパス・メンタルヘルスの今日的課題. 群馬県内大学等メンタルヘルス研究会 (群馬大学・オンライン) , 2021.1 月.

2. 安宅勝弘: 音大生のウェルビーイングを考える. 桐朋大学院大学特別企画講座 (桐朋大学院大学・オンライン), 2021.1 月.
3. Marutani, T., Yasumi, K., Saito, K., Takayama J., & Sato: T. Survey on suicide among graduate students in Japan over 16 years. 20th WPA (World Psychiatric Association) World Congress of Psychiatry (Bangkok, Virtual), 2021 年 3 月.
4. 安宅勝弘: 後期の授業に備えメンタル整えよう. 日本経済新聞 2021 年 8 月 18 日朝刊 27 ページ (インタビュー記事)
5. 安宅勝弘: ストレスとの付き合い方〜ストレス・コーピング〜. タイ国日本人協会在タイ邦人向け講演会 (バンコク・オンライン), 2021.8 月.
6. 柳元伸太郎, 安宅勝弘 (シンポジウム座長): COVID-19 が大学にもたらした変化. 第 59 回全国大学保健管理研究集会 (広島大学・オンライン), 2021.10 月.
7. 丸谷俊之, 安宅勝弘, 齋藤憲司, 高山潤也, 佐藤武: 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査第 18 報 (2019 年度集計結果). 第 59 回全国大学保健管理研究集会 (広島大学・オンライン), 2021 年 10 月.
8. 布施泰子, 丸谷俊之, 太刀川弘和, 高橋あすみ, 石見拓, 山本祐二, 守山敏樹, 安宅勝弘: 令和 2 年度 (2020 年度) 国立大学死亡学生実態調査・自殺予防対策実施状況調査報告 (速報版). 第 59 回全国大学保健管理研究集会 (広島大学・オンライン), 2021 年 10 月.
9. 齋藤憲司, 安宅勝弘, 道又紀子, 丸谷俊之, 高田純, 福岡俊彦, 三平満司: 非常時/新たな日常における教職員研修と学生支援をめぐるコミュニティ連働. 第 59 回全国大学保健管理研究集会 (広島大学・オンライン), 2021 年 10 月.
10. 安宅勝弘: メンタルヘルスの基礎知識 (精神疾患と発達障害). 日本学生支援機構令和 3 年度心の問題と成長支援ワークショップ (東京・オンライン), 2021.11 月.
11. 安宅勝弘: 学生相談と精神医学. 第 59 回全国学生相談研修会・小講義 (東京・オンライン), 2021.11 月.
12. 安宅勝弘, 太刀川弘和, 藤本昌: 学生の“心の病”ゼロへ. Campus Life. vol.67, p.10-11 (座談会記事), 2012.12 月.
13. 安宅勝弘: 大学における障害学生支援についてー精神障害、発達障害を中心にー. 秋田公立美術大学ダイバーシティ推進研修会 (秋田公立美術大学・オンライン), 2021.12 月.
14. 安宅勝弘: コロナ禍における学生メンタルヘルス. 日本学生支援機構令和 3 年度学生生活にかかる喫緊の課題に関するセミナー基調講演 (東京・オンライン), 2021.12 月.
15. 丸谷俊之, 安宅勝弘, 齋藤憲司, 高山潤也, 佐藤武: 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査第 18 報ー令和元 (2019) 年度の調査結果よりー. 第 43 回全国大学メンタルヘルス学会 (東京医科歯科大学・オンライン), 2021 年 12 月.
16. 太刀川弘和, 高橋あすみ, 布施康子, 石井映美, 松原敏郎, 丸谷俊之, 小田原俊成, 河西千秋, 三井信幸, 岡本百合, 渡辺慶一郎, 川島義高, 白鳥裕貴, 菅原大地, 梶谷康介, 太田深秀, 安宅勝弘: 「大学生の自殺予防プログラム全国開発研究」活動報告. 第 43 回全国大学メンタルヘルス学会 (東京医科歯科大学・オンライン), 2021 年 12 月.

17. 齋藤憲司, 安宅勝弘, 高田純, 丸谷俊之, 片岡彩, 宣聖美, 岡安朋子, 河西正枝, 桶谷雅人: 学生・教職員を結び付けるキャンパス連働ーコロナ禍の相談活動ー. 第43回全国大学メンタルヘルス学会(東京医科歯科大学・オンライン), 2021年12月.
18. 安宅勝弘(特別講演座長), 高橋英彦: 行動科学とポジティブサイコロジーの脳科学. 第43回全国大学メンタルヘルス学会(東京医科歯科大学・オンライン), 2021.12月.

<学内研修講師>

1. 安宅勝弘: メンタルヘルスー東工大の教員になるということー. 新採用教員セミナー, 2021.4月.
2. 安宅勝弘: メンタルヘルスー東工大の教員になるということー. 新採用教員セミナー, 2021.10月.

福岡俊彦 教授 (学医・産業医) (2021年1月～12月) 業績一覧

<論文(査読あり)>

1. 齋藤憲司, 安宅勝弘, 三平満司, 福岡俊彦, 丸谷俊之, 道又紀子, 高田純: 学生支援・保健管理活動の再整理と評価軸の概念化ー学内サイクルと学外サイクルの連働ー, CAMPUS HEALTH, 58(1): 215-217, 2021

<紀要>

1. 福岡俊彦: 新型コロナウイルス感染症の影で. 東京工業大学保健管理センター紀要, 8: 41-43, 2021.

<学内研修講師>

1. 福岡俊彦: 本学における健康管理. 令和3年度環境安全衛生講習会(オンライン), 2021年6月～8月.
2. 福岡俊彦: 特殊健康診断 特に電離放射線作業従事者健康診断について. 2021年度放射線業務従事者(継続者)教育訓練講義(オンライン), 2021年7月～9月.

<学生講義>

1. 福岡俊彦: 新型コロナウイルス感染症について 2021年度 学士課程教養特論 身体教養科学講義(分担計1回, オンライン) 2021年6月
2. 福岡俊彦: 新型コロナウイルス感染症について 2021年度 学士課程健康科学概論講義(分担計2回, オンライン) 2021年6月

丸谷俊之 准教授 (学医・産業医) (2021年1月～12月) 業績一覧

<論文(査読あり)>

1. Marutani, T., Fuse-Nagase, Y., Tachikawa, H., Iwami, T., Yamamoto, Y., Moriyama, T., & Yasumi, K. Has COVID-19 affected suicides among graduate students in Japan? Asian Journal of Psychiatry 65: 102803, 2021.

2. Fuse-Nagase, Y., Marutani, T., Tachikawa, H., Iwami, T., Yamamoto, Y., Moriyama, T., & Yasumi, K. Increase in suicide rates among undergraduate students in Japanese national universities during the COVID-19 pandemic. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 75(11): 351-352, 2021.
3. 丸谷俊之. ジャック・ダニエルとともにージャン・ユスターシュの人生と映画ー. *日本病跡学雑誌* 101: 27-37, 2021.
4. 高田 純, 齋藤 憲司, 安宅 勝弘, 丸谷 俊之, 道又 紀子. コロナ禍における学生相談・メンタルヘルス相談. *CAMPUS HEALTH*, 58(2): 15-19, 2021.

<論文（招待あり）>

1. 太刀川 弘和, 高橋 あすみ, 安宅 勝弘, 三井 信幸, 布施 泰子, 白鳥 裕貴, 石井 映美, 渡辺 慶一郎, 丸谷 俊之, 堀 正士, 川島 義高, 小田原 俊成, 岡本 百合, 松原 敏郎, 梶谷 康介. 「大学生の自殺予防プログラム全国開発研究」全国調査の経過報告. *大学のメンタルヘルス* 4: 71-78, 2021.

<報告（査読なし）>

1. 国立大学保健管理施設協議会メンタルヘルス委員会大学院休退学調査研究班（丸谷俊之, 安宅勝弘（班長）, 高山潤也, 齋藤憲司, 佐藤武, 杉田義郎）. 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査ー第 18 報（令和元(2019)年度集計結果）ー, 2021.
2. 丸谷俊之, 安宅勝弘, 高山潤也, 齋藤憲司, 佐藤武. 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査ー第 17 報（平成 30 年度集計結果）ー. *Campus Health*, 58(1): 152-154, 2021.
3. 丸谷俊之, 安宅勝弘, 高山潤也, 齋藤憲司, 佐藤武, 杉田義郎）. 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査ー平成 29 年度調査結果を中心にー. *大学のメンタルヘルス* 4: 60-70, 2021（報告書の再掲）.

<紀要>

1. 丸谷俊之. 余韻の消滅. *東京工業大学保健管理センター紀要*, 8: 44-45, 2021.
2. 安宅勝弘, 丸谷俊之. 本学大学院における休学, 退学および留年の状況について（第 18 報）ー「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査（令和元年度）」との比較よりー. *東京工業大学保健管理センター紀要*, 8: 31-40, 2021.
3. 安宅勝弘, 丸谷俊之. 本学大学院における休学, 退学および留年の状況について（第 17 報）ー「大学院における休学・退学・留年学生に関する調査（平成 30 年度）」との比較よりー. *東京工業大学保健管理センター紀要*, 7: 31-40, 2021.

<学会発表>

1. 丸谷俊之. 三浦綾子における絶対性の措定と救いの文学. 第 68 回日本病跡学会総会（大分）, 2021 年 12 月.
2. 丸谷俊之, 安宅勝弘, 齋藤憲司, 高山潤也, 佐藤武. 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査第 18 報ー令和元（2019）年度の調査結果よりー. 第 43 回全国大学メンタルヘルス学会（東京医科歯科大学・オンライン）, 2021 年 12 月.
3. 太刀川 弘和, 高橋 あすみ, 布施 康子, 石井 映美, 松原 敏郎, 丸谷 俊之, 小田原 俊成, 河西 千秋, 三井 信幸, 岡本 百合, 渡辺 慶一郎, 川島 義高, 白鳥 裕貴, 菅原 大地, 梶谷 康介, 太田 深秀, 安宅 勝

- 弘. 「大学生の自殺予防プログラム全国開発研究」活動報告. 第43回全国大学メンタルヘルス学会（東京医科歯科大学・オンライン）, 2021年12月.
4. 齋藤 憲司, 安宅 勝弘, 高田 純, 丸谷 俊之, 片岡 彩, 宣 聖美, 岡安 朋子, 河西 正枝, 桶谷 雅人. 学生・教職員を結び付けるキャンパス連働—コロナ禍の相談活動—. 第43回全国大学メンタルヘルス学会（東京医科歯科大学・オンライン）, 2021年12月.
 5. 丸谷俊之, 安宅勝弘, 齋藤憲司, 高山潤也, 佐藤武. 大学院における休学・退学・留年学生に関する調査第18報（2019年度集計結果）. 第59回全国大学保健管理研究集会（広島大学・オンライン）, 2021年10月.
 6. 布施泰子, 丸谷俊之, 太刀川弘和, 高橋あすみ, 石見拓, 山本祐二, 守山敏樹, 安宅勝弘. 令和2年度(2020年度)国立大学死亡学生実態調査・自殺予防対策実施状況調査報告（速報版）. 第59回全国大学保健管理研究集会（広島大学・オンライン）, 2021年10月.
 7. 齋藤憲司, 安宅勝弘, 道又紀子, 丸谷俊之, 高田 純, 福岡俊彦, 三平満司. 非常時/新たな日常における教職員研修と学生支援をめぐるコミュニティ連働. 第59回全国大学保健管理研究集会（広島大学・オンライン）, 2021年10月.
 8. Marutani, T., Yasumi, K., Saito, K., Takayama J., & Sato, T. Survey on suicide among graduate students in Japan over 16 years. 20th WPA (World Psychiatric Association) World Congress of Psychiatry (Bangkok, Virtual), 2021年3月.

<学内研修講師>

1. 丸谷俊之: 渡航中の健康管理について. 渡航前オリエンテーション（オンライン）, 2021年7月.
2. 丸谷俊之: Health Management. 10月学院等新生安全衛生講習会（英語版）, 2021年10月（音声付教材配布）.
3. 丸谷俊之: 健康管理. 学院等新生安全衛生講習会, 2021年4月（音声付教材配布）.

高田 純 特任講師（カウンセラー）（2021年1月～12月）業績一覧

<論文（査読あり）>

1. 高田 純 (2021). 小学校における特別支援教育体制の認知が教師の意識に与える影響——健常児・障害児・教師に生じる影響に注目して—— 学校改善研究紀要, 3, 26-32.
2. 高田 純・齋藤 憲司・安宅 勝弘・丸谷 俊之・道又 紀子 (2021). コロナ禍における学生相談・メンタルヘルス相談 CAMPUS HEALTH, 58(2), 15-19.

<著書（分担執筆）>

1. 高田 純 (2021). 教育心理学 細尾 萌子・柏木 智子（編）小学校教育用語辞典（pp.75-102） ミネルヴァ書房
2. 高田 純 (2021). 発達障害の理解と対応 飯田 順子・石田 弓（編）新・教職課程演習第9巻 教育相談（pp.149-160） 協同出版

<論文（査読なし）>

1. 高田 純・齋藤 憲司（2021）．学生相談経験による連携・協働に対するカウンセラーの意識の相違と特徴 東京工業大学保健管理センター紀要, 7, 47-50.
2. 齋藤 憲司・安宅 勝弘・三平 満司・福岡 俊彦・丸谷 俊之・道又 紀子・高田 純（2021）．学生支援・保健管理活動の再整理と評価軸の概念化——学内サイクルと学外サイクルの連働—— CAMPUS HEALTH, 58(1), 215-217.
3. 高田 純・齋藤 憲司, 道又 紀子, 片岡 彩, 宣 聖美, 岡安 朋子, 河西 正枝（2021）．新型コロナウイルス感染症拡大に伴うカウンセリングの転機と対応の推移 CAMPUS HEALTH, 58(1), 332-334.
4. 高田 純（2021）．学生相談に関する近年の研究の動向 学生相談研究, 41（3）, 214-224.（招待有り）
5. 齋藤 憲司・高田 純・道又 紀子・片岡 彩・宣 聖美・岡安 朋子・河西 正枝（2021）．コロナ禍初期における機関内連働と相談体制整備——ワークシートを媒介としたカウンセラーの相互研鑽—— 東京工業大学保健管理センター紀要, 8, 16-30.
6. 高田 純（2021）．コロナ禍における遠隔授業と遠隔相談 東京工業大学保健管理センター紀要, 8, 46-50.

<報告>

1. 高田 純（2021）．第47回セミナー「コロナ禍での学校メンタルヘルス 傷つきからの回復に必要なこと——子どもの喪失に寄り添う——」に参加して 学校メンタルヘルス, 24, 72-74.

<学会発表>

1. 齋藤 憲司・高田 純・道又 紀子（2021）．コロナ禍における授業実践・各種発信と学生相談活動(1)——同一大学におけるコミュニティ連働—— 第39回日本学生相談学会論文集, 77.
2. 高田 純・齋藤 憲司・高橋 国法・土屋 明子（2021）．コロナ禍における授業実践・各種発信と学生相談活動(2)——オンラインで結ぶ大学間連働—— 第39回日本学生相談学会論文集, 78.
3. 齋藤 憲司・安宅 勝弘・道又 紀子・丸谷 俊之・高田 純・福岡 俊彦・三平 満司（2021）．非常時/新たな日常における教職員研修と学生支援をめぐるコミュニティ連働 第59回全国大学保健管理研究集会抄録集, 67.
4. 高田 純（2021）．COVID-19 禍におけるカウンセリング対応形態と面接回数・連携 第59回全国大学保健管理研究集会抄録集, 81.
5. 齋藤 憲司・安宅 勝弘・高田 純・丸谷 俊之・片岡 彩・宣 聖美・岡安 朋子・河西 正枝・桶谷 雅人（2021）．学生・教職員を結び付けるキャンパス連働——コロナ禍の相談活動——. 第43回全国大学メンタルヘルス学会プログラム・抄録集, 33.

<講演会・研修会>

1. 高田 純（シンポジスト）．発達障害学生への切れ目ない支援における医療機関と大学との連携2——発達障害学生を対象としたグループプログラムの実際—— 日本心理臨床学会第40回大会自主シンポジウム 2021年9月
2. 高田 純（講師）．コロナ禍での学生相談 令和3年度学生相談室相談員向け研修会 2021年6月

3. 高田純（講師）．相談対応のためのスキルアップ研修会 ピアサポーター研修 2021年7月
4. 高田純（講師）．相談対応スキルアップのための研修会——リプライ箱編—— ピアサポーター研修 2021年10月
5. 高田純（講師）．相談対応スキルアップのための研修会——伝える—— ピアサポーター研修 2021年12月

桶谷雅人 特任助教（カウンセラー）（2021年10月～12月）業績一覧

<学会発表>

1. 桶谷雅人・杉江征・慶野遥香・田附あえか・田中崇恵（2021）．複数相談窓口の比較による学生生活の変化と学生相談の機能の検討．第59回全国大学保健管理研究集会抄録集，66.
2. 谷田部翔・羽田舞子・相澤直子・桶谷雅人・中島範子・佐々木銀河・井出政行（2021）．筑波大学における「発達障害を有する大学生及び大学院生へのショートケアプログラム」の実施．第8回成人発達障害支援学会滋賀大会プログラム・抄録集，25.
3. 齋藤憲司・安宅勝弘・高田純・丸谷俊之・片岡彩・宣聖美・岡安朋子・河西正枝・桶谷雅人（2021）．学生・教職員を結び付けるキャンパス連働—コロナ禍の相談活動—．第43回全国大学メンタルヘルス学会総会プログラム・抄録集，33.

東京工業大学保健管理センター紀要 第9号

Journal of Tokyo Tech Health Support Center - Volume 9

令和5(2023)年2月1日 発行

編集・発行 東京工業大学保健管理センター

〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1